
Never look at the sun

てんすけ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Never look at the sun

【Nコード】

N8162B

【作者名】

てんすけ

【あらすじ】

舞台はイタリア。イタリアに点在する犯罪組織に法律だけで対処するのは不可能と判断した政府は、極秘で対犯罪組織“スピーア”を創設した。組織ができてからしばらく月日は流れた。そして、ある日の事、組織に所属する特殊構成員の一人である主人公アルバートは任務のため犯罪組織のアジトを制圧するがアルバートに異変が起こり、その日を境にアルバートの中で何かが変化し始める。そして、アルバートと周囲の人間はその不思議な運命に翻弄される。

C a m b i a m e n t o

―――
引き金。

―――
それはさまざまな暗示を含んでいる。

―――
あるときは“キツカケ”であり。

―――
あるときは“要因”であり。

——そしてあるときは“始まり”を暗示する。

——でも。

——俺達にとって。

——俺にとって。

——もっと単純で。

――直接的なもので。

――それ以外。

――俺にとって何の意味も持たない。

――些細な物だ。

―――ためらいなど何も感じない。

ドンッ・・・――。

一発の銃声が屋敷の中で木霊する。

その銃声は屋敷の中で叫び声を上げ、駆け巡る。

その音に驚いて、いっせいに飛び立つ鳥の羽音が辺りに広がり。

そして、消えてなくなった。

後には何も残らない。

ただ、より一層。

静寂が濃くなった。

その部屋には。

一人の少年が。

ただその場に立ち尽くしている。

それだけだ。

「……ターゲット抹殺確認。」
茶色の髪にグレーの瞳の青年は、静かにトランシーバーに告げた。

「よくやった。……エリオットと共に速やかに撤収しろ。いまそ
うちに隠蔽班を向かわせる。」
芯のある低い声がそう答える。

「……はい。」
青年はそう答えると、トランシーバーを胸ポケットにしまい、目を
閉じて深呼吸した。

青年がいる部屋の中は荒れ放題でいたるところに家具やガラスの破片が散乱している。

「・・・・・・・・・・。」

青年は散乱した部屋を見渡し、部屋の奥で血だまりにうつ伏せになったまま動かない男の姿をただ黙って見つめている。

窓から月の光がわずかながら差しこみ、薄暗い部屋を一層不気味に彩る。

「・・・・・・・・・・静かだな。」

青年は半分雲に隠れている月を見上げながら静かに呟く。

ギィ・・・・・・・・。

すると青年の後ろの古びた木製の扉がゆっくりと開いた。

「……誰だ。」

青年はゆっくりと振り返り、扉の周辺に広がる暗闇に意識を集中させた。

コツ……コツ……コツ。

フローリングの床を革靴の底で叩く音が近づいてくる。

次第に足音の主の姿を月の光が淡く照らし出して行く。

やがてその足音は青年の近くで止まった。

現れたのはまだ13歳くらいの幼い少年の姿だった。

その少年は銀色の髪に黒い瞳で、着ているスーツは少し着崩れていて、何かを終えた後なのか表情からはすこし疲労感が窺える。

「・・・エリオットか。」

青年は少し安心したように言う。

青年の前に現れたその少年はゆっくりと口を開いた。

「・・・アルバート・・・もう終わったの？」

「ああ・・・見てのとおりだ。」

「・・・こっちも片付いたから、終わったんならさっさと帰ろうよ。僕もう、眠たいんだからさ。」

少し小柄な少年は、目を眠そうに擦りながら言う。

「ああ、わかってる。でも・・・ちょっと待ってくれないか。」
そう言ってアルバートはエリオットに背を向け、再び横になったまま動かない男に視線を向けた。

「ん？・・・どういうこと？・・・いいから早く戻ろうよ。教官に怒られちゃうよ？」

エリオットはそう言いながらアルバートの近くに歩み寄った

「・・・そうだな・・・。」

アルバートは露骨に生返事する。

「もう・・・ちゃんと聞いてよ。・・・で、まーたこんなもの眺めてるの？」

「・・・ああ。」

「・・・ねえ、アルバート・・・。・・・もう動かないんだから見たって何にも起こらないんじゃない？」

エリオットは死体に視線を落とし、呆れた様子で言った。

「・・・・・・・・わかってる・・・・・・・・。」

アルバートは漫然と死体を見つめ続けながら言う。

アルバートはエリオットの呼びかけをよそに、胸ポケットからタバコを一本取り出し、口にくわえた。

シュボッ。

アルバートはまだ生々しく残る硝煙の臭いをかき消すかのように、タバコの煙をあたりに散らす。

「そういえばさ、前から思ってたんだけど・・・・・・・・アルバートって成人だったっけ？」

エリオットは疑いのまなざしでアルバートを見つめる。

「・・・・・・・・いつ生まれたかも知らない俺が、自分の年を知ってるわけないだろ。」

「えゝ．．．だからってタバコなんて吸っていいの？」

「．．．さあな．．．．．教官がくれるんだ．．．、吸ってもいいってことなんだろう．．。」

「ふーん．．．ねえ、じゃあ僕にも一本くれない？」

「バカいうな。俺はともかくお前はどう見ても未成年だろ．．．それに、そんなにもう本数が無いんだ、好きでもないやつにあげるなんてもつたいないことできるか。」

「ふんだ、ケチッ！」

ふてくされた様子でエリオットは言った。

「．．．．．。」

$\vdash$

しばらく二人は黙っていた。

「そう思うんだったら早く帰ろうよ……。……またそうやって考え事してんの？」

呆れた様子でエリオットは聞く。

「ああ……。」

「……前から思ってたんだけど、いつも何を考えてるのさ？」

「ああ……いや……こうして自分が殺した人間を眺めていれば俺でもなにか感じるものがあるかってな……。」

「あそ……。」

エリオットは溜息をつく。

「……。」

「……それで？ 収穫はあったの？」

「……いや。……何も。……引き金を引いたらこうなった。」

ただそれだけだ。・・・結局、俺には目の前の結果しか見えないな・
・。。」

「・・・そりゃそうだよ。僕なんかそんな風に思ったことだってないよ。」

エリオットは気だるそうに言う。

「・・・・・・・・。。」

アルバートは窓から見える月を見上げ、少し月に焦点ををあわせ、すぐに死体に視線を向けた。

「アルバート。・・・いい加減、早くしないと教官に怒られるよ？」

エリオットは両腕を組みながら言う。

「そうか・・・・。」

「~~~~っ!! もー早く帰ろうよ!! ・・僕、疲れたー!!」
エリオットはジダンダ踏んで駄々をこねた。

「・・・・・・・・わかったよ・・・・それもそうだな。もう・・・・こうしていても何もなさそうだ・・・・帰るか。」

アルバートをそういうと、持っていた携帯用の吸殻入れにタバコの吸殻を押し込み、死体に背を向け歩き始めた。

「ポイ捨てはしないんだね。」

エリオットはからかうように言う。

「……これも教官のからの教えだ。」

「ふーん……まあいいや……やっと帰る気になったことだし。」
エリオットは両手を広げわざとオーバーなりアクションを取った。

そうして二人は部屋の外へと出ると扉を静かに閉め、建物の出口へと歩き出した。

――そう。

――これが俺たちの日常。

――そして、これが全てあり。

――それ以上でもなく。

――それ以下でもない。

――極めて機械的で。

――単純で。

――感情の薄い。

――そんな日常だ。

「・・・・・・？」

ふとアルバートは不審そうな表情をし、足を止めた。

「・・・・・・どうしたの？」

エリオットは不思議そうにアルバートを見つめる。

「……いや、……いま物音がしなかったか？」
様子をうかがうようにアルバートは周囲を見渡す。

「そう？ 僕は聞こえなかったけど……。」

「……いま、足音が聞こえたような気がしたんだが。」

「気のせいじゃない？ ……最近アルバート、ボーっとしてるし」

「悪かったな、ボーっとしてて。」

「だって本当のことだし。大丈夫だよ、気のせい気のせい。」

「……そうか、……なら俺の気のせいかな。」

そう言って、アルバートが再び歩き出そうとしたときだった。

———ガシャンッ！！

「！！」

アルバートは突然ガラスのようなものが割れる音がして、素早く後ろと振り返った。

「い、今の音はっ！？」

エリオットも不意をつかれて一瞬戸惑う。

「向こうかっ！」

アルバートは叫ぶと、地面を蹴った。

――ヒュッ！！

アルバートは先ほどまでいた部屋の扉に向かって猛然と走り、扉を蹴破った。

――ドカンッ！！

「・・・・。」

アルバートは辺りを見渡すが人影らしきものは見当たらない。

アルバートはすぐさま窓まで走り寄り、外の様子をうかがった。

窓の外には当たり一面雑木林が広がっていて、建物らしきものはひとつも無い。

———ガサガサッ・・・。

目の前に広がっている森の奥で、木々が確かに揺れている。

その木々の揺れは確実に屋敷から離れようとしていた。

「・・・!! まだ生き残りがいたのかっ!」

アルバートはそう言うど勢いよく窓の外に飛び出した。

———ヒュッ!

「ち、ちょ! ここ四階・・・って降りちゃった。」

エリオットはそう言いながら、窓に駆け寄り身を乗り出した。

空を切りながらアルバートの体は猛烈な勢いで地面が迫る。

ズダンッ！！

激しい着地音とともに、アルバートは地面に着地した。

「・・・そっちかつ！」

アルバートは相手の進行方向を確認すると、怯みもせずに森の奥へと猛スピードで走っていく。

「・・・無用な心配だったかな。」

上からその様子を見ていたエリオットはそう言って軽い溜息をつくと、ポケットからトランシーバーを取り出した。

「・・・もしもし？アリエーテさん？なんかまだ生き残りがいたみたい。」

・・・うん・・・うん・・・あ、大丈夫、いまアルバートが追
って森の中に入ってったからさ。

だからさ、処理班にあとで森に来るように言っておいてよ。

・・・うん・・・うん、わかった。それじゃあ、またあとで。
・・・」

そう言ってエリオットはトランシーバーを切ると、視線を前に戻す。

「・・・」

少年は静まり返った雑木林の暗闇の奥をじっと見つめている。

アルバートが去った後の雑木林はもう物音ひとつせず、不気味なほ
ど静まり返っている。

「・・・まったく・・・いつもおいしい役持ってっちゃうんだか
ら。」

エリオットはそう言って溜息をついた。

――――ザッザッザッザッザッザッザッザッ・・・。

アルバートは猛然と暗い森の中を灯りも持たずに駆けていた。

雑木林の中は落ち葉が地面を覆い、いたるところに細かい起伏があるので油断すればあつという間に足を取られかねない。

アルバートの前を走る一人の男は、追っ手から何とか逃れようと必死の形相で走っている。

「……逃がすか。」

アルバートは懷から拳銃を取り出すと、走りながら安全装置を解除した。

「・・ハッ・・ハッ・・ハッ・・ハッ・・ハッ・・ハッ・・」

男は後ろを振り向く余裕もなく息も絶え絶えで、次第にスピードが落ちてきている。

おまけに、辺りは何処もかしこも同じ風景をしていて、男は一体自分が何処を走っているのかすらわからないような様子だった。

だが、そんなことにお構いなしにアルバートは走るスピードを維持したまま、銃の引き金を引くとそれを男の方に向けた。

――ドゥッ！！

「アがあアッ！！」

けたたましい銃声が森に響き渡り、アルバートの前を歩いていた男は叫び声を上げて脚を抱え込みながら倒れた。

アルバートの放った銃弾が男の右ひざをピンポイントで貫通したのだ。

「うああう……！！」

男は額から汗を滲ませながら、必死に痛みをこらえている。

男の膝からは骨の一部が皮膚から突き出し、夥しい量の血が流れ出ている。

「・・・・・・・・・・。」

アルバートは顔色ひとつ変えずに男のほうへ近づいた。

「ぐっ・・・・・・・・！」

男は激痛を必死に堪えなが、近づいてくるアルバートの方を見つめている。

「・・・・・・・・・・。」

男の姿を少しの間見下ろすと、胸ポケットから写真を何枚か取り出した。

「・・・・・・・・・・違う・・・・・・・・これも・・・・・・・・これも・・・・・・・・。」

アルバートはなにやら男の顔と写真を見比べているようだった。

「・・・・・・・・・・う・・・・・・・・！」

男はアルバートの行動に戸惑ってはいるが、痛みをこらえるので精一杯のようであった。

しばらく、アルバートは持っている写真と男の顔を交互に見つめ、それを繰り返した。

「これも違うな……ん？」
その時写真を見比べるアルバートの手が止まった。

「なんだこれ……あ……なんだ、一枚重なってたのか。」

アルバートの取り出した写真のうちの一枚にもう一枚の別の写真が
ピッタリと張り付いていたのだ。

「……あつたな……この男だな……よし、確認終了。」
そう言って、アルバートは写真を戻すと、拳銃からマガジンを取り
出しそれをポケットにしまった。

「……。」
男はアルバートがマガジンを仕舞うのを見て、一瞬ほっとした表情
を浮かべた。

ガチャ。

「?・・・・・・・・!!」

安堵の表情を浮かべていた男の顔が一瞬で凍りつく。

アルバートは銃を仕舞おうとしたのではなく、新しいマガジンを拳銃に装填しようとしていたのだ。

「・・・・何を驚いているんだ?・・・・まさか、俺が見逃すとも?」
アルバートは無表情のままそう言って、引き金を引くと男に銃口を向けた。

「ああッ!・・・・ひいっ!」

男は思わず声を漏らした。

「・・・・・・。」

ドンッ！・・・・・・ドンッドンッ！

人気の無い薄暗い森の中で三発の銃声が響き渡り、辺りの木々から
いっせいに鳥が飛びだした。

しかし、一瞬の銃声はあっという間に周囲に溶け込み消えてなくなった。

そして、そこに残ったのは頭と胸から血を流したままピクリとも動かない男と、それをただ呆然と眺める青年の姿があるだけだ。

「・・・・・・・・・・。」

アルバートの額にはベツトリと男の返り血が纏わりついていた。

「・・・・・・・・・・今度こそ任務完了だな。」
拳銃を仕舞いながらポツリと呟いた。

そう口にする青年の表情からは一分の乱れも窺えない。

「・・・・・・・・・・それにしても、派手に血がついちまったな・・・・・・・・。」
アルバートはそう言って、額についた返り血を手でぬぐった。

「・・・・・・・・。」

木々の間から差し込む月の光がうつすらと青年の額に付着した鮮血を照らし出す。

「・・・・・・・・。」

アルバートが手についた血をじっと見つめた。

その時だった。

――
・・に。

「!？」

突然、人の声のようなものが聞こえた。

アルバートは咄嗟に周囲を見回すが人の気配らしき物はしない。

それと同時に激しい耳鳴りと貧血のような感覚がアルバートを襲い、
思わずアルバートはその場に膝を着いた。

――
・・そ。
・・..
れには..
・・。

「ッ！！・・・な、なんだ！？・・・っ・・・！？」
強烈な頭痛がアルバートの頭に駆け巡り、アルバートは思わず額を
押さえた。

―。○

―。・・・。○

―。・・・。○

「・・・・・・・・つ。」

アルバートは額を押さえ、必死に頭痛が治まるのを待っている。

しばらくして、耳鳴りと頭痛がゆっくりと治まってきた。

「くっ・・・・・・・・。」

アルバートは額に手を当てたままゆっくりと立ち上がった。

「・・・・・・・・今は・・・・・・・・一体・・・・・・・・。」

アルバートは呆然と立ち尽くし、返り血のついた手のひらを見つめた。

そして、しばらくすると原因不明の耳鳴りと頭痛は完全に消えてしまった。

「・・・あの声は・・・なんだったんだ・・・？」

アルバートはそう呟きながら、先ほどまで眺めていた手のひらに付いた鮮血を見つめた。

しばらく、アルバートはその場にただ呆然と立ち尽くしていた。

辺りの暗闇がアルバートを包んだ。

「……おい!!……アルバート!!」

不意に後ろのほうから声が聞こえた。

「……!」

アルバートは声ができる方を素早く振り返り、暗闇に目を凝らした。

「おい、アルバートだろ!?!……俺だよ!……大丈夫か!?!」
中年の男性らしき声がアルバートに近づいてきた。

アルバートはこの声に聞き覚えがあった。

「……ゴルドーニさんですか?」

アルバートは確認するようにその男に問いかける。

「そうだ、俺だよ。」

その声の主はそう答えると、暗闇の中から声の主と思われる男と数

人の男がアルバートの前に姿を現した。

現れた声の主は清掃員のような格好をして、肥満気味でいかにも中年らしい顔をしている。

「・・・処理班つてのも大変ですね・・・こんな森の中まで。」

「なあーに、お互い様だろ？」

「・・・よくここだとわかりましたね。・・・見つけてもらえるまで一時間はかかると思いましたよ。」

「そりゃわかるさ。お前が持つてるそのトランシーバーには発信装置がついてるからな。何処にしようと、それさえ持っていればコンピュータであつという間に居場所が特定できるのさ。」

「・・・なるほど・・・知りませんでしたよ。ところでこれは・・・ルキアーノさんの指示ですか？」

「ああ。・・・エリオットの坊主がアリエーテさんに連絡してな。それを彼女がルキアーノさん伝えたらしい。」

「・・・そうですか。」

「ああ。・・・ん？・・・アルバート・・・お前なんか顔色悪いぞ？・・・どこか撃たれたのか？」

ゴールドーニは心配そうにアルバートを見つめる。

「あ・・・いえ。見ての通りかすり傷ひとつありませんよ。」
アルバートは両手を広げて見せた。

「じゃあ、その額についている血はお前さんのじゃないのか？」

「ああ・・・これですか？返り血ですよ。・・・下手に動くから狙いが外れたんですよ。」

「そうか。ならいいんだ。・・・とりあえずこれで顔拭けよ。」
そう言っ、ゴルドーニはポケットからハンカチを取り出した。

「いいんですか？・・・このハンカチ二度と使えなくなりますよ？」

「いいってことよ。第一、そんな格好じゃ車に乗れねえだろ？」

「・・・わかりました。・・・では、お言葉に甘えさせてもらいます。」

アルバートはそう言っ、ハンカチで額についた血を綺麗にふき取った。

「よし。・・・それじゃあ、もうルキアーノさんが車で待っている
そうだから、さっさと帰りな。ここはオレに任せておけよ。」

「わかりました。ではお先に失礼します。」
アルバートは深く頭を下げると、その場をあとにした。

数人の男達が死体処理のためやって到着し、その男達とアルバートは無言ですれ違った。

アルバートは元来た道を進み、しばらくして先ほどの屋敷にたどり着いた。

庭にはエリオットの姿があり、もう待ちくたびれた様子でアルバートの顔を恨めしいように見つめていた。

「もー！遅いよ！僕、もう眠くて眠くて死にそうだったんだよ！？」

「それは悪かったな。」

「全然、悪いって顔してないし。」

「・・・そうか？・・・これでも謝罪の気持ちを込めたつもりなんだけどな。」

「・・・アルバートは感情を表に出さな過ぎるんだよ。いつつも何考えてるのかわかんないような顔してるもん。」

「・・・ほっとけ。」

「・・・今回はアルバートにしちゃ、ちょっと遅かったよね？・・・
・なんか、アクシデントでもあったの？」
エリオットは不思議そうにアルバートの顔を覗きこむ。

「・・・ああ・・・まあ・・・ちよつとな。」

アルバートはそれを避けるかのように視線を逸らした。

「・・・ん？・・・やっぱりなんかあったの？」

「いや・・・別に。」

「ふうん・・・まあ、いいや。そんなことより早く帰ろう。」

「・・・そうだな。」

二人が庭から建物の正面口の外に出ると、既に到着していた隠蔽班の連中がまさに建物内に入ろうとしているところだった。

「・・・ああいう仕事って面倒くさそうだね。」
エリオットは連中を見つめながら言う。

「ああ・・・そうだな。」

アルバートは連中には見向きもせずには答えた。

だだっ広い田舎の道路を、二人は黙々歩く。

周りには人が住んでいるような建物はほとんどなく、水はけのよい土壌を利用したブドウ畑だけがぽつぽつとあるくらいだった。

静まりかえる辺りをぼんやりと月の光が照らした。

しばらくして、二人は一台の車の前にたどり着いた。

「・・・やつと着いたく帰れるうう。」
エリオットは深い溜息をついて言った。

「・・・。。。」
アルバートは黙ったままその車に近づいた。

・・・コン・・・コン。
青年が車に近づき窓をノックした。

ガチャ・・・。

車のドアがゆっくりと開き、中から若い男女が姿を現した。

男性のほうは、身長は180cm前半くらいで、少し筋肉質な感じだが、どこか紳士的な雰囲気を漂わせている。

女性のほうは、肩にかかる程度の黒髪のロングヘアーで、一見どこにでもいそうなOLのような服装をしていた。

「任務お疲れ、アルバート。・・・怪我はなかったか？」
男性は青年に気さくに話しかける。

「ルキアーノさん。・・・はい、特に負傷もなく、任務完了しました。」
アルバートは丁寧でゆっくりとした口調で答えた。

「そうかそうか。・・・それはなによりだ。」
男はそう言って笑みを浮かべた。

「エリオット、任務お疲れ様。」

今度は長髪で黒髪の若い女性がエリオットに声をかける。

「うん。アリエーテさんもお疲れ様。てかね、今回はアルバートがほとんど一人でやっちゃったから、あんまり出番がなかったんだ。」

「そう。まあ、無事で何よりだわ。」

アリエーテはエリオットに歩み寄り、頭を撫でた。

「っへっへっへ・・・。」

エリオットは満面の笑みで返した。

「・・・。」

アルバートは黙ったまま二人のやり取りを見つめている。

「ん？どうした、アルバート？」

「いや・・・親子でもないのによくやるなって。」

「っはは、まあ確かにそうだな。」

ルキアーノはニヤニヤしながらアルバートを見ている。

「・・・？・・・なんですか？」

「いや、お前もそういうのに憧れてるのかなってな。・・・あ、
そうだアルバート、俺も撫でてやろうか？」

からかう様にルキアーノは言った。

「・・・冗談はよしてください、気持ち悪い。」

「き、気持ち悪いって・・・ちょっと素でショック・・・。」

「・・・・・・・・。」

アルバートは呆れた様子でルキアーノを見つめている。

「ほら、ルキアーノ、アルバート。さっさと車に乗って。・・・置いてくわよ。」

いつの間にかアリエーテとエリオットは車に乗り込んでいた。

「ちょっとちょ待ってって！・・・てかそれ俺の車なんだけど・・・」

男性は慌てて車に駆け寄った。

「おい、アルバート、お前もさっさと・・・ん？」

「・・・・・・・・。」

ルキアーノの呼びかけが聞こえないのかアルバートはタバコを加えながら夜空を眺めている。

「おま・・・いつの間にタバコを・・・って・・・おい・・・聞いているのかアルバート？」

アルバートは黙って夜空を見上げている。

「・・・アリエーテ。・・・ちょっと待っていてくれ。」

「はいはい・・・りょーかい。」

「悪いな。」

そういうとルキアーノはアルバートの近くに歩み寄った。

夜空には夥しい数の星がちりばめられ輝いている。

二人は黙ってその星空を見つめていた。

「……ルキアーノさん。」

アルバートはタバコをふかしながら言う。

「……どうした？」

「……星が綺麗ですね……。」

アルバートはどこか遠くを見つめるように空を見上げながら言った。

「……ああ……そうだな。」

ルキアーノは夜空を見上げるアルバートの姿を見つめながら静かにそう答えた。

「ルキアーノさんは、……こうして星空を眺めているとき何を考えていますか？」

アルバートは夜空を見上げたままルキアーノに問いかける。

「……お前……たまに変な質問するよな。」

「……答えになってませんよ？……何を考えているんですか？」

「……そうだな……死んだ両親のことかな……それと……。」

一瞬、ルキアーノの表情が曇る。

「それと？」

アルバートはルキアーノに視線を向け聞き返す。

「……いや……なんでもない。」

ルキアーノは視線を逸らし、アルバートに背を向けた。

「……。」

アルバートは黙って自分に向けられた背中を見つめている。

「……そういうお前はどうかんだ？」

「・・・俺ですか？・・・俺は・・・星を見ていると・・・安心するんです。」

「・・・安心？」

ルキアーノは不思議そうに聞き返す。

「ええ・・・。星を見ていると自分の立ち位置が見えるような気がするんです。」

「・・・俺はどこで生きていて、どういう存在あって、なんの為にいまこうしてここに立っているか・・・それがわかる気がするんです。」

「・・・そうか？・・・俺には星を眺めるくらいじゃあ、そこまではわからんな。」
ルキアーノは答えた。

「あくまで、“そんな感じがする”だけですよ。・・・俺にとってそんなことを考えることに意味なんてないのはわかっています。」

「……そういうもんか……？」

ルキアーノはアルバートの方を振り向いて問いかける。

「ええ。……俺はいまここにこうして存在している。……その事実があるだけです。」

アルバートは表情を変えずに答えた。

「……お前も変わったやつだな。」

「そうですか？……俺から見れば、ルキアーノさんも相当の変わりの者に見えますけど。」

「ほっとけ。」

そんな会話が二人の間で少しの間続いた。

「……そろそろ時間だ……、行くぞ。」
再びルキアーノはアルバートに背を向けて言った。

「はい。」

二人は車の方へと歩き出した。

トントン。

ルキアーノが車の窓を叩く。

「おい、アリエーテ。これ俺の車なんだから俺が運転したいんだが……。」

「・・・もう・・・ならもっと早く戻ってきなさいよ。エリオット、もう寝ちゃったわよ？」

「っはは、ワリィワリィ。」

そうして、アルバートら四人は帰路についたのだった。

S i g n a l

しばらくしてフィレンツェの郊外に位置する、ある施設へとたどり着いた。

郊外に位置しているせいか、辺りには建物はほとんど見当たらない。

車は施設の正門の前で止まり、門の近くにいた警備員が車に近づいてきた。

「・・・お名前と身分証明書を提示願います。」

「ああ・・・“スピア”に所属しているルキアーノ・トルナトーレとアリエーテ・フィリーチェだ。」

ルキアーノはそう言って、自分の身分証を警備員に広げて見せた。

「・・・はい、確かに確認しました。お入りください。」

警備員は身分証を確認し終わると、丁寧にお辞儀して開門した。

車は入り口から少し入ったところで止まった。

「……まったく、毎回毎回めんどくせえチェックだぜ。」

「しょうがないでしょ？……こうでもしなきゃ、入りたい放題じゃない。」

アリエーテは呆れた口調で答えた。

「んなこたあ、わあーってるよ。それはそうとして……………」
アリエーテ。」

ルキアーノはバックミラー越しのアリエーテに視線を向けた。

「……なに？」

アリエーテはミラーに移るルキアーノのほうに視線を向けながら聞き返した。

「俺がブルーノ局長に任務の詳細を報告してくるから、悪いんだがアルバートをエリオットと一緒に寮に送ってやってくれないか？」

「・・・そうね・・・わかった。それじゃあ、頼むわよ。・
・後ほど、その詳細を私にも聞かせてね。」

「ああ・・・わかった。・・・アルバート。」

「なんですか？ルキアーノさん。」

「アリエーテの指示に従って、まっすぐ帰るんだぞ？」

「わかってますよ。・・・子供じゃないんですから。」
アルバートはエリオットの方にチラッと視線を向けた。

「あっ！今、僕のこと見ただろ！？見ただろ！？ムカつくく！僕だ
ってちゃんと任務こなしてるんだから子ども扱いしないでよね！！」

「誰もお前を子供だなんて言ってない。・・・そんなに必死になっ

て否定しないでいい。」

「~~~~!!ムカつく~~~~!!」

「こら、エリオット。車の中で騒ぐのはやめなさい。」
アリエーテが言う。

「だってさぁ・・・アリエーテさくん、コイツ、僕のこと子供扱いするんだよー!!」

「まったく、おめえらは・・・。」
その様子を見ていたルキアーノは深い溜息をついた。

「それで・・・なんの話だったんですか？ルキアーノさん？」
アルバートはルキアーノに問いかける。

「おおっとそうだった。．．．．．しばらくお前には休暇をやるからゆっくり体を休めろ。」

「．．．．．特に疲れはたまってはいませんよ？．．．いいんですか？」

「．．．ああ。だが．．．．．今のお前には休暇が必要だと俺は思う。．．．．．お前のコンディション調整も教官である俺の務めだ。」

「．．．．．わかりました。」

「よし、じゃあ俺は局長に報告してくる。．．．今日はお疲れさん。」
ルキアーノは車を降りると、三人に軽く右を振った。

そして、ゆっくりと中央の一番大きな建物のほうへと歩いていった。

「・・・さ、私たちも帰るわよ。」
アリエーテは助手席から運転席に乗り換えると、ハンドルを握り再び車を発進させた。

敷地内には中世を思わせる石造りの建物がいたるところにあり、ポツポツと灯りがともっている。

――ここは、“スピーア”と呼ばれる政府
認定の諜報機関の敷地内だ。

――“スピーア”は元々、他国の軍事情報
を盗み出すことを目的として設立された組織だった。

――しかし、最近は勢力を大きくのぼした
政治的テロ組織や一般犯罪組織など、法律の行使だけでは対処しき
れない者達に対抗するための実力行使の手段として活躍することが
多くなった。

――イタリアにはそうした犯罪組織の問題
を多く抱えている。

――例えば、政治的テロ組織を例に挙げて
みると、それらの組織はその行動の傾向から“左”“右”分けられ
る。

――特に“左派”に属する「赤い旅団」は

政府要人の襲撃などでテロ組織として名高い。

——そして一般犯罪組織であれば、世間的な名称ではマフィアがそれに相当する。

——有名な組織は「コーザ・ノストラ」「カモツラ」などだろう。

——そうしたマフィアに殺された著名人も多い。

——1992年5月23日に殺された検事長“ジョバンニ・ファルコーネ”もその被害者の一人だ。

——だからこそ、こうした犯罪組織に対抗するには法律の行使などと生易しいことだけでは到底不可能なことなのだ。

しばらく建物の敷地内を走ると、また建物が姿を現した。

車はその建物の前でエンジンを止めた。

その建物は他の建物とは様子はさして変わらず、全体的に白っぽい色をしていて中世の建造物をモデルにしたようになっている。

ガチャ・・・。

三人はドアを開け、車の外に出た。

辺りは日が落ちてしばらく経っていたので、建物周囲はほとんど真っ暗だ。

唯一石造りの回廊にはうっすらと灯りが灯っている。

「ふわぁ・・・眠い。」

エリオットはもう限界と言わんばかりに大きくあくびをする。

「・・・お前、自分の教官の前でよくそんな態度とれるな。」
アルバートは半ば呆れた様子で言う。

「だって眠いんだもん、仕方ないじゃん。・・・それに、アリエーテさんは確かに僕の教官だけど、お母さんみたいなものだし。」

「・・・母親・・・ね。」

アルバートはそう呟きながらアリエーテの方にチラッと視線を向けたが、すぐに元に戻した。

「ほら、二人とも早くケース取りに来なさい。」

アリエーテが車のトランクの前で催促した。

「あ、忘れてた。・・・今行きまーす。」

エリオットはトランクの方へ駆け寄った。

「・・・。」

アルバートは続くようにゆっくりとトランクの近くに歩み寄った。

アルバートとエリオットは自分達用のアタッシュケースをトランクから取り出し、アリエーテの前で横に並んだ。

「ふう・・・それじゃあ、二人ともここでいいわね。」
アリエーテは二人にそう告げた。

「はい、お疲れ様でした。・・・それじゃ、俺は先に行きます。」
アルバートは軽く会釈をすると建物の内部へと続く回廊を歩き出し、奥へと入っていった。

「・・・・・・・・・・。」
アリエーテは首をかしげた。

「・・・・・・・・どうしたの？アリエーテさん」

「ねえエリオット。・・・今日のアルバート様子がおかしくない？
・・・前はあんなに素っ気無い感じだったかしら？」

「うーん・・・確かに僕もそう思うけど・・・どうかな？・・・最近任務が続いているから、さすがのアルバートも疲れてるんじゃない

いのかな？」

「・・・そう。・・・そうね、そうかもしれないわね。・・・それじゃあ、私はもう行くわ。あんまり夜更かししないで早く寝なさいね。」

「うん、アリエーテさんもお疲れ様。それじゃあ、おやすみなさい。」

「ええ・・・おやすみ、エリオット。」
アリエーテは少しかがんで、エリオットの背丈に合わせると優しく微笑んだ。

「・・・っへへ。」
エリオットは嬉しそうに手を振ると、アルバートを追うように回廊の奥へと駆けていった。

「・・・。」
アリエーテは走り去るエリオットの後姿をただ黙って見つめていた。

———そのころ、ある一室の扉の前にたどり着いたルキアーノは、扉の前で服装を整えていた。

「……よし……こんなもんか。」

ルキアーノそう言うと、ドアを軽くノックした。

コン・・コン・・コンッ・・。。

「……入れ。」

中から少ししわがれた低い声がそう答えた。

「失礼します。」

ガチャ……。

部屋の奥に50代前後の中年の男性が椅子に深く腰をかけて座っていた。

部屋には数え切れないほどの本が棚に収納され、中央には額縁に絵まで飾られている。

「……。」

ルキアーノはゆっくりと男の近くに歩み寄り、その場で立ち止まった。

「今回の作戦、成功したようだな・・・ご苦労だった・・・ルキアーノ。」

「はい。・・・とはいっても今回私の出番はありませんでしたけどね。・・・アルバートの奴がよく働いてくれました。」

「・・・そうか。・・・さすが君の手解きを受けた“アルマ”・・・というわけか。」

「っはは・・・“アルマ” ってのはよしてください。・・・アルバートも人間ですからね。」

「・・・ああ、そうだな。・・・もちろん、私もそういう意味を込めて彼らをそう呼んでる訳ではない。」

「わかっていますよ。」

「それにしても今回はご苦労だった。……………これで、しばらく北部の政治家たちの中で、テロリストとの内通を目論む輩の数も減るだろう。」

しわがれた声の中年の男性は、皮製の椅子に深く腰掛けたままそう言った。

「はい、ありがとうございます。」

ルキアーノはゆっくりと丁寧に応えた。

「それと……………今回、任務で特に変わったことはなかったか？」

「……………ええ、これといって問題はありませんでした。」

「そうか……………最近のアルバートとエリオットの様子はどうか？」

「……………エリオットのほうはともかく、アルバートは最近任務に参加

させすぎじゃないでしょうか・・・？さすがのアルバートも少し疲労しているように見受けられました。」

「・・・それは仕方ないことだ。・・・アルバートは彼らの中でも優秀な人材だ。・・・なるべく早くチームとしての戦闘に慣れさせてさらに活躍してもらいたいと思っている。」

「・・・しかしブルーノ局長、最近アルバートは集中力が低下しているように見えます。・・・アルバートにはしばらく休暇が必要です。」

「・・・そうか。教官の君がそう言うんだ・・・真理なのだろう。わかった・・・確かに酷使しすぎて使えなくなってしまうては意味がない。・・・二週間ほどアルバートに休暇を与える。・・・その間にしっかりとコンディションを調整させておいてくれ。」

「わかりました。・・・では、隠蔽班の報告書をここに置いておきます。」

「ああ・・・わかった。」

「それでは、失礼します。」

「ああ。」

・・・ボタン。

「・・・・・・・・。。。」

ブルーノはしばらく、デスクに広げられた書類を見つめていた。

———その頃アルバートとエリオットは自分達の部屋の前にたどり着いていた。

「・・・それじゃあ、僕はもう自分の部屋に戻るから。・・・アルバートはどうするの？」

「・・・一服したら、武器の整備をして寝るつもりだ。」

「一服って・・・任務終わったときに吸ってたじゃん。・・・最近なんか、本数増えてない？」

「そうか？・・・まあ・・・そうかもしれないな。・・・吸いたくなるんだ・・・仕方ないさ。」

「・・・ま、いっか。・・・ほいじゃあ、いくね。お疲れさん。・・・あゝやつと寝れる♪」
エリオットは鼻歌交じりでさっさと部屋の中へと入っていった。

「・・・ああ・・・お疲れ。」

アルバートはエリオットが部屋に入るのを確認すると、自分も部屋の中へと足を踏み入れた。

ボタン・・・。

アルバートは特に物らしいものもない閑散とした自分の部屋の中に入ると、一回深呼吸をした。

そして、自分の机の上に歩み寄った。

「・・・さてと・・・。」

アルバートはアタッシュケースを机の上に置くとポケットから取り出したタバコを取り出し火をつけた。

アルバートは灯りをつけないまま、部屋の窓際に立ってタバコをくわえている。

窓からはうっすらと月の光が差し込みアルバートを照らした。

「・・・・・・・・。。」

アルバートは黙ったまま、窓の近くにたったまま月を見つめ今日の出来事を振り返った。

（それにしても一体・・・・・・・・あれは・・・・・・・・なんだったんだ・
・・あの声は・・・・・・・・一体・・。）

頭の中でそう呟くとアルバートはしばらく月を眺めていた。

そして、時間が流れアルバートは武器の整備を終えて、ベッドの上に座り込んだ。

「……寝るか。」

部屋の窓からは月の光がぼんやりと差込み、暗い部屋の中をわずかに照らした。



——こうしてまた一日が終わった。

そして、次の日の朝。

———チチツ・・・チチチツ。

辺りから、起床の時間を告げるように鳥のさえずりが聞こえてくる。

「ん・・・。。。」

アルバートはその音に気づき、うつすらと目を開く。

まだ日が昇りきっていないためか、部屋の中はまだ薄暗く、わずかに窓から日光が差しこんでいる程度だった。

「・・・朝・・・か。」

アルバートはベッドからムクリと起き上がり、部屋の中を見渡した。

「・・・着替えて、散歩でもするか。」

アルバートはそう言って、ベッドから降りて身支度を始めた。

——ここは“スピーア”いう特殊諜報機関だ。

———詳しいことはよくわからないが、俺はここに所属する特殊構成員の一人だ。

———実際は誰かにとって邪魔な人間を排除するために暗殺を請け負うのがオレたちの仕事。

———テロリストだろうが、政治家だろうが関係ない。俺たちに相手を選ぶ権利などない。

――ただ、決められた相手に向かって引き金を引くだけ。

――そう。

――そんな単純な作業の繰り返しだ。

アルバートは着替えを済ませると、窓の近くに立って外の様子を窺った。

小さな木々が建物を取り囲むように規則正しく配置されたその敷地内には辺りに人影も無く、閑散としている。

「・・・・・・・・しばらく休暇だったな。・・・・・・・・とはいったものの・・・・・・・・大して疲れがたまってるわけじゃないしな・・・・・射撃場で訓練でもするか・・・・・・・・な。」
そう呟くとアルバートは机の前で立ち止まった。

「・・・・・・・・射撃場は今日は・・・・・・・・誰が訓練してるんだっけ・・・・？まあ・・・・・・・・行けばわかるな。」
アルバートはそう言って机のうえにあったアタッシュケースを手に取り、部屋を後にした。

コツ・・・コツ・・・コツ・・・。

石畳の床を革靴が叩き、規則正しいリズムの音が回廊に響き渡る。

「・・・・・・・・。」

アルバートは黙々と誰もいない回廊をしばらく歩いた。

しばらく進むと宿舎の外に出て、そこからいくらかもしないうちに、
だだっ広い土のグラウンドに到着した。

グラウンドの周りには木々が生い茂っており、外から中の様子を見
られないように設計されているようにも見える。

パーンッ！・・・・・・・・パパーンッ！・・・・・・・・パンッ！・・・・・・・・
・・・・・・・・。

銃声が施設内に響き渡る。

「・・・やっぱり、誰か訓練してるのか・・・」
アルバートは銃声がするほうへと足を進めた。

ザッ・・・ザッ・・・ザッ・・・

アルバートは少し歩くと射撃場で黙々と訓練する人影を見つけた。

「・・・あいつは・・・。」
アルバートはゆっくりとその人物の方へと歩み寄る。

すると、自分に近づいてくる足音に気づいたらしく、アルバートの方を振り向いた。

「あれ？・・・アルバートじゃない。どうしたの？しばらく休暇だ
って聞いたけど。」

銃声の主は女性だった。

丁度アルバートと同年齢ぐらいの女の子だ。

見た目には17〜18歳くらいに見える。

髪はセミロングで色は黒と茶色の中間、アルバートと同じくグレーの瞳をしている。

「・・・やっぱりマリーだったか。」

「こんなところで拳銃ぶっ放してる女の子なんて数えるほどしかないと思うけど?・・・ところで私に何か用?」

構えていた拳銃を下げ、マリーはアルバートにそう問いかけた。

「いや・・・そういうわけじゃない。・・・ただ暇だから射撃訓練で
もしようと思ったんだ。」

「ふうん、なーんだ。」

「・・・不満そうだな。」

「・・・別に。だって、あんたの方から私のところに出向いてくるなんてあんまりないんだもん。なにか相談事でもあるのかと思って、期待しちゃったじゃない。」

「・・・さっきも言ったが俺は射撃の訓練をしに来たんだ。別に相談をしにきたわけじゃない。」

「・・・あつそ。」

マリーは深い溜息をついた。

「・・・？」

アルバートは不思議そうに首をかしげた。

「そういえばどう？ 最近の調子は？」

「ああ・・・あんまり、いい感じじゃないかな。・・・なんていうか、なにか落ち着かない感じがして・・・な。」

「へえ・・・、アルバートでもそんなことあるんだ。」
マリーはそういつてアルバートの顔をまじまじと見つめた。

「なんだ？・・・そんなに珍しいことでもないだろ？」

「珍しいわよ。いつも冷静沈着なあんたがそういう事で悩んでるの始めて見るもん。」

「そういうマリーこそ調子はどうなんだよ。」

「私？ 私はこのとーり元気があり余ってるわよ。」

「そうだな・・聞くまでもなかったか。」

「・・・なんか、無性に腹が立つ言い方ね。」

「気にするなって。」

「・・・にしても休暇中にまで訓練なんて、あんた、もうちょっと他に趣味でも探したらどうなの？」

「しょうがないだろ。俺はお前みたいに何でも食いつくようなタイプじゃないんだらさ。」

「失礼ね！私はそんな軽い女じゃありません！」
マリーはそう言って舌を出した。

「・・・はいはい。悪かったよ。・・・趣味・・・か・・・
俺はそういうの当分見つかりそうもないな。」
アルバートは苦笑しながら言った。

「なら私がアルバートの興味が湧くような趣味と一緒に探してあげようか？」

「・・・遠慮しておくよ。」

「むゝ・・・せーつかく人が誘ってるのに・・・。」
マリーは頬を膨らませた。

「・・・。。。」

「・・・な、何?・・・顔になんかついてる?」

「いや・・・マリーは明るくていいな。・・・うらやましいよ。」

「っふっふっふ・・・なうんてったって弾けんばかりのティーンズスピリッツが私の取り柄だもんね。」
マリーは誇らしげにそう言った。

「弾けすぎて時々やかましいけどな。」

「それは余計っ!!」

「ついて!・・・殴ることでもないだろ・・・。」

「ふうんだ。」

「まったく・・・。」

そんなやり取りが二人の間でしばらく続いた。

会話が一段落したアルバートは持っていたアタッシュケースの中から銃のパーツを取り出し、組み立て始めた。

「本当に訓練するんだ……真面目君だね。」
呆れた様子でマリーは言った。

「当然だ。……一日でも訓練を怠れば、腕が鈍る。」

銃を組み立て終えたアルバートはマガジンに弾を装填すると、右手で銃を構えた。

ドンッ！

アルバートの放った銃弾は見事に的の中心を的確に捉えた。

「おゝ・・・・・・・・・・。」

マリーは思わず声をあげる。

「・・・・・・・・。」

アルバートは今度は左手に銃を持ち替え、ろくに狙いもつけずに引き金に手をかけた。

ドンッ・・・・・・・・ドンッドンッ・・・・・・・・ドンッドンッドンッドンッ！！

銃弾はまるで吸い寄せられるかのように的の中心に全弾命中した。

「すごーい・・・・・・・・さすが、射撃の成績“特A”の実力は伊達じゃないわね・・・・・・・・。」

感心した様子でマリーは言う。

「・・・まだまださ。・・・実戦では的は止まっていたはくれない。」

「でも、すごいわよ。・・・私なんか成績“B＋”だったもの。」

「“B＋”から“特A”まで上げるのにそこまで時間はかからないさ。」

「・・・そりゃあんたならそうかもしれないけど、私にとっちゃ相当な難問なのよ。第一、“特A”の合格条件って120ヤード必中じやなかったっけ？そんなの、ホイホイ合格できるわけないじゃない。」

「ちなみに、的は通常の半分の面積だけだな。」

「ウソッ!? はぁ・・・余計無理じゃない・・・。あゝ私のウキウキ優等生作戦に早速黄色信号が・・・。」
マリーはがっくりと肩を落とした。

「なんだ・・・そのウキウキなんたらって・・・。」

「あ、こっちの話。」

「・・・そうか。・・・まあ頑張れよ。それにマリーだって他の科目で特Aあっただろ?」

「・・・もしかして、“マーシャルアーツ”のことってんの? こんな普通の女の子が“マーシャルアーツ”で特Aなんて逆に引くつて。それに私は弱い女の子を演じたいのっ!・・・第一、あんたもAでしょ? あんま変わんないじゃない。・・・てか、あんたいくつ特A持ってたんのよ?」

「五つ。」

「五つう！？……はぁ……聞くんじゃないわ……。」

「まぁ……マリーもその内それぐらいの成績は取れるから、心配すんなよ。」

「もう……適当なんだから。頑張ってなんとかなるんならこんな苦労しないわよ。……ねぇ、今度射撃のコツ教えてよ。」

「……俺は教えるのは得意じゃないんだ。」

「ケチ！……ちよつとくらい教えてくれったっていいじゃない。ねぇ、お願い！このとおくり！！」
マリーはそう言って両手を合わせた。

「……わかったよ……今度教える。」

「本当！？やた！約束よ？」

「・・・ああ・・・約束するよ。」

射撃の訓練をしながら、途切れ途切れだがそんな何気ない会話が二人の間で続いていた。

ザッ・・・ザッ・・・ザッ・・・。

「・・・？」

しばらくして、マリーはこちらに近づいてくる少女に気がついた。

「あれ？カテリーナちゃんじゃない！外に出てくるなんて珍しいわね。」

「・・・。。。」

その少女は黙ったままマリーたちの方へさらに足を進める。

マリーに近づいてきた少女はまだ幼い感じで、黒髪で三つ編みをしていた見た目は中学一年生くらいにしか見えない。

「・・・ルキアーノさんからアルバートに連絡・・・。」
少女は静かに告げた。

「ガーンッ！マリーちゃん、だーいショック！！・・・カテリーナちゃんは私に会いに来てくれたんじゃないのねー。」

マリーはあからさまにガツカリして見せた。

「……ルキアーノさんはなんて？」

マリーをよそにアルバートはカテリーナに言った。

「って……あんたもあんたで、リアクションのひとつでもとれての……もう……。」

マリーは溜息をついた。

「……“今日から休暇だというのに、すまないが任務を頼みたい。今回の任務は重要な役割を持っていてお前の力がどうしても必要なんだ。お前の部屋で待ってるから詳しい説明はお前の部屋の前ですることにする”……だって。」

カテリーナはまるで、機械のように用件をそのままアルバートに伝えた。

「……わかった。」

アルバートはそう言うのと、アタッシェケースに武器をしまい始めた。

「ちえ……もう行っちゃうんだ。あゝあゝ……ゆーとーせーは

引っ張りだこで羨ましいかぎりですこと。」

マリーはそういいながらグラウンドの土を蹴り上げた。

「・・・怒るなって。・・・ちゃんと約束は守るからさ。」

「本当？ 忘れないでよね！」

「ああ・・・わかってるよ。」

「カテリーナちゃんはこれからどうするの？」

「・・・私も帰る。」

「ええー！・・・私また一人かー・・・つまんないの。」
マリーはそういつて軽く溜息をついた。

「それじゃあ、俺は行くぞ。・・・またな。」
アルバートはそういつて歩き出した。

「・・・。」

カテリーナもアルバートを追うように歩き出した。

「・・・ほーいほい、じゃあね。」

マリーは後ろ姿の二人に手を振った。

ザツ・・・ザツ・・・ザツ・・・。

アルバートとカテリーナは黙々と歩き続けた。

「カテリーナ……最近調子はどうだ？」

「……別に。」

カテリーナは素っ気無い感じで返した。

「……………」

アルバートはしばらくカテリーナの様子を伺いながら歩いた。

彼らはこの施設では特別な構成員で通称“アルマ”と呼ばれている。

“アルマ”とはイタリア語は“武器”を意味する。

大体は、何らかの不慮の事故によって身寄りがなくなり自らも瀕死の重傷を負ったもの者や、身内に見捨てられ流れ着いた者がほとんどだ。

この施設は、イタリアの医療技術発展・新薬の開発などを二次的な目的としている研究施設でもある。

だが、新薬の開発などにはどうしてもリスクが付きまとう。

動物実験だけでは、安全性が十分に補償できないのが現実だ。

だからこそ、彼らのような「普通なら死んでいるはずの人間」を使って、劇薬に近いような新薬の研究を進めている。

当然ながら、彼らもこの施設に来る前は普通の人間だった。

そして、彼らは誰一人として例外なく悲惨な人生を歩みここに流れ着いた。

彼らはこの施設の試験体となる代わりに、過去の悲惨な記憶を清算し生まれ変わることを許される。

彼らが手にするのは、人間離れした身体能力・回復力とわずかな自由である。

彼らはその身体能力をうまく活用させるために、さまざまな薬品を投与される。

そうすることによって、殺人による人間なら誰しも一瞬は抱く“罪悪感”をごまかすことが出来るのだ。

「……カテリーナ。お前はいつもそうやって誰とも話さないでつまらないのか？」

「……別に……退屈はしないよ。」

「……そうか。」

何度か短い会話はあったものの、寡黙な二人の会話は長くは持たなかった。

俺たち“アルマ”には一人につき一人の教官がつき、任務では常に最低二人一組で行動を共にする。

だからこそ、俺たちにとって教官は特別な存在である場合が多い。

ある奴は自分の両親のように慕い。

ある奴は親友のように接する。

中には自分の教官を神のように崇拜している奴もいる。

・・・俺はそういうやつらに比べると、そこまで強い感情を持っているわけではないみたいだ。

強いて言うなら、“師弟”の関係。

・・・それが妥当な表現だろう。

だけど、それも決して俺たちの中で異常な光景ではない。

そして、薬に影響されて生まれる感情も存在し、薬の浸透度によって個々に差がある。

中には十五歳に満たない素体を使ったアルマ達もいる。

彼らが受ける薬による作用は人一倍強い。

だから、まだ年齢的に若いアルマは教官を守るためなら命すら投げ出す輩も珍しくない。

俺との接触が多いエリオットもそれに近いものがあり。

もちろん、いま俺の隣にいるカテリーナも例外ではない。

だが。

カテリーナには。

教官がいない。

ある事件で。

カテリーナは教官を喪った。

自分の過去を知らない俺にはよくわからない感情だが。

同情はできる。

カテリーナはここに来て、また身を引き裂くような過去を背負うことになってしまったのだから。

その事件をきっかけに。

カテリーナは自己を堅く閉じ込めるようになった。

しばらく歩くと、アルバートの部屋に通じる回廊の入り口に男の姿が見えた。

それはアルバートに指示を出しにきたルキアーノの姿だった。

「おう、アルバート。・・・悪いな今日休暇をもらったばかりだつてのに。」

「いえ・・・俺は別に疲れているわけじゃないので、気にしていません。」

「そうか。……カテリーナもご苦労さん。」

「……………」

カテリーナは黙って会釈した。

「……………ところで……………重要な任務ってなんなんですか？」

「ああ……………そうだな、説明しておこう。……………お前、“赤い旅団”って知ってるか？」

「……………確か1978年にモロ首相の誘拐殺人事件を起こした組織のことですよな？“赤い旅団”っていったら極左の代表的な反政府組織じゃないですか。……………バカにしないでください。」

「ワリイワリイ。一応確認のためにな。」

「……………それで、“赤い旅団”が今回の任務とどういう関係がある

んですか？」

「ああ・・・、奴らの幹部の一人が最近至る所で異常なほどの量の武器・爆薬の収集を行っていることがわかってな。・・・そいつが不穏な動きを見せているらしい。

おそらく、今度ローマで行われるサミットにあわせて何か行動を起こすつもりだろう。・・・確率はかなり高い。

・・・イタリアでもし、サミット中に要人暗殺事件でも起きてみる、・・・他国から信用を失うことになりかねない。・・・だからこそ、奴らが行動を起こす前に叩いておく必要があるんだ。」

「なるほど・・・それで俺たちの出番って訳ですか。」

「・・・そうだ。その計画の主犯格がどうやら“赤い旅団”の幹部の一人である“カルロ・ルートビツヒ”ってやつらしいんだ。・・・もともとコイツは、度々過激な行動に走ることでも有名なやつで、ブラックリストにも載っている。」

「だから・・・今回も事件を起こしかねない。・・・その前に消すってわけですか。」

「・・・その通り。今回は失敗は許されない。・・・確実に、カルロの息の根を止めるには・・・アルバート、お前の力が必要だ。」

「・・・それだったら別に俺じゃなくてもマリーとかがいるじゃないですか。」

「バカ言え。マリーは対多数人数用の構成員だ。・・・あいつの戦闘スタイルじゃ目立ちすぎる。」

「・・・それもそうですね。」

「ああ。・・・無理を言ってるのはわかっている。」

「無理って訳ではないし別にいいですよ。・・・わかりました。で・・・任務はいつ実行する予定なんですか？」

「明日の朝4時に作戦を開始することになっている。場所はローマ

の南側に位置する郊外“フラスカーティ”にある奴らのアジトだ。
……急で悪いな。」

「いいえ。……準備は大して時間はありませんから。……それで、作戦会議はいつ行うんですか？」

「丁度いまから、二時間後に局長室で行う予定だ。」

「……俺も参加しても構わないんですよね？」

「ああ当然だ。ぜひ参加してくれ。」

「それで……今回の敵のアジトの見取り図とかはあるんですか？
出来れば、作戦前にイメージトレーニングを行いたいんですが……」

「そうだな。……見取り図が手に入っているのなら、作戦会議で渡されるはずだ。……すまないがその時まで待ってくれないか？」

「わかりました。．．．．それじゃあ、会議が始まるまで武器の整備をしておきます。」

そういつてアルバートは歩き出そうとした。

「あっ！まで、アルバート。」

「．．．どうしたんですか？」

「そうそう、すっかり忘れてた。．．今日の昼ごろ、監視カメラに不審な人物の姿が映っていたのを警備のやつが見つけたらしい。

．．．まあ、こんなお粗末な侵入の仕方をしてるくらいだからおそらくテロリストの類ではないだろう。．．．たぶん、窃盗目的のこそ泥だと思う。

．．．この施設は外部に怪しまれないよう、あえてセキュリティは甘くしてあるから侵入は容易に出来るしな。でも．．」

「用心に越したことはない。．．．ですか？」

「・・・ああ、その通り。・・・もし、見つけたら殺さずに拘束してくれ。」

「・・・わかりました。・・・それじゃあ俺はカテリーナを送ってから部屋に戻ります。」

「おおっと、カテリーナがいたな。・・・そうだな、それじゃあ頼む。」

「はい。・・・カテリーナ、・・・行こう。」
アルバートはそう言ってカテリーナに手招きした。

「・・・。。。」
カテリーナはアルバートのほうへと歩き出した。

しばらく、アルバートとカテリーナの間には会話はなかった。

寡黙な二人は黙々と回廊に沿って歩き続けた。

「・・・なあ、さっきの話聞いてたか？」
アルバートはカテリーナのほうに視線を向け、確認するように聞いた。

「・・・・・・・・聞いてた。」

「そうか。それじゃあ・・・・。」

「・・・不審者を見つけたら用心しろ・・・・でしょ？」

「・・・わかっているならいいんだ。」
アルバートは視線を前に戻した。

しばらくして、二人は回廊が二手に分かれている場所にたどり着いた。

「それじゃあ、もうここからはいいよな？・・・いずれにせよ、これから先は女子寮だから、俺は入れないけどな。」

「・・・・・・・・・・。」

カテリーナは少しだけアルバートの方を向いたがすぐにまた歩き出し、女子寮のほうへといってしまった。

「・・・・・・・・。」

アルバートはカテリーナの後姿を眺めていた。

「・・・・・・・・さて・・・・・・・・そろそろ部屋に戻るかな。」
カテリーナの姿が見えなくなったのを確認すると、アルバートは歩き出そうとした時だった。

「・・・・・・・・ん？」

アルバートはふと足を止めた。

「・・・・・・・・これは・・・・・・・・。」

アルバートは不思議そうに地面にあるなにかを眺めていた。

コツ・・・コツ・・・コツ・・・。

その頃、カテリーナはひたすら自分の部屋へを歩いていた。

しばらく歩き、回廊の角を曲がった辺りの扉の前でカテリーナは足を止めた。

「・・・・・・・・。」

カテリーナはポケットから、鍵を取り出し扉の鍵穴にそれを差し込んだ。

「・・・・・・・・？」

カテリーナは鍵を差し込んだ瞬間、異変に気がついた。

「鍵が・・・・・・・・開いてる。」

カテリーナは音がしないよう静かに鍵を抜き取りポケットに戻すと、そっと扉の隙間から中の様子をのぞいた。

ガサツ・・・・・・・・ゴソツガサツ・・・・・・・・。

隙間から、部屋の中をブツブツと呟きながら物色する見知らぬ男の姿が見えた。

「・・・・・・・・ったく・・・・・・・・金になるようなもん、なーんにもねえじゃねえか・・・・・・・・。こんなデツカイ建物なんだから少しはなんかあると思っただけどなく。」

男の姿は窓から漏れる日の光に照らされて、はっきり見えている。

「・・・・・・・・・・。」

カテリーナは黙って男の様子を見ていた。

「なんかねえかゝ・・・お？」
すると、男の動きが止まった。

「・・・これ結構金になるんじゃないのか？」
そう言って男が取り出したのは、銀製の腕時計だった。

「・・・！！」
カテリーナの表情が一瞬にして変わる。

「・・・ん？なんか名前書いてあんな・・・なにに・・・」
カテリーナ・マリウス”・・・？なんだこれ女の時計か？」
そう言いながら、男が腕時計を眺めていたときだった。

「返して。」

不意に、扉のほうから声がした。

「おわっ！だ、誰だっ！？」

男は突然声がして慌てて、ドアの方を振り向く。

男が振り向くと、そこには自分と身長差50cmはあるだろう小さな女の子が立っていた。

「それ、返して・・・！」

カテリーナはさっきより強い口調で男に言う。

「・・・な、なんだ・・・ただのガキか。脅かしやがって・・・おい・・・これ、嬢ちゃんのかい？」

男が腕時計を見せた。

「・・・。」

カテリーナは大きく首を縦に振った。

「そうかい・・・悪いな。残念だが・・・もうこれは俺のだ。そこをどきな・・・嬢ちゃん。」

男はなめきった口調でカテリーナに言う。

「それ・・・返して。」

カテリーナは男の言葉を無視して繰り返す。

「・・・嬢ちゃん。・・・どけ、って言ってるの聞こえないのかい？」

「・・・返して。」

カテリーナは再度繰り返した。

「・・・嬢ちゃん。俺はそんな手荒な真似はしたくねえんだ・・・頼む、そこをどいてくれないかい？」

男はニツコリ笑いながら言った。

「・・・返して。」

カテリーナはそれでもなお繰り返した。

「・・・おい、クソガキ。・・・あんま調子乗ってると、酷い目に

遭うぜ？」

男の表情は一瞬にして変わり、その男は懷から拳銃を取り出してカテリーナに向けた。

「・・・返して。」

カテリーナは銃口を向けられても表情一つ変えず繰り返す。

「しつけない・・・これは俺のもんだって言ってんだろ・・・クソガキ。」

男の顔から笑顔は消えていた。

「・・・返して。」

「・・・てめえ・・・いい加減にしろっ!!」

男は怒鳴り散らした。

「・・・どうしても・・・返してもらえないの?」

カテリーナはまっすぐ男の目を見ながら、ゆっくりと問いかける。

「何度も言ってるだろうっ！これはもう俺のもんだっ！・・・さっさとそこをどけっ！！」

男はそう怒鳴った。

「・・・そう。じゃあしょうがないよね・・・。」

カテリーナはそう言って深呼吸すると、ゆっくりと目を閉じた。

「・・・あ？・・・何の真似だ、クソガキ。」

男が首をかしげながらいった。

「・・・。。。。。。さよなら。」

「・・・なんだ？・・・まじないかなんかか・・・？」

――――「エリミ・・・」

カテリーナはそう口にしようとした瞬間だった。

ガッシャーーンツッ！！！！

突然男の後ろの窓ガラスが粉々に吹きとんだ。

「!!!!」

カテリーナは突然の音に目を見開いた。

窓の外からガラスを破って人が飛び込んできたのだ。

「おうわああっ!!」

男は突然の奇襲に思わず叫び声を上げた。

ヒュオッ!!

その男性は目にも留まらぬすばやい動きであつという間に男の背後に回り、男の腕を締め上げながら床に押さえ込んだ。

「ぐうわあああっ!!!!」

男は突然の奇襲になすすべもなく、床にたたきつけられた。

「大丈夫か、カテリーナ!？」

男をしっかりと押さえ込んでのは、先ほど別れたはずのアルバートだった。

「……大丈夫。」

カテリーナは男が近くに落とした自分の腕時計を拾いながら言った。

「そうか、ならいいんだ。」

「イデデデッ!!なんだデメエは!？」

男は信じられないほどの力で自分の腕を締め上げるアルバートに叫んだ。

「お前に名乗る義理はない……。それより……。カテリーナ。」

アルバートは片腕で男の腕を押さえつけたまま、カテリーナの方に視線を向けた。

「・・・・・・・・何？」

「・・・・・・・・お前・・・・・・・・まさか“あれ”を使おうとしてたんじゃないだろうな？」

アルバートは、険しい表情でカテリーナを見つめた。

「・・・・・・・・だったら？」

カテリーナはふてくされた表情で言う。

「“あれ”はそんな簡単に使っていないものじゃない。・・・・・・・・いまの行動は軽率だったぞ。」

アルバートは厳しい口調で告げた。

「しょうがないじゃない・・・・・・・・ついカッとなっちゃったんだから。」

カテリーナは視線を逸らしながら言った。

「・・・・・・・・とにかく、“あれ”はそんなに簡単に使っていないものじゃないんだ。・・・・次から気をつけろよ？」

「・・・・・・・・。。。」

カテリーナは返事をしなかった。

「ぐう！・・・・・・・・て、てめえら一体・・・・・・・・くそっ・・・・・・・・なんてバカだ・・・・・・・・。」

男は必死に抵抗するが、アルバートの右腕はしっかりと男の腕を押さえ込んでいてビクともしない。

「・・・・・・・・命拾いしたな、お前。・・・・俺がいなかったら今頃死んでる。」

「・・・・・・・・ぐっ・・・・・・・・知ったことか！・・・・・・・・離せ・・・・・・・・く、くそ・・・・・・・・。」

「……ルキアーノさんに連絡するか。」
そう言ってアルバートはポケットから携帯電話を取り出し、ダイヤルした。

「……もしもし？……ルキアーノさんですか？……さっき
言っていた例の不審者の身柄を拘束しました。……はい。……
……はい、わかりました。……それじゃあ、その人達に身柄を
引き渡せばいいんですね？……はい。……それじゃあ、また
会議で。」

アルバートはそう言って、電話を切った。

アルバートが男の身柄を拘束してから数分後に施設の人間がやって

きて、男の身柄を引き取った。

残されたカテリーナとアルバートは散らかってしまった部屋の後片付けを始めた。

「・・・悪いな、派手にガラス割っちゃって。」

「・・・いいの。・・・あの状況では窓からの奇襲が最も効果的だったし。」

「・・・そうか。さっき、見慣れない足跡があったから気になって足跡を追って言ったらこの通りだったんだ。・・・カテリーナ。」

「・・・なに？」

「・・・そんなに大事な時計なのか？」

「・・・大事。・・・だってこれは・・・教官が・・・レナートさんが私にくれた大切な贈り物だから。」

「・・・そうか。・・・さっきは悪かったな。・・・俺も強く言い過ぎた。」

「・・・別にいいよ。・・・ありがとう、アルバート。」
カテリーナはうつすらと笑みを浮かべながら言った。

「そっちのほうがつつといい。・・・その表情を大切にな。」

「えっ・・・あ、うん。」

カテリーナは視線をそらし恥ずかしそうに言った。

「・・・それじゃあ、片付けは大体済んだから俺はそろそろ局長室に行くよ。」

アルバートがそう言ってドアノブに手を掛けた時だった。

「ア、アルバート・・・。」

カテリーナはアルバートを呼び止めた。

「・・・どうした？」

「あの・・・また今度マリー達と一緒におしゃべりとか・・・するの？」

「?・・・ああ。・・・そのうちそういうこともあると思うけど。・・・どうした？」

「……あの……その……。」

カテリーナはなかなか視線を合わせようとせず、アルバートはそれを見てピンときた。

「……歓迎するよ。……マリーのやつも喜ぶよ、きっと。……いつでもおいで。」

「本当？」

「ああ、本当さ。約束するよ。」

「……うん。」

そう言ってカテリーナは笑みを浮かべた。

約束。

そう・・・確かに約束した。

その後、アルバートは局長室で会議に参加して作戦の詳細を確認し、アジトの見取り図をもらい自分の部屋へと戻った。

ガチャ・・・ボタン。

アルバートは部屋に戻ると、早速アタッシュケースの中にある武器の整備を始めた。

「・・・・・・・・。」

辺りはすっかり暗くなり風で木々の葉が擦れる音が聞こえてくる。

うつすらと窓から照らし出す月明かりが金属光沢のある拳銃をより一層不気味に照らし出している。

「・・・・・・・・。」

アルバートはしばらく黙々と武器の整備を続けていた。

しばらく時間が経ち、武器の整備を終えたアルバートはアジトの見取り図を参考に最後のイメージトレーニングに取り掛かっていた。

「・・・・・・・・。」

アルバートは椅子に座り、目を瞑ったままイメージすることに精神を集中させた。

・・・・トントン。

その時、ふとドアを叩く音がした。

「・・・誰だ。」

アルバートはドアに向かって静かに言う。

「私、私。」

その声には聞き覚えがあった。

「・・・マリーか。・・・どうぞ。」

ガチャ・・・。

アルバートの声に答えるようにドアがゆっくりと開いた。

「やつほく、元気？」

「やつほく・・・じゃないだろ・・・どうしたんだ？こんな夜に・・・ここ男子寮だぞ？」

アルバートは不思議そうにマリーに問いかけた。

「しいゝ！声が大きい！・・・警備の人がいなかったからちよつと来てみたの。」

「・・・。。。」

アルバートは呆れたように溜息をつく。

「・・・聞いたわよ、カテリーナちゃんから。あんた、お手柄らしいじゃない。」

「・・・ああ、まあな。」

「ねえ・・・カテリーナちゃんが・・・使おうとしたのって本当？」

「ああ・・・本当だ。・・・確かにあの様子は“あれ”を使おうと
していた。」

「・・・・・・・・。」

マリーは黙ってうつむいた。

「まったく・・・、あれじゃアリを殺すのにバズーカ砲を使うよう
なもんだ。・・・どうも、カテリーナは感情的になりすぎるところ
があるな。」

「そうね・・・でも、あんな事件があった後だし・・・無理もない
よ。」

「そうか。・・・・・・・・それもそうだな。」

「ねえ・・・アルバート。」

マリーはうつむいていた顔を起こして言う。

「・・・なんだ？」

「アルバートは・・・“あれ”・・・そんな簡単に使ったりしないわよね？」

「・・・当たり前だろ？ 相当のことがない限り使わないつもりだ。」

「そう・・・ならいいんだけど。」

「・・・どうした？ 別にお前がどうにかなるわけじゃないんだから、そんな顔する必要ないだろ？」

「・・・そうね。」

マリーは視線を落として言った。

「・・・そろそろ俺、寝ないといけない時間だから寝るな。」

「あつ、そっか・・・明日早いんだったわよね。ごめんね、邪魔しちゃって。」

「いや、別にいいんだ。」

「それじゃあ私、行くね？」

「ああ、またな。」

「うん。」

マリーはそう言ってドアノブに手をかけた。

「あつ、そうだ・・・アルバート。」

「ん？まだなんかあるのか？」

「・・・・・・・・おやすみ。」

「・・・・・・・・？・・・・ああ・・・・おやすみ。」

マリーは笑みを浮かべると、ドアをゆっくりとドアを閉めた。

「・・・・・・・・なんだ・・・・？あいつ・・・・。」

アルバートは不思議そうに首をかしげた。

「・・・・・・・・寝るか。」

アルバートはそう言ってベッドに横になり目を閉じた。

大して時間も経たないうちにアルバートは眠りについた。

**D
e
s
t
i
n
o**

o

なんだ？

遠くで声する。

男か女かもわからないようなかすかな声が。

——つ！！

その声は何かを叫んでいるようにも聞こえる。

・・・誰なんだ？

……め……て！

おい、誰なんだよー！！

○

○

○

アルバートは目を覚ました。

額からは汗が滲み出し、呼吸も荒い。

「・・・いまのは・・・あの森の中で見た・・・。クソツ
！・・・一体なんだんだ・・・。」

アルバートは頭を押さえた。

「くそっ・・・最近、やっぱり疲れてるのか？・・・いままでこんなことは無かったな。」

アルバートは溜息をつき、ふと時計を見た。

時計の針は午後10時半を少し過ぎていた。

「・・・4時に作戦決行ならそろそろ集合の時間か・・・。」

アルバートはベッドから起き上がると、身支度をを済ませ、アタッシューケースを片手に持って集合場所へと向かった。

しばらく歩くと、大きな駐車場に到着した。

そこにはルキアーノとアリエーテとエリオットの三人の姿があった。

「・・・集合しているメンバーはこれだけですか？」
アルバートは不思議そうにルキアーノに聞く。

「そんなわけ無いだろ・・・。今回の作戦はお前たち戦闘組以外はすでにターゲットの屋敷近くで待機してんだよ。」

「なるほど・・・。。。」
アルバートはそういいながらエリオットの方を見た。

「・・・な、なんだよ。」

「・・・珍しく寝起きがいいんだな。」

「子ども扱いすんなよ！僕だってやるときはやるんだよ！だっ！」

「・・・そうか。じゃあ、任務でもその元気で頼むぞ。」

「わかってるよ。今回は僕が全部倒しちゃうからね。アルバートの分なんて残してやらないからね。」

「そうか、そいつはありがたいな。」

「っへっへっへ。」

エリオットは笑いながらそう言った。

「二人とも・・・そろそろ行くわよ。」

「はぁーい。」

アリエーテの声を聞いてエリオットは勢いよく車に乗り込んだ。

「・・・。」

アルバートは軽い溜息をついてから、ゆっくりと車に乗り込んだ。

こうして、アルバート一行はターゲットの屋敷へと車を進めるのだ
った。

車は人気のあまり無い小さな街の外れにあるという屋敷を目指して
いる。

辺りは当然ながら真っ暗で、辺りに街頭も無くまさに一寸先は闇だ。

コンクリートの道は途中から舗装されていない起伏の激しい野道へ
と変わる。

しばらくして、アルバートたちを乗せた車は周囲に建物も見当たらない道で止まった。

辺り一面、ほとんどが雑木林で覆われていて虫の鳴き声以外物音ひとつしない。

「ん？・・・ねえ何でこんなところで止まったの？」
エリオットは少し驚いた様子で言う。

「お前会議で何を聞いてたんだよ・・・当たり前だろ。ターゲットの屋敷の近くで車を止めたら相手に気づかれる可能性があるんだ。・・・ここからは徒歩で接近する、それが普通だ。」
アルバートは呆れた口調で言う。

「へんっ！そんなことぐらいわかってるよ！」

「エリオット、車の中で騒ぐのは止めなさい。」
アリエーテはエリオットに言った。

「むう・・・はぁーい。」

「・・・本当に大丈夫なのか？」
アルバートは不安そうに言う。

「しつこいな、大丈夫だってば！」

「・・・・・・・・まあいいか。・・・・ところで、ルキアーノさん・・・・確認しますが、屋敷にいる人間は全員殺していいんですよね？」

アルバートは運転席に座っているルキアーノに確認を求めた。

「・・・・ああそうだ、遠慮はいらない。今回の目的はカルロ・ルトビツヒとその一味の抹殺だからな。」

「・・・・わかりました。」

「・・・・アルバート。・・・・それからエリオット。ルキアーノはミラー越しに二人に視線を送る。」

「え？・・僕も・・ですか？」

エリオットは不思議そうに聞き返す。

「・・・・・・・・。」

アルバートは黙ったままルキアーノの目を見た。

「・・・一応俺からも確認するが二人には必ず守ってもらいたいことがある。・・・なんだかわかるよな、アルバート。」
ルキアーノは運転席から顔を二人に向けながら言った。

「・・・任務中に姿を見られたら例外無く、目撃者ともども殺す・・・ですよな？」

「ああ・・・そうだ。俺たちの組織“スピア”はイタリア政府が極秘で結成した反政府組織掃討を目的とした組織だからな。・・・お前らの存在が世間の明るみに出ることは絶対に避けなきゃならん。・・・だからこそ、外部に秘密を漏らさないように行動してもらいたいんだ。・・・わかるよな？」

「ええ・・・わかります。」

「エリオットもわかったか？」

「わかってますよ。もともと僕はゼーんぶやつけるつもりですし。」

「……ならいいんだ。……よし、それじゃあそろそろ行くぞ。……アリエーテも準備はいいな？」

「ええ。……いきましょう。」

「レッツゴ〜。」

「お前……なんか勘違いしてないか……？」
アルバートは溜息をつきながら呟いた。

四人は車を降りると屋敷のある方角へと歩き出した。

――ザツ・・ザツ・・・。

夜空には満月が輝き、暗い夜道をうつすらと照らす。

しばらくして、四人は何件か建物が密集している住宅街にたどり着いた。

「……夜とはいえ、こんな住宅街でドンパチやって大丈夫なんですか？」

アルバートはルキアーノに問いかけた。

「ああ……。ここは、やつらが外部の人間を近づけないように買収した建物の郡だ。……一般人は一人もいねえよ。……やつらは結構な人数がいるらしいが……。アジト以外には人すら住んでいないって情報だ。」

「……なら大丈夫ですね。」

「……ああ、一般人を巻き込まないように気をつける必要は全くない。……よし、作戦決行時間まであと10分ってとこだな……。そろそろ二人とも配置に着くんだ。」

「……俺とアリエーテは外部から建物の様子を随時連絡する。場合によってはこの前みたいに、また逃走者が出てくるかもしれないからな。……もしそうなったときは俺とアリエーテで片付ける。」

「わかりました。……それじゃあ、行ってきます。」

そう言ってアルバートアタッシュケースから武器を取り出し、服に

拳銃とナイフを忍ばせた。

「・・・おう、気をつけてな。」

「ええ、・・・わかってますよ。」

「エリオット、それじゃあ気をつけてね。」

アリエーテはかがんでエリオットの顔を見つめながら言った。

「うん。アリエーテさんも気をつけてね。ズバズバツと僕が片付けてきちゃうね。」

エリオットは笑みを浮かべていった。

「ええ。」

アリエーテも答えるように笑みを浮かべた。

アルバートとエリオットは二人に別れを告げ、屋敷方へと歩き出し

た。

「それじゃあ、僕が正面から突破するんだったよね？」

「ああ、そうだ。俺は裏口から制圧する。」

「今回のターゲットのカルロって奴はどっちが殺ってもいいんでしよ？」

「そうだ。見つけたほうが殺す。」

「よし！僕が絶対先にやっつけちゃうもんね。」

「・・・張り切るのはいいが、あんまり調子にのってドジったりするなよ？」

「わかってるって。それじゃあ、ここでお別れだね。お互いガンバろう。」

「ああ・・・。・・・よし、そろそろ作戦決行の時刻だ。・・・時計合わせろぞ。」

「ほいきた。」

そう言ってアルバートとエリオットは自分の腕時計に手をかけた。

「いくぞ・・・五秒前・・・4・・・3・・・2・・・1・・・
・セット。」

「オッケー、セット完了。それじゃあ、お互いガンバろう。」

「ああ・・・。」

アルバートとエリオットはそう言って屋敷の近くで二手に分かれた。

「よし・・・作戦開始。」

エリオットはそう呟くと屋敷の正面玄関に近づいていった。

正面玄関には午前4時近くだが見張り役らしき男が一人立っていた。

「まあ、想定の範囲内だね。よし・・・。」

エリオットはそう言うと、見張り役らしき男のほうに近づいた。

見張りの男は、すぐに自分に近づいてくる小さな少年の存在に気がついた。

「・・・おい、坊主。・・・こんな、夜中に何のようだ？」
男はジロジロとエリオットの方を見つめながら言う。

「こんばんは。・・・あの・・・実は僕、ここの近くで犬と散歩してたら、犬とはぐれちゃって・・・この辺で犬を見かけませんでしたか？」

「・・・こんなクソ早い時間に散歩だあ？」

「はい・・・、僕、学校まで遠いから朝早くに犬の散歩を済ませないといけないんです。・・・おじさんはこの辺で犬を見かけていませんか？」

「そりゃしょっちゅう見かけるさ。・・・この辺は野良犬が多いからな。」

「本当ですか！？じゃあ今その犬の絵、描くからみてください！」

「チツ・・しょうがねえな・・・たく・・・。・・・。・・・。まあこの辺うろろさせても困るからな・・・。終わったらさっさと帰れよ。」

「はい。」

エリオットはそう言ってポケットからメモ帳と万年筆を取り出し、犬の絵を描き始めた。

「・・・・・つと・・・出来た！」

エリオットは出来上がった犬の絵が描いてあるメモ帳を男の前で広げて見せた。

「・・・よし・・・どれどれ・・・。」

男はエリオットの背丈に合わせてしゃがみ込むとメモ帳を覗き込んだ。

「どうですか？・・・見覚えありませんか・・・？」

「・・・この犬は見かけてねえな・・・。」

「・・・なにか、少しでも思い出しませんか？」

「・・・ああ、無理だ。・・・やっぱり、俺は見かけてねえ。」

「そう・・・ですか・・・。」

「・・・ああ。・・・わかったんなら、さっさと帰りな。」
男はしゃがんだままエリオットを顔を見て言った。

「・・・わかりました。・・・それじゃあ・・・おじさん・・・
代わりに・・・。」

「んだよ・・・まだなんかあるのか？」

「死んで。」

エリオットが笑いながらそういった瞬間だった。

ヒュオッ！！

ズブっ。

ものすごいスピードで男の右目に何かが突き刺さった。

そう。

それは、エリオットが先ほど使っていた万年筆だった。

「ギィヤアア！！」

男は突然右目を襲った暗闇と激痛に思わず悲鳴を上げた。

「ハハハッ・・・痛いのお？」

エリオットは口元に笑みを浮かべながらすばやく男の頭を両腕でしっかりと掴んだ。

———ゴキーンッ。

鈍い音と共に男の首が360度捻転する。

「あつ！・・・。。。。。」

男は、口から泡のような物を吐き出しながら崩れるようにうつ伏せに地面に倒れこんだ。

「あははっ・・・馬鹿なやつ。こんなところでこんな時間に散歩してるやつがどこにいるのさ。」

エリオットはせせら笑った。

「さてっと・・・」

男の死体に別れを告げるとエリオットは足音を殺しながら屋敷の玄関に近づき、扉を開けると中へと足を踏み入れていった。

――そして、一方裏口にて。

「……警備は……いないな。……まあ、こんな人気のない場所に長い間住んでれば警戒心が薄れるのも仕方ない……。か。」
アルバートは右手にサイレンサー付の拳銃を持つと、裏口のドアノブに手をかけた。

「……開けっ放しか……。……逃げるときにでも使うつもりだったのか……。？」

アルバートは呟くと、屋敷の中へと入った。

ギイ……。ギイ……。

木造の床が軋む。

木造の建物の中は大分古く、いたるところに穴や修理のあとがある。

建物自体は古いが、誰かが手入れをしているのか、汚れやくもの巢などの跡はみられない。

「・・・・・・・・。」

アルバートはうつすらと灯りがついている廊下を息を殺しながら進んだ。

辺りは静まり返っていて、不気味なくらい物音がしない。

「・・・・・・・・。」

アルバートは慎重に足を進めていた。

しばらく、廊下を進みアルバートが曲がり角を曲がった・・・その時だった。

——
ドンッ
——
！

とつぜん、静寂を打ち破って一発の銃声が屋敷内に響いた。

「!!・・・エリオットのやつもう見つかったのか!？」
アルバートは咄嗟に身をかがめた。

————ドン・・・ドン・・・ツドドン!!

「・・・う者だ!!・・・うあああ!!」

銃声とともに悲鳴が屋敷内に響き渡る。

「・・・。」
アルバートは姿勢を低くしたまま廊下の奥へと進もうとした。

ガチャ！

「！！」

アルバートは音がした方向に視線を向けた。

アルバートのすぐ目の前の右手のドアから銃声に驚いて男が飛び出してきたのだ。

「！！」

アルバートは瞬時に拳銃を構えた。

ピシュッ！！

「っ！！？」

アルバートの放った銃弾は男のこめかみを打ち抜き、男はアルバートの姿を確認する間もなく頭から夥しい量の血を流しながらその場に崩れ落ちた。

「・・・・。」

アルバートは男の死を確認すると、小走りで奥へと進んだ。

ギシッギシッ・・・トットットットット・・・。

アルバートは通路の脇にある無数のドアに注意を払いながら奥へと進んでいく。

「おい！侵入者が出たらしいぞ！さっさと持ち場に着くんだ！！」

「ああ！わかった！」

アルバートの前方の曲がり角の奥から複数の声が聞こえ、足音が近づいてくるのがわかった。

「・・・・・・・・。」

ヒュオツ！

アルバートはスピードを殺すどころか、猛然の曲がり角に向かって加速した。

ズサアア！！

「うわぁ！！」

突然、曲がり角から青年が滑り込むように猛スピード飛び込んできたため、男達は一瞬怯んだ。

アルバートがその一瞬の隙を逃すはずが無かった。

ピシュッ！！ピシュッピシュッ！！ピシュッ！！！！

畳み掛けるように放たれた無数の弾丸が男達を襲う。

「あがつあああ！！」

「ぎゃあああ！！」

体中に弾丸を受け、男達は次々に倒れていく。

「この！！」

運良く仲間が盾になり、銃弾を免れた男が反撃しようとアルバートに向かって銃を構えようとした。

「・・・詰めが・・・甘いな。」

アルバートはそう言いながら瞬時に男の懷に飛び込んだ。

キュッ！！

アルバートの靴が床を鳴らし、男が引き金を引くより早くアルバートが下から突き上げた拳は男の顎を正確に捉えた。

ゴッギイイツ！！！！

男の顎の骨は普通ではありえないような音を上げ、男の体は宙に放り出される。

ドオツガアアンアッ！！

ものすごい音を立てて、男の頭部が天井の板につき刺さった。

「……。」

男の体とダラんつと天井からぶら下がり、ピクリとも動かない。

「武装はしているが……てんで素人だな。」

アルバートは横たわる男達の死体を見つめながら呟いた。

アルバート辺りを見渡し、周囲に人の気配が無いことを確認した。

「……よし。」

アルバートは再び建物の奥へと足を進めた。

一方エリオットは建物の二階に侵入し、一番奥の扉に差し掛かって
いた。

辺りは襲撃に警戒しているためか物音ひとつしない。

「・・・・・・・・・・。」

エリオットは銃を右手に構え、そのまま扉の前に近寄った。

「・・・・・・・・・・。」

エリオットがドアノブに手をかけたその瞬間。

「・・・ッ！！」

ヒュッ！

何かを察知したエリオットが床を蹴って真横に飛んだ。

ズドッドッドッドッドッドッドッドッドッドッ
ッ！！

部屋の内側から放たれた無数の銃弾が木製の扉を粉々に吹き飛ばし

た。

・・・コツ・・・コツ・・・コツ・・・。

少し間を置いて部屋の中から扉に近づいてくる足音が聞こえた。

「・・・・・・・・。」

部屋の外の様子を見るため男が一人、ドアからゆっくりと慎重に顔を出した。

エリオットは男が自分の姿を確認したとほぼ同時に拳銃を男に向け

ていた。

「ばゝか、死ねよ。」

ピシュッ！！

「っ！！」

エリオットの放った銃弾が男の頭部を貫通し、男はその場に崩れ落ちた。

男が崩れ落ちると、再び静寂が辺りを包み込む。

「・・・・・・・・。」

エリオットは息を殺しながらドアが吹き飛んだ部屋の入り口に近づく。

「・・・・・・・・。」

エリオットは慎重に部屋の中を覗き込んだ。

「・・・・・・・・ま、待て撃つな！！降参だ！！降参するから、撃たないでくれ！」

部屋の片隅で男が小さくなって震えていた。

「・・・・・・・・お前がカルロ？」

エリオットは顔色ひとつ変えずに男に聞く。

「・・・そ、そうだ・・・私が・・・カルロだ・・・！」
男は必死に叫んだ。

「・・・他の仲間は何？」

「あ、あいつらなら私を見捨てて逃げた！！もう、私しかない！」

「ふーん・・・。」

エリオットはゆっくりとカルロのほうに近づく。

・・・コツ・・・コツ・・・コツ・・・。

「く、来るな！・・・た、頼む殺さないで・・・。」

「・・・。」

エリオットはカルロの言葉を見殺して、近づいていく。

・・・コツ・・・コツ・・・コツ・・・。

「く、来るな・・・来るなあああ!!」

カルロは懐から拳銃を取り出そうと手を伸ばした。

ヒュッ!!

エリオットは目にも留まらぬスピードで猛然と男に掴みかかった。

ガッ!!

「ッ・・・ガッ・・・!!」

カルロは信じられないほどの力で首を締め上げられ、思わず銃を床

に落とした。

「・・・この期に及んで抵抗するところがいかにもバカっぽいね・・
・。」

エリオットはニヤニヤと笑みを浮かべながら馬鹿にした様子で言う。

「・・・・・・・・ツァ・・・・カ・・・・!!!!」

カルロは自分の首を締め上げるエリオットの右手を必死に振りほどこうとするが、まるでピクリとも動かない。

「・・・どうしたの？ やっぱり、ただの人間って弱いんだねえ。」

「ッ・・・・・・・・!!」

カルロはこれ以上はないほどの恐怖の表情を浮かべ、エリオットを見つめる。

「・・・そんな目で見ないでよ。・・・殺したくなっちゃうじゃん・
・!!」

グイッ!!

エリオットはカルロの首を掴んだまま、まるでボールを投げるかのように振りかぶった。

「・・・っ!!?」

カルロは自分より幾分も小さな少年に、片手で軽々と体を持ち上げられた現実が信じられず、ただ驚き戸惑うばかりだった。

「・・・じゃあね。・・・おじさん。」

エリオットは高々と持ち上げた男の顔を見つめ、ニヤリと笑った。

ビュゴッ!!

エリオットは男の体を勢いよく窓ガラスに向かって投げつけた。

グウワッシャーーン！！

すさまじい音を立ててガラスが砕け散り、男の体は二階から空中に放り出された。

男の体はまるで地面に吸い込まれるかのようにみるみる小さくなっていく。

・・・ドスンッ！！

男の体はコンクリートにぶつかって小さく跳ねると、鈍い音を上げながら数メートル転がり、やがて動かなくなった。

男の体はもうピクリとも動かなかった。

「っはは死んだ死んだ。いやー派手に落ちたねえ……。アルバー
ト……。今回は僕の勝ちだねえ。」

エリオットは嬉しそうに口元に不気味な笑みを浮かべた。

「……。任務完了……。さてつと……。」

エリオットはまるで何事も無かったように呟くと、拳銃のサイレン
サーは取り外し、それをしまい終え、ポケットからトランシーバー
を取り出すのだった。

一方その頃アルバートは、しばらくして廊下の突き当たりの部屋にたどり着いた。

「・・・・・・・・。」

アルバートはゆっくりとドアノブを回した。

ガチャ・・・・・・・・ギィ・・。

古びた音を立てて、木製のドアが開いた。

部屋の中は灯りがついていたが、人の姿は見当たらない。

「・・・・。」

ギイ・・・・ギイ・・・・ギイ・・・・。

アルバートは部屋の中へと入り、中を見渡した。

「・・・・誰も・・・・いないな。」

アルバートはそう呟きながら部屋の中を歩き回った。

しばらくアルバートは部屋の中を調べていた。

ガタッ。

その時、不意にアルバートの後ろのクローゼットの中から物音がした。

「!・・・・・・。」

アルバートは拳銃を構えたまま、ゆっくりとクローゼットに近づく。

・・・・ギイ・・・・ギイ・・・・ギイ・・・・。

「・・・・・・。」

アルバートはクローゼットの前で立ち止まり、耳をすまして気配を感じようと試みた。

「・・・・・・。」

クローゼットの中から確かに人の気配がする。

「・・・・・・。」

アルバートはクローゼットの取っ手に手をかけ、一度深呼吸した後、勢いよく開けた。

ガチャ！

「・・・ひっ！！」

「・・・！」

アルバートはクローゼットの中に人間の姿を見て一瞬驚いた。

クローゼットの中にいたのは、まだ成人もしていないような女性だった。

年齢的にはアルバートとさして変わらないように見える。
髪は肩までかかるような金髪で、目の色はアイスブルー。

その少女は、酷くおびえきった様子で必死に震えを止めようとしているが、それでもガタガタと体が震えていた。

「・・・・・・・・お前、この人間か？」
アルバートがゆっくり静かに問いかける。

「・・・・・・・・。」
しかし、少女はすっかり恐怖で縮こまってしまって返事をしない。

少女の表情は恐怖で引きつり、目に涙を滲ましている。

「もう一度聞く。・・・お前はここの人間か？」

「・・・・・・・・。」
やはり少女は答えようとしない。

「……答えられないか。」

……カチャ。

アルバートは銃からマガジンを取り外し新しいマガジンを銃に装填すると、少女にゆっくりと銃口を向けた。

「……!!!」

少女の顔はさらに恐怖で引きつり、目から涙がこぼれ落ちる。

「……悪い……これも任務だ。」

カチ……。

アルバートは引き金を引こうとした。

「!!」

少女は思わず目を瞑った。

……げ……て。

「!？」

……と……げ……て。

突然、アルバートの耳にまた例のあの声が飛び込んできたのだ。

――。

「・・・この・・・声は・・・！」

――。

「またかつ！・・・クソ・・・一体・・・なんなんだ・・・！」
アルバートは頭を押さえたままその場で膝をつく。

「・・・？」

少女は一瞬の出来事に戸惑う。

○

○

「.
! ! ! ! !
」

○

.
.
.
.
○

○

—
•
•
•
•
•
•
•
○

—
•
•
•
•
○

しばらくして、頭の中でしていたその声はどこかに消えた。

「・・・・・・・・っ・・・・・・・・。治まったか・・・・・・・・。」

アルバートは額から汗を滲ませ、押さえていた手を下ろすと、ゆっくりと立ち上がった。

「・・・・・・・・・・・・・・・・。」

アルバートは再び聞こえた正体不明の幻聴に動揺を隠せない様子で、何か考え込んでいるようだ。

「・・・・・・・・・・・・・・・・?」

少女はアルバートの不可解な行動にただただ戸惑うばかりだった。

「・・・・・・・・・・・・・・・・。」

アルバートは黙って少女の方に再び視線を向ける。

「!!」

アルバートと目が合うと、少女の顔は再び恐怖で歪んだ。

ガチャ・・・。

不意にアルバートの後ろのドアが開いた。

「!」

アルバートは咄嗟に振り返ると、銃を構えた。

「・・・アルバート？」

そう言ってアルバートの前に現れたのは右手に銃を握り締めているエリオットの姿だった。

「・・・エリオットか。」

アルバートはそう言うのと、ゆっくりと銃を下ろした。

「・・・もう、任務終わりだよ？カルロは僕がやつつけちゃったからね。へっへーん、今回は僕の勝ちだね。」

エリオットは勝ち誇った様子で言った。

「・・・そうか。」

「ん？なんだよ、悔しくなさそうじゃん・・・なーんか拍子抜けだなあ。もっと肩をおとしてガツカリすると思ったのにさあ・・・」

」。

「・・・・・・・・・・。」

アルバートは黙ってエリオットに背を向けた。

「ん？・・・何やってるの？・・・・・・・・ってあれ？まだ生き残りがいたの？」

エリオットはアルバートの近くで震えている少女の姿に気がついた。

「・・・ああ。このクローゼットに隠れていたんだ。」

「・・・ふん・・・・。まあいいや、そんなに早く殺っちゃいなよ。」

エリオットは平然と言う。

「・・・・・・・・。」

アルバートは黙ったまま、少女の方に視線を向けると再びエリオット

トに視線を戻した。

「ん？・・・どうしたの？早くしなよ。」

「ああ・・・いや・・・・・・弾切れだ。」

「・・・弾切れえ？・・・予備のマガジンはどうしたのさ？」

「・・・それも、もう使い切った。」

「・・・もう・・・しょうがないなあ・・・。珍しいね、アルバー
トがそんなミスするなんてさ。」

「ああ・・・悪いな。」

「・・・まあいいや。じゃあ、そこどいてよ。僕が片付けるからさ。」

「・・・ああ。」

アルバートはそう言って少女から背を向け、拳銃からサイレンサーを取り外すとそのままその場を離れ、部屋の入り口付近で立ち止まった。

代わりにエリオットが少女に近づいてきた。

・・・コツ・・・コツ・・・コツ。

「・・・!!!!」

銃を手に自分に近づいてくる少年の姿を見て、再び少女の体は恐怖でガタガタと震えた。

「怖がらなくていいよ。ただ・・・動かないでね。・・・動く痛いよ?」

そう言ってエリオットは少女に銃口を向けた。

銃口の奥に広がる真っ暗な暗闇が少女の視界を覆う。

「ひっ……！！！」

少女はもうダメだ、といわんばかりにギュッと目を瞑った。

「……。」

アルバートはその様子を黙って後ろ目で見つめていた。

「それじゃ、さよなら。」

拳銃の引き金にかかるエリオットの右手の指に力が入った。

.....
ドンツ!

一発の銃声が屋敷の中に木霊する。

その音は何かを訴えかけるように響き渡り――消えた。

そう。

全てが。

時計の針が。

この一発から。

この一発から。

動き始めた。

――引き金。

それは時として。

物事の“始まり”を暗示する。

少しして、銃声は静まった。

屋敷内は静寂を取り戻し、何事も無かったかのように静まり返っている。

部屋にわずかな硝煙の臭いが漂っていた。

事態は一発の銃声によって、どんな形にせよ終わりを迎えようとしていた。

そして、部屋にはただ沈黙だけが続いている。

だがその沈黙は少年の一言によって破られた。

「……アルバート……どういふこと？」

エリオットは床に膝をつきながら、自分の後ろに立つアルバートに静かに問いかける。

「・・・！！」

アルバートは自分を取り巻く状況が飲み込めていなかった。

確かに。

1 発分の銃声がした。

にもかかわらず、アルバートの手には拳銃が握られ。

その銃口からまだ新しい硝煙が立ち込めている。

そして、その銃口の先には右腕を押さえながらアルバートに問いかけるエリオットの姿があった。

そう。

先ほどの銃声はエリオットのそれによるものではなく。

アルバートがエリオットに向けて放った銃弾によるものだったのだ。

「・・・・ねえ・・・・一体どういうこと？」

エリオットはさっきより強い口調で問いかける。

「・・・・？・・・・？・・・・！？」

エリオットのすぐ前で震えていた少女は予想外の事態に混乱していた。

重く張り詰めた空気が部屋に漂う。

「・・・！！」

バキッ！

アルバートは咄嗟にポケットからトランシーバーを床に投げ捨てた。

「なっ・・・！」

エリオットはアルバートの突然の行動に一瞬戸惑う。

次の瞬間アルバートは勢いよく床を蹴った。

ヒュンッ！！

アルバートの体が空を切る。

そして猛スピードでエリオットのほうに近づき、そばにいた少女を両腕で抱えたのだ。

「！！」

エリオットが咄嗟に銃を構えた。

次の瞬間。

ガッシャーーンッ！！

エリオットが銃を構えるより早く、アルバートは少女の頭を覆うように右手で押さえ、部屋の窓ガラスを突き破り、外に飛び出した。

その部屋は二階に位置していたが、アルバートにとってそれは些細なことだった。

「！！」

エリオットはアルバートを追うように猛スピードで窓の近くに走りより、窓の外に身を乗り出した。

しかし、時既に遅し。

ズダンッ！！

アルバートは勢いよく地面に着地し、少女を抱きかかえたまま前方に猛然と走り出した。

「・・・まてッ！！」

エリオットが窓から銃を構える。

ドン！

チュイインッ！

エリオットの放った銃弾は惜しくもアルバートの近くの木に命中した。

「くそっ!!」

ドンッ! ドンッ! ドンッ! ドンッ! ドドドンッ!!

次々にエリオットは銃弾を放つが、どれもアルバートの体を捉えることが出来ない。

「くそっくそっ・・・ちくしょうっ!!」

カチッ・・カチッ・・カチッ・・カチン。

「・・・!!」

我を忘れ無我夢中に引き金を引くエリオットは銃の弾が切れたことに気づき我に返った。

そして、気がつくともアルバートの姿はもうどこにも見当たらなかった。

「・・・くっ。」

エリオットは顔をしかめ、ポケットからトランシーバーを取り出す。

「・・・アリエーテさん・・・聞こえる?」

少し間を置いてトランシーバーから声が聞こえてきた。

「ええ、聞こえるわよ！それよりさっきの銃声はなに！？さっき任務は完了したって言ってたじゃない！」

明らかに動揺したアリエーテの声がトランシーバーから聞こえる。

「……任務は終わったよ・確かに。……でも、もうひとつ別の問題が起きて……。」

「……どういうこと！？？」

「……アルバートが裏切った。」

「な!?!?・・・なんですって!?!?」

「・・・・・・・・たった今、僕の右腕に1発ぶちかまして、近くにいた女の子を抱きかかえて窓から逃げちゃった。」

「そ、そんな・・・・・・・・!!・・・・それは本当に確かなの!?!?」

「・・・・・・・・それじゃあ、ここに来て僕の腕の怪我見てよ。・・・・・・・・あゝ痛ってえ・・・・・・・・。」

エリオットは右腕の傷口を服で抑えながら言った。

「・・・・・・・・“アルマ”が裏切るなんて・・・・・・・・。」

「・・・やっぱり珍しいことなの？アリエーテさん。」

「ええ・・・私が知る限りそういった前例は聞いたことが無いわ。」

「・・・ふん。・・・僕もまさか味方だと思ってた人に後ろから撃たれるなんて思いもし無かったよ。」

「・・・ルキアーノに代わるから、状況を説明してくれる？」

「うん、・・・わかった。」

「ルキアーノだっ！・・・アルバートが裏切ったってのは本当なのか！？」

「・・・本当ですよ。・・・この腕の傷が何よりの証拠です。」

「・・・そんな馬鹿な・・・・・・・・あいつが!？」

「・・・アルバートの教官であるあなたにすら予想もしなかった事態なんですね・・・・・・・・」

「当たり前だ!・・・今だってまだ信じられない。」

ルキアーノは明らかに動揺を隠せない声で答えた。

「・・・・・・・・最近、アルバートの様子が変じゃありませんでしたか?」
エリオットはゆっくりと問いかけた。

「・・・ああ・・・最近、何かボーっとしていつも考え事をして
いるみたいではあったな・・・・・・・・」

「やっぱり・・・・・・・・ルキアーノさんから、見てもそうですか・・・」

・僕からみても、おとといの任務からアルバートの様子が変な気がしてたんですよ。・・・まさか、こんな行動に出るとは思いませんでしたけどね。」

「・・・・・・・・。」

「・・・・・・・・そういえば他の逃亡者はどうしました？」

「ああ、それなら全部俺たちが始末した。そっちの心配は無用だ。」

「そうですか・・・・・・・・で、これからどうするんですか・・・？」

「・・・・・・・・ここは処理班に任せて、いったん局長に報告しに組織に戻る。」

「・・・・・・・・局長にこのこと話すんですか？」

「・・・・・・・・。」

「・・・ま、僕は構わないですけど。・・・でも、局長がなんていうか僕には予想がつかますけどね。」

「よせ・・・その先は言うな。」

「・・・で・・・どうするんです？」

「・・・この事態は組織にとって深刻な問題だ。・・・黙ってるわけにもいかんだろ。」

「・・・そうですね。」

「・・・とにかく・・・アリエーテに代わるぞ・・・。」

「・・・はい。」

「・・・エリオット、聞こえてる?」

「うん・・・聞こえてるよ、アリエーテさん。」

「状況は把握したわ。今すぐ戻ってきなさい。」

「うん・・・わかった。・・・ところで今この傷、処理しちゃっていい?・・・血でベトベトして気持ち悪いんだけど・・・。」

「・・・ダメよ。エリオット・・・任務は終わったの。・・・任務以外で“力”を無駄遣いするのはやめなさい。」
アリエーテは厳しい口調で言った。

「・・・ちえ・・・。・・・わかった、じゃあいまそっちに戻るよ・・・。」

「ええ・・・。」

・・・プツツ。

エリオットはそう言うのとランシーバーのスイッチを切り、それをポケットにしまった。

「・・・あゝ痛ってえ・・・。」

エリオットはそう呟き、少しの間壊れた窓から外の暗闇を見つめた。

「・・・もともと仲がいいとは思ってなかったけど、嫌いじゃなかったんだよ？・・・正直・・・ガツカリだよ。」

エリオットは吐き捨てるように呟いた。

しばらく窓の外を眺めていたエリオットは視線を戻すとその部屋を跡にした。

ツ
タ
ツ
タ
ツ
タ
ツ
タ
ツ
タ
ツ
タ
・
・
・
・
。

アルバートは見た事の無いくらい夜道を月の明かりだけをたよりに、息ひとつ乱さず猛然と走っていた。

「・・・・・・・・クソっ！・・・・・・・・俺は・・・一体・・・どうなっちまったんだ・・・・・・・・なぜ・・・こんなこと・・・・・・・・こんなことをしたんだ・・・・・・・・。」

アルバートは走りながら、少女を抱きかかえたままそう言った。

「・・・・・・・・・・・・・・・・。」

少女は先ほど、アルバートが窓ガラスを突き破った時のショックのせいか、意識を失っているようで、身動きひとつせず目を瞑ったまま黙っている。

「・・・・・・・・。」

アルバートは何も言わず、自分の腕の中で気絶している少女に視線を向けたが、すぐに前に視線を戻した。

「・・・・・・・・たしかここから南に行くとナポリに着くはずだな・・・・・・・・よし。」

アルバートはそういうと、スピードをさらに上げ猛然と暗闇の中を駆けていった。

月の薄暗い光がアルバートの背中を照らしていた。

Destino（後書き）

登場人物プロフィール＜アルマ編＞

名前 アルバート・クライスト

性別 男

身長 173 cm

体重 59 kg

利き腕 両利き

好きなもの タバコ・星を眺めること

嫌いなもの 特になし

備考 スピーアに所属する“アルマ”第2期生。寡黙なせいかあまり自分から人と接しようとしめない。本人もそれを認識しており、治そうと努力はしている。組織に所属する前の自分の過去を知らないことに少なからず不安を抱いている。アルマ同士の中では、エリオットとマリーと親しい。

名前 エリオット・ロッセリーニ

性別 男

年齢 13歳

身長 138 cm

利き腕 右利き

好きなもの アリエーテ

嫌いなもの 自分を子ども扱いする連中

備考 “アルマ”の第2期生。人懐っこく明るい性格だが、暗殺をゲーム感覚で捕らえているため、任務中の彼は非情に残酷。アルバートと同じく自分の過去を知らないが、アルバートと違い自分の過去の事にはあまり興味がないらしい。

アリエーテのことを母親のように慕っている。

名前 マリー・フェルディナント

性別 女

年齢 17歳

身長 164cm

体重 不明

利き腕 左利き

好きなもの 自分をかまってくれる人間・エリオットをいじること
嫌いなもの 特になし

備考 “アルマ”の第2期生。周囲に明るく振舞い、首を突っ込んでは背を焼く。最近趣味で料理を始めたが、味には自信がないらしい。教官とはまあまあ仲でお互い丁度良い距離感を保っている。射撃が苦手だがマーシャルアーツに関しては施設内で1、2を争う。施設内一の優等生になることに憧れている。

名前 カテリーナ・マリウス

性別 女

年齢 14歳

身長 139cm

体重 32kg

利き腕 両利き

好きなもの レナート（死んだ教官）・レナートにもらった時計
嫌いなもの 自分

備考 “アルマ”の第2期生。ある事件をきっかけに教官を失い、それ以来自分の感情を殺して生きている。任務以外では部屋に閉じこもっている。基本的に他人と話すのが苦手。

自分に積極的に話しかけてくるマリーの対応に困っている。

＜小説を書く際に参考にした文献＞

「シチリアマフィア 華麗なる殺人」 著…アレキサンダー・テイ
ル 訳…松浦秀明

「イタリアを知るための55章」 著…村上義和

I n c r o c i o

.....。

.....私は.....。

.....どうなったの.....？

自問自答をする私。

目の前に広がる闇。

問いかけても。

何も返ってこない。

.....ここは.....？

辺りには何一つ見当たらない。

上下左右何処を見渡しても。

聞。

暗闇。

闇。

聞。

閤。

.....! ! ! ! !

いやッ
・
・
・
・
!!

見えない。

何も。

見えない。

いやだ。

いやだっ！

いやだ。

暗いのはイヤだ。

暗い。

暗い暗い暗い暗い暗い暗い暗い暗い暗い暗い。

暗い暗い暗い暗い暗い暗い暗い暗い暗い暗い。

暗い暗い暗い暗い暗い暗い暗い暗い。

暗い暗い暗い暗い。

暗い暗い暗い。

暗い暗い。

闇。

何かが微かに聞こえる。

これは・・・。

悲鳴？

でも。

何かがそこにある。

全身を恐怖で染め上げる。

何かが。

「いやあああああああああああつあああああああああ
あつ!!!!!!」

-----。

そこで意識は途切れた。

うつすらと視界が開ける。

光が。

見える。

その光は。

やがて辺りの闇を払い尽くした。

「うああっ!!!!」

一室に少女の悲鳴が響き渡り、少女はその場から跳ね起きた。

意識がはっきりするにつれ、周囲の様子が次第にはっきりと映し出される。

――。

閑散とした一室。

部屋の中は少し薄暗いが、窓から柔らかな日差しが差し込んでいる。

部屋の奥にポツリと開いたままの扉。

扉の奥に不気味に広がる薄暗い空間。

そして、自分が腰を下ろしているベッドと、部屋の中央にポツンと置かれた円形のテーブルが見当たるくらいだ。

「あ……はあ……はあ……っ!!」

少女は額から汗を滲ませ、息も絶え絶えで、今にも張り裂けそうな心臓の鼓動を落ち着かせようと、左胸を手で押さえ、必死に堪えている。

――ドクン・・・・ドクン・・・・ドクン・・・・ドクン。
クン。

――ドクン・・・・ドクン。

――ドクン・・・・。

少女の額からこぼれ落ちた汗の雫がベッドのシートにぽつりと落ちて、独特の模様が浮かび上がる。

「はぁ・・・はぁ・・・はぁ・・・。」

しばらくの間、少女は縮こまったまま、その鼓動が治まるのをじっと待ち続けていた。

「う。」「はあ。ふ」

時が流れ、先ほどまで激しく脈打っていた鼓動が治まると、ほっとしたように少女はその場で大きく深呼吸をした。

そして、平静を取り戻した少女はゆっくりと辺りを見渡した。

見覚えの無い部屋。

目の前にポツリと置かれたテーブル。

そして、自分が腰掛けているベッド。

やはりそれ以外何も見当たらない。

「・・・・・・・・・・？・・・・・・・・ここ・・・・は・・・・・・・・？」

誰もいない部屋で少女はポツリと呟いた。

当然、その言葉に返事が帰ってくることは無く。

少女は戸惑いの色を隠せないでいた。

そして、そうして少女が困惑しているうちに、次第に脳裏に昨日の出来事が蘇ってきた。

けたたましい銃声。

響き渡る男達の悲鳴。

何かが壊されるような激しい物音。

そして屋敷にある自分が隠れていた部屋のイメージ。

「あ・・・・・・・・・・・・・・・・」

少女は頭の中で記憶を整理しようと瞳を閉じ、意識をそれに集中す

る。

ゆっくりと開く扉の軋む音。

自分の隠れるクローゼットへと近づいてくる足音。

急激に早まる心臓の鼓動。

少女はまるで、昨日のあの場所にいるかのような錯覚に陥っていた。

・・・ドクン。

ダメだ。

・・・ドクン。

来る。

・・・ドクン。

見つかる。

．．．．．ドツクン．．．．．ドクン。

どうしよう。

ドクッ。

殺される。

ドクッ．．．．．ドクッ．．．．．ドクッ．．．．．ドクッ．．．ドクドクドクッ。

来る。

来る。

来る。

来る。

来た。

。

そこで、イメージは途切れた。

一瞬にして少女は再び目の前の現実に戻される。

「・・・・・・・・。。。」

だが、少女を取り巻く恐怖は一向に治まる気配がなかった。

・・・・・・・・ドクンッ・・・・・・・・ドクンッ・・・・・・・・ドクンッ。

激しく脈打つ、心臓の鼓動が何よりの証拠だった。

「……目が覚めたか……？」

そんな時、不意に扉の奥の暗闇から若い男の声が聞こえた。

「……うあ……！」

突然の声に少女は思わず両手でベッドの布団を引き寄せ、身を隠した。

コツ……コツ……コツ……

聞き覚えのある床を叩く靴の音。

布団の隙間から見える、扉の奥に広がる深い暗闇。

全身が震え経つような恐怖。

コツ・・・コツ・・・コツ・・・。

次第に足音は近づき。

うつすらと差し込む日の光がその正体を映し出す。

そして暗闇からあの青年の姿が現れた。

自分を見つけた。

あの。

青年が。

「ああっ・・・・・・・・ああ・・・・・・・・！！！」

少女は布団の隙間から見えるその姿を見るやいなや、全身が恐怖で震え上がった。

そう。

昨夜、突然屋敷の中に押し入り、自分を殺そうとした連中の一人だ。

「ああ・・・うわあ・・・うう・・・ひいつ・・・！」

少女は布団の中に完全に体を引っ込め、ベッドが揺れるほどガタガタと震え出した。

青年はその少女の様子を見ると、すぐに近づくのを止め、その場で立ち止まった。

「怖がらなくていい。・・・・悪いな。」

「・・・。。。」

少女は布団のわずかな隙間から怯えきった目で青年を見つめている。

そして、青年と目があつた瞬間、少女は再び布団に完全に包まり、縮こまってしまった。

「・・・・・・・・・・。」

青年はその様子を黙って見つめている。

そして、しばらくして青年はゆっくりと口を開いた。

「・・・・そうだな、昨日まで自分を殺そうとしていた奴が目の前に現れれば普通怖がるよな・・。・・まあ・・いきなり慣れるなんて言わない。」

「・・・・・・・・。」

少女は震えたまま、反応をしなかった。

その様子を見て少年は軽く溜息をつき、話を続けた。

「信じろとは言わないが・・・・俺はもう君を殺そうとは思っていない。」

「・・・・・・・・。」

青年のその言葉を聞いて、少女の震えがピタリと止んだ。

「・・・・俺は仕事としてあの屋敷に踏み込んだ。それなのに・・・・任務を放棄するばかりか、仲間を裏切り、あの場から逃げおおせた今となっては俺にはもう君を殺す理由がない。」

「・・・・・・・・。」

「・・・・・・・・とにかく俺が言いたいこと君には危害を加えないってことだ。」

「・・・・・・・・。」

「・・・・・・・・腹減ってるだろう？・・・今食事を持ってくるから待っててくれ。」

青年はそういうとベッドに背を向け、再び扉の奥の薄暗い暗闇の中へと消えていった。

少女はその様子をしばらく布団の隙間からのぞいていたが、青年の姿が完全に消えたのを確認するとゆっくりと布団の中から顔を出した。

青年が去ったその部屋はしんと静まり返っている。

― 一体なんだったんだろう？

― 昨日会ったときとはなんだか雰囲気が違う。

― あんまり怖そうな感じじゃなかったな・・・。

― “もう君には危害を加えない”・・・？

― どういうことだろう？

― 仕事でって・・・どういことなんでしょう？

― わからない。

― ……でもはつきりしてるのは。

― 今は殺されたりする心配は無いって事なのかな？

——でも……やっぱりまだ怖い。

——まだ信用はできない。

——……でも、ちょっとだけ事情を聞いてからでも大丈夫かな……？

——なんて……考える必要もないよね。

——……どっちにしたって私には。

——生きることへの希望も。

——帰る家も。

———当の昔に失ったのだから。

「・・・・・・・・よし・・・・・・・・。」

少女は頭の中でいったん考えを巡らせ、青年の話を聞くという結論に達すると、一度自分の頬をパチッと手のひらで叩き、喝を入れた。

「よっと・・・・・・・・。」

少女はゆっくりとベッドから床に足を下ろすと、青年が配慮して置いてくれたのか、床に綺麗にそろえてあった自分の靴を履いた。

少女はゆっくりと部屋の中心に置いてあるテーブルのところに歩み寄り、そこで立ち止まると、しばらくの間、立ったまま扉の向こうの暗闇をじっと見つめ、青年の姿が現れるのをじっと待ち続けた。

しばらくしてから、扉の奥の暗闇からゆっくりと靴が床を叩く音が聞こえてきた。

・・・コツ・・・コツ・・・コツ・・・。

だんだんとその音が大きくなっていく。

・・・コツ・・・コツ・・・コツ・・・。

「・・・。。。」

少女はゴクリと息を呑み、全身に自然と力が入った。

・・・コツ・・・コツ・・・コツ・・・。

・・・コツ・・・コツ・・・コツ・・・。

・・・コツ・・・コツ・・・コツ・・・。

そして、少ししてゆっくりと少女の前に青年が姿を現した。

「・・・。」

先ほどは会ったときは、布団の隙間からわずかに見える姿しか確認できていなかったので、自分の前に現れた青年の容姿に、少女は少なからず驚いた。

その青年の姿は自分と同年か、ちょっと年上程度にしか見えず、茶色の髪にグレーの瞳をしていて、服装は街中で同世代の青年達が着ているようなごく普通のものにしか見えない。

それは、少女が屋敷で見た恐ろしいほどの殺気を放っていた、その青年のイメージとはかけ離れていた。

「……あ……えと……」

少女はあまりに予想外の展開に戸惑い、咄嗟に視線を床に落とし、手を後ろの回して組むとその場でオロオロとし始めた。

「……食事を持ってきた。……急だったからあんまりたいした物じゃないんだけどな……」

青年はそう言って、両手に持っていた膳を置こうと、テーブルに近づいた。

「……!」

少女は青年が近づいてくるや否や、咄嗟にテーブルから二歩下がる。

「・・・・・・・・。」

青年はテーブルに近づきながら、その様子を見て黙って苦笑した。

カチャ。

青年は両手で持っていた膳をテーブルの上にゆっくりと置いた。

膳の上には、淡い黄色のスープとトーストが2枚、それからジャムと牛乳の入ったコップが置いてある。

「・・・・・・・・後で買出しに言ってくるから、その時まで悪いがこれで辛抱してくれ。」

青年はそういうと、ゆっくりとテーブルから二歩後ろに下がった。

「・・・・・・・・。。。」

少女はチラチラと青年に視線を送ってはいるがまだ怯えた様子だった。

「・・・・・・・・名前は？」

青年は唐突に少女に質問した。

「・・・・・・・・えっ？」

少女はその質問を聞いて、青年を見つめながらキョトンとした様子で聞き返す。

「……名前だよ……名前。……ない、って訳じゃないだろ？」

「……あ……え……えと……エ……エミ……」
少女は、少年の言葉に合点した様子で口元をもごもごと動かす。

「……ん？」

少年は耳に手を当てて聞こえないとポーズする。

「あ……えつと………エミリア………エミリア
ア・クローチェ……」

少女は必死で緊張と恐怖を払いながら、ポツリと呟いた。

「エミリア……だな？」

青年が聞き返すと、少女はコクリと頷いた。

「よし………それじゃ俺の番だな……俺の名前はアルバート………アルバート・クライストだ………呼ぶときは“アルバート”でいい………よろしく。」

「・・・あ・・・えつと・・・その・・・・・・よ、よろしく。」

エミリアはぎこちない様子で軽く会釈した。

「それにしても、“クライスト”に・・・“クローチエ”か・・・因果なもんだな。」

「・・・え？」

エミリアは不思議そうに聞き返す。

「ああ・・・いや。別に大した事じゃない。」

「・・・。。。」

「・・・それじゃあ自己紹介もすんだ事だし、本題に入るとするか。」

「・・・。。。」

エミリアはその言葉を聞いてゴクリと息を呑んだ。

「・・・そう身構えなくていい。・・・ただちょっと今いる現状だけでも説明しようと思ってさ。」

「・・・・現・・・・状？」

エミリアは恐る恐る聞き返す。

「ああ・・・・・・エミリアは・・・・今自分が何処にいるかわかるか？」

「・・・・・・。」

エミリアは少しうつむいたまま小さく首を振る。

「・・・・だろうな・・・・なんせ今日のあの時間からずっと気絶しっぱなしだったからな・・・・ここは、ナポリのすぐ近くにある丘の上の小屋の中さ。」

「・・・・ナポリ・・・・？・・・・え・・・・だって・・・・屋敷はローマに・・・・。」

エミリアはその言葉を聞いて困惑した。

普通の人間なら当然の反応だった。

なんせローマにあったあの屋敷からナポリまでは少なく見積もっても100kmはくだらない。

その上屋敷付近の地域は都心から離れてるため、めったにタクシーやバスも止まらない。

第一、気絶した少女を抱えたままそんなものに乗って移動などできるはずが無い。

なのに、青年は何事も無かったようにそうサラッと云った。

「・・・え・・・あの・・・どうやってそんな短い時間に・・・」

エミリアはそのことが不可解でならない様子で聞き返す。

「どうって・・・そりゃ普通に抱えたまま走ってきたのさ。」
アルバートは平然と言い切った。

「・・・?・・・え?」

エミリアはその言葉を聞いて余計に混乱する。

この男の子は何を言ってるんだろう・・・?

自分の言ってることがわかってるのかな・・・？

オリンピックの選手だって100kmをそんな短時間で走れるはず無いのに。

ましては、人を抱えたままなんてもっと無理だよ・・・。

「・・・・・・・・。」

エミリアは半信半疑でアルバートの方を黙って見ている。

「あ・・・なるほど。・・・そうか・・・そうだな。・・・ま、
・・・そりゃそうか・・・。」

アルバートは“あっそうか”と納得するように苦笑して頷いた。

「・・・・・・・・??」

エミリアはアルバートの様子を見て、首を傾げるしかなかった。

「・・・まあ・・・アレだ。・・・俺はちよつと体力には自信があつて
ね・・・。」

「・・・そういう・・・レベルの話でしょうか・・・・・・・・?」

「ああ。．．．そういうレベルの話さ。」

「．．．．．。」

「．．．．．。」

数十秒ほど沈黙が流れる。

アルバートは少し困った様子で、頭を掻いた。

そして、無理やり沈黙を破ろうと話を続けた。

「．．ま、そんなことはどうでもいいから置いといて．．．。」

「．．．．．。」

エミリアは、（全然良くないような．．．）、と思ったがそれは口には出さなかった。

「急かもしれないが．．．俺はちょっと町まで買出しに言ってくる。」

」

「・・・買出し？」

「ああ。・・・実は、君をそこに寝かせたあと街に買出しに行ってきたんだが、ちょっと考え事してて結構買い忘れた物があったね。・食料は、そこに出てるので全部なんだ。・・・だから食料の買出しに行かないといけない。」

「・・・そう・・・ですか。」

エミリアは視線を床に落とし、急に目を泳がせた。

「・・・どうした？」

「あ・・・いえ・・・なんでもありません。」

エミリアは視線を合わせずに、手遊びをしながら答える。

「逃げるか？」

「!」

エミリアは核心を突かれたのか、その言葉にビクリと体が震える。

「そんなに驚くことでもないだろう?・・・普通なら誰でも一度は考えることだと思うけどな。」

「・・・・・・・・・・。」

エミリアは困惑の表情を浮かべ、アルバートに視線をチラチラと合わせては逸らしている。

「そう動揺しなくてもいい。・・・俺が買出しから戻ってくるまで・・・・・・・・二つ選択肢を君にやる。」

「選・・・・・・・・択肢・・・?」

「ああ。・・・ひとつはここから逃げ出すこと。・・・そしてもうひとつは、騒動が治まるまでしばらくの間、俺と行動を共にする。・・・その二つだ。」

「え・・・・・・・・・・。」

「……ゆっくり考えるがいいさ。……俺は買出しで夕方まで帰らない。……その間に君が逃げても、俺は止めないし追いかけようもしない。」

「……………なぜですか？」

「…さっき言っただろ？…もう俺には君を殺す理由も無いし、追う理由もほとんど無い。」

「……………。」

エミリアは“ほとんど”というアルバートの言葉に少し疑問が湧いたが、口にはしなかった。

「ただ……………ひとつだけ忠告しておく。」

「……………？」

「君が……………エミリアがどちらの選択肢を選ぼうとも、その先に待っているのは厳しい現実だ。……それはどちらの選択肢を選ぼうと変わりはない。」

「……………。」

その言葉に、エミリアの表情が少し曇った。

「・・・別に無一文で逃げろとは言わない。」

アルバートはそう言って、テーブルに五枚の紙切れを置いた。

「・・・ここに100ユーロ札が五枚・・・全部で500ユーロある。・・・逃げるなら、これを持って行け。」

「え・・・。。。」

エミリアは少し戸惑った様子でアルバートに視線を送る。

「気兼ねする必要は全く無い。最低でもこのくらいは必要だろ?」

「・・・。。。」

「・・・まあ、時間はたっぷりある。・・・それまでゆっくり考えればいい。」

「・・・。。。」

「・・・それじゃあ俺はもう行くからな。」

アルバートはそう言って背を向け、歩き出そうとした。

「あ・・・あの・・・」

エミリアの声に、部屋から出てようとしていたアルバートは足を止めた。

「・・・・・・・・なんだ？」

アルバートは背を向けたまま言う。

「その手・・・・・・・・どうしたんですか・・・・・・・・？」

エミリアはそう言ってアルバートの右手に視線を向けた。

その手の甲には数センチ程度の長方形のガーゼが宛がわれている。

アルバートは少しその場で黙り込み、ゆっくりと一言だけ言った。

「さっき食器を落とした時に破片で切っただけだ・・・なんでもない。」

「・・・・・・・・そう・・・・ですか・・・・」

エミリアはその言葉を聞いて少し考えを巡らせ、そして再び視線をアルバートの背中に向けた。

「・・・それじゃあな。」

アルバートはそう言うのと再び歩き出し、扉の向こうの暗闇の中へと消えていった。

・・・パタンツ。

エミリアは再び静まり返った部屋の中心でポツリと立ち尽くしていた。

それから数十分経ち、じっとただ虚ろな目で虚空を眺めていたエミリアはゆっくりと視線を扉に向けた。

先ほど青年が出て行ったあの扉だ。

「・・・・・・・・・・。」

エミリアは頭の中で少し考えを巡らせた後、ゆっくりとその扉の前に歩み寄った。

そして、恐る恐る扉の取っ手に手を掛ける。

カチッ・・・・・・・・・・ギイ・・・・・・・・。

ゆっくりと扉を開けると、目の前に薄暗い細い廊下が現れた。

「・・・・・・・・・・。」

エミリアはゴクリと息を呑み、少ししてゆっくりと足を前に踏み出す。

・・・・・・・・ギイ・・・・・・・・ギイ・・・・・・・・ギイ・・・・・・・・。

一歩、また一歩と歩くたびに、古びた木製の床が軋んで鈍い音を立てる。

エミリアは薄暗い廊下の右側の壁に手を当て、その感触を頼りに壁伝いに進んだ。

二十歩ほど歩いた辺りだろうか。

ふと右手の平に何か突起のあるものが当たり、エミリアは足を止めた。

「・・・？」

エミリアは不思議そうにその突起物を、目を凝らして見つめた。

よく見ると、どうやらそれは窓を開けるための取っ手のようで、丁度エミリアの体がスッポリと脱け出せるほどの大きさの、木製の窓らしき物もそこにあった。

「・・・。」

エミリアはその取っ手に手を掛け、ゆっくりと力を込める。

ギッ。

取っ手が軋んで音を立てる。

だが、古びているのか窓はわずかに動いただけで開くには至らない。

「ッ！・・・・・・んっ！」

取っ手を握る手にさらに力を込める。

ギイ・・・バカンッ！

「わっ！」

古びたその窓は音を立てて勢いよく開いた。

窓から入り込んできた強烈な日光が薄暗い廊下を照らし出し、それと同時にエミリアの眼前で埃が舞い上がる。

「ッ！・・・ゲホッ！・・・ケホッ！」

エミリアは左手で口を押さえ噎せながら、舞い上がる埃を右手でパタパタと払った。

そして少しして、埃を払い終えエミリアは窓の外に身を乗り出した。

。――

そこには青々とした草が生い茂る草むらが。

地平線に広がる青い海と港町を背景に広がっていた。

「うわ．．あ．．．．．」

エミリアは目をまんまるに見開いて息を呑んだ。

——サア．．．。

窓から入ってきた心地良い風がエミリアの髪を撫で、草木がいつせい風に揺られ、大きな三日月形をした曲線の波を描く。

「キレイ．．．．。」

無意識にそんな言葉が漏れた。

どうやら、この小屋は港町から少し離れた小高い丘の上に位置しているようで、海と街の両方の様子が一望できる。

草むらの中央には小さな小道が走り、それは眼下に広がる港町に続いているようだった。

「・・・・・・・・。」

エミリアは黙ったままそれをゆっくりと目で追っていく。

「・・・・・・・・あつ。」

小道をしばらく道なりにずっと目で追っていくと、遠くに微かだがあの青年の後姿が見えた。

遠くでよく見えないが、青年の後姿は何処かさびしそうにゆらゆらと揺れている。

「・・・・・・・・。」

エミリアはその微かに見える青年の背中をじっと見つめていた。

しばらくして青年の姿は完全に見えなくなった。

「・・・・・・・・。」

それを確認したエミリアは窓からゆっくりと体を引っ込めた。

「・・・・・・・・・・。」

光が差し込み、照らし出された廊下を改めて見渡す。

その廊下は、先ほどの軋み方から想像していた通りかなり古い物で、空中に舞う埃が日光に反射してキラキラと輝いていた。

この窓から、さっきの部屋までの通路には特に物らしい物もなく、奥に先ほどまで自分が寝ていた部屋の扉があるだけだった。

そして反対側の、丁度さっきあの青年が進んで行った廊下の奥には玄關らしき扉が見える。

「・・・・・・・・。」

エミリアはその玄關の方角を黙ったまま少し見つめた。

そして、ふと視線を左に向けると、エミリアが先ほど開けた窓と丁度廊下を挟んで反対側に古びた扉があった。

廊下が薄暗かったせいかな、今までエミリアはその扉の存在に気づかなかった。

「・・・・・・・・？」

エミリアは不思議そうな表情を浮かべ、その扉の取っ手に手を掛け、それをゆっくりと回す。

カチャ・・・・・・・・。

取っ手を握る手には、鍵がかかっているような手ごたえも抵抗もなく、小さく取っ手が回る音だけがした。

「・・・・・・・・・・開いてる・・。」

開いてることが分かるや否や、わずかながら好奇心が湧き上がってきた。

「・・・・・・・・。」

エミリアはその場で少し考え込んだあと、決断するとゴクリと息を呑み、ゆっくりと扉を押した。

・・・・・・・・ギィ・・・・・・・・。

ゆっくりと扉が音を立てて開き、目の前にこぢんまりとした部屋が姿を現した。

その部屋は先ほどまでいた自分の部屋より大分狭い感じで、左奥にベッド、それから奥の窓際に引き出し付きのテーブルが配置されている。

「・・・ここが・・・アルバートさんの部屋・・・なの・・・かな？」

エミリアはそう言って周囲をぐるりと見渡した。

――。

「・・・ん？」

その時、窓際のテーブルの上で何かが光った。

「・・・?」

エミリアは何だろうと思い、ゆっくりとテーブルの前に歩み寄る。

そのテーブルの上にはピンセットと小さな木製の救急箱、それから小さく鋭利な形をした透明な破片が三つ置いてあった。

「……この破片は……ガラス……？」

エミリアはそう呟き、その破片を取って手のひらにのせた。

（……なんで……こんなものが……テーブルに置いてあるんだろう……？）

エミリアはその破片を手のひらの上で転がしながら観察しはじめた。

「……あ……！」

……カツンッ！……コロコロ……。

手のひらの上からその破片が床にこぼれ落ちて転がり、エミリアの足元で止まった。

そのガラスの破片の異変にすぐ気づいたエミリアは、驚いて反射的に破片を床に落としてしまったのだ。

「・・・これ・・・血がついてる・・・。」

エミリアの言ったとおり、そのガラスの破片には拭き取った跡はあるが、僅かに血痕が付いていた。

「・・・！！！」

――。

急にエミリアの脳裏に何かが浮かび上がる。

――これは・・・。

――あの屋敷の。

――私がいた部屋だ・・・。

――私に銃を向け、恐ろしい眼光で見つめる青年の姿。

――青年が急に床に膝をつき、なにか呟いている。

――そして入れ替わりで私に近づいてきた少年の姿。

――口元に不気味に笑みを浮かべ銃口を向ける少年。

――銃口の奥に広がる深い闇。

――恐怖で激しく脈打つ心臓の音。

――そして、銃声。

――気づくと、少年が腕を押さえながら私の前で膝をついていて。

――次の瞬間、いきなり青年が私を抱きかかえ。

――窓に向かって猛然と駆ける。

――私の頭を覆う青年の手のひらの感触。

――その直後、ガラスが割れるような大きな音がして。

――そして、一瞬で私の目の前は闇に満たされた。

――あれ？

――・・・ガラス・・・？

――ガラス！

「・・・あっ！」
エミリアはハッとして、振り返った。

先ほどまで、自分が身を乗り出して青年の背中を見つめていた。
あの窓の方を。

――
そうだ。

――
理由は分からないけど。

――
あの時。

――
私を助けてくれたのは。

――
・・・一度は自分を殺そうとした。

あ。

彼だったんだ。

「あ……………」

恐怖、罪悪感。

ちりばめられた様々な感情。

そんなものが入り混じる、言葉では言い表せないような感情が私を

支配した。

「・・・・・・・・・・。」

そしてしばらくの間、少女は何かに躊躇っているかのように表情を曇らせ、その場で立ち尽くしているのだった。

I n i z i o

太陽。

それはいつも変わることなく空にあるもの。

そして、それは様々な象徴。

あなたは、俺達に与える。

光と。

命と。

———それから時間。

そんな大切なものをくれる、あなたなのに。

悠然と大地を照らし続けるあなたは。

まるでこう伝えようとしているかのように輝きを放っている。

———
“決して太陽を見つめるな。”
———と。

なぜですか？

なぜあなたは、与えるだけで何も欲しがろうとしないのですか？

俺は欲しい。

自分が今まで生きた軌跡が。

欲しい。

欲しいんだ。

そして今、ナポリの街中を俺は歩いている。

「・・・・・・・・。。。」

アルバートは歩きながらゆっくりと空に向けていた視線を落とす。
靴の底から石畳の感触が伝わってくる。

「・・・・・・・・。。。」

アルバートは感じ取りながら、また思考を巡らした。

――ユダ。

――キリストの十二使徒の一人でありながら。

――僅かな金で敵方にキリストを売った裏切り者。

— 今の俺にはその言葉がピッタリと当てはまる。

— もちろん、金のために裏切ったんじゃない。

— 計画的な犯行でもない。

— でも裏切り者は裏切り者だ。

— 無意識の行動だったとはいえ。

— 俺のとった行動は。

— 全てを裏切り。

— そして全てを捨てる選択だった。

— 無意識だったからしょうがない。

— そういえばそれで終わりだ。

――
だが。

――
無意識であつたからこそ。

――
きっと俺の中の根底にある何かが。

――
その選択を取った。

――
それは、俺の意思で選んだ選択以上に。

――
俺の意思が込められた選択なのかもしれない。

「……くそ……。」

人通りが多く、海に面した石畳の道を歩きながら、アルバートはポツリと呟いた。

俺は……。

どうして、あんな行動をとってしまったのだろうか？

あの時、俺は無意識に銃を取り出し引き金を引いてしまった。

本当に、あの瞬間体が無意識に動いたんだ……。

俺は一体何をしようとしているんだ……？

……わからない。

あの妙な声の正体も。

あの子を助けた理由も。

俺にはわからない。

でも、おそらく。

現時点で全く見に覚えの無いことであるなら。

“スピア”の一員になる前の知らない俺の過去が。

関係しているのだろう。

それしか考えられない。

あの子も何か関係があるのか・・・？
いや・・・あの妙な声したのはあの子と会った時だけじゃない。

でも、あの子も俺の過去の記憶の要因である何かを。

持っていたんだ。

・・・ならば説明がつく。

俺はきっと・・・自分の過去の記憶を捜し求めたんだ。

組織を裏切り、マリー達を裏切り、ルキアーノさんを裏切り、自分の居場所を失ってまで。

知る価値のある・・・記憶か・・・。

もう後戻りは出来ない。

組織の大原則。

外部に情報も漏らす要因は例外なく完全抹殺。

これは揺ぎ無い現実だ。

もう。

――俺は一生このイタリアという地で。

――逃げながら生きていくしかない。

――おそらく・・・・・・あの子も。

――こうなったら、なんとしても。

――必ず記憶を取り戻してやる。

・・・・コツ・・・・コツ・・・・コツ。

靴が石畳を規則正しく叩く。

しばらくアルバートが道なりに進むと、大きく海に突きだした船着場のような場所が見えてきた。

そこには、船は一隻も止まっておらず、木でできた支柱には貝類が纏わりつき、波が当たって小さく水しぶきを上げている。

「・・・・・・・・・・。」

アルバートはゴソゴソと自分のポケットをあさり、タバコの箱を取り出して中身を確認した。

箱の中にはタバコが二本とライターが入っている。

「・・・・・・・・一服していくか。」

アルバートは腕時計を見つめ、まだ時間に余裕があることを確認すると、ゆっくりと船着場に歩み寄り、その先端に腰を下ろして海に足を放り出すようなかたちで座った。

シュボツ。

勢いよくライターが火を噴き、タバコの先端が赤く燃え上がる。

「・・・・・・・・・・。」

アルバートは頭上に煙を吹き、ぼんやりと虚空を眺めた。

(・・・よくことわざで“この港町、ナポリの景色を見てから死ね”とかなんとか言うが・・・まあ、結構的を射てるかもな・・・)。

ピチャ・・・チャプンツ・・・ピチャツ・・・。

船着場の支柱に当たる波が小さくしぶきを上げ、独特の音を奏でる。

「・・・・・・・・。。。」

沖から吹き付ける潮の匂いを含んだ風を、体に受けながらアルバー
トはしばらくの間、ただぼんやりと青空に浮かぶ雲を眺めていた。

・・・トン・・・ギイ・・・トン・・・トン・・・ギ
イ・・・。

「・・・・・・・・ん？」

しばらく宙を眺めていたアルバートは、ふと自分の方に近づいてくる足音に気がつき視線を後ろに向けた。

その視線の先には、見知らぬ男性が立っていた。

「……？」

アルバートは男の容姿をみて少し不思議そうな表情を浮かべた。

男性にしては珍しく、肩にかかりそうなほどの長い黒髪でスーツを着ていて、どこかパーティーにでも行くかのような格好にも見えた。

年齢は……20代前半くらいだろうか。

「……隣、いいかな？」

男はアルバートと目が合うなり、そう言った。

「……かまわない。」

アルバートは素っ気無くそう言い、再び視線を沖に戻す。

「そうかい。悪いね。」

男はそういうと、アルバートから2メートルくらい離れたところに腰を下ろし、アルバートと同じような体勢を取った。

少しの間二人は互いに沈黙していたが、不意に男が口を開いた。

「この辺じゃ見かけない顔だけど、どこから来たの？」

「・・・北の方から。」

アルバートは男の質問にそう返す。

「北の方って・・・随分アバウトだな。」

男は思わず苦笑する。

「・・・・・・・・・・。」

「まあいいか・・・名前はなんて言うんだい？」

「・・・・・・・・・・。」

アルバートはその男の質問にどう返答しようか少し考え込んだ。

「・・・おっと、失礼。・・・相手の名前を聞く前に自分の名前を名乗らなくちゃな。・・・俺はベーリオっていうんだ、よろしくな。・・・で、君の名前は？」

ベーリオという男性は薄く笑みを浮かべながらそう聞いた。

「・・・アル・・・いや。・・・コルティリーノ。」

アルバートは本名を名乗ろうとして途中で止め、咄嗟に単独行動の仕事で使っていた偽名を名乗った。

アルバートはアルマの中でも成人に近いため、よく単独で仕事を任される。

その際、自分の情報は教官にさえほとんど明かさないし、それを教官も心得ている。

ようは、成人に近いアルマは単なる人間兵器として扱われるわけではなく、一端の構成員として頭数に数えられる。

だから、偽名で名乗れば少なくとも“スピア”にすぐに所在地を知られることは回避できる。

「コルティリーノ・・・“ナイフ”って意味だよな?・・・随分渋い名前だな。」

「・・・昔からよく言われるよ。・・・別に“リノ”でいい。」
アルバートは素っ気無く言った。

「ふむ・・・そんなじゃあ、リノ。」

「・・・なんだ？」

「リノは学生か？それともこの辺で働いてるのか？」

「・・・働いてる。」

アルバートは少し考えてからそう言った。

「ほお・・・で職業は？」

「・・・いろいろ。・・・定職に就いてるわけじゃない。・・・
アルバイトをしてるんだ。」

「そうか・・・まあ深くは聞かねえよ。・・・確かにここんところイタリアの南部は失業者が多いからな。・・・仕事もそう見つからんか・・・若者ならなおさらだな。」

「……まあな。」

「悪かったな、こんなこと聞いて。」

「いや……別に気にしてない。」

「そうか……。」

ベーリオはそう言って苦笑した。

そして再び二人の間に沈黙が続いた。

「……あんたも吸うかい？」

しばらくして沈黙を破ったのは、意外にもアルバートの方だった。

アルバートはポケットからタバコの箱を取り出し、蓋を開けてベ
リオに見せた。

「いいのか？・・・最後の一本みたいだが？」

「別に・・・後でまた買えばいい。・・・これも何かの縁だ。」

「そうか・・・悪いな、それじゃあお言葉に甘えさせてもらうよ。」
ベリオはそう言って、アルバートから最後の一本を受け取った。

シュボツ。

アルバートは持っていたライターに火をつけ、ベリオの前にそれ
を近づけた。

「おっと、・・・度々悪いな。」

ベリオはタバコの火を受け取ると、ゆっくりと深く息を吸い込み
白煙を頭上に吹いた。

アルバートはすぐにポケットにライターを仕舞うと、ベリオに続
けてゆっくりと煙を頭上に吹いた。

「・・・なあ・・・リノ。」

「なんだ？」

アルバートは自分の偽名を呼ばれそう答える。

「お前さん・・・どうみても未成年に見えるんだが・・・俺の気のせいかな？」

「・・・ああ・・・気のせいだ。」

「はは・・・そうか・・・。」
ベーリオは苦笑した。

「・・・あんたは何の仕事をしているんだ？」
アルバートはふとそんな質問を投げかけた。

「俺か？・・・俺はこの辺で船やらボートやらの修理をしているんだ。・・・まあ家業だからな。」

「家業・・・ね・・・そのボートの修理ってのは、そんなお洒落な格好するのが普通なのか？」

「あ？・・・ああ、このスーツのこと言ってるのか？違う違う。」
ベーリオは手を振って否定した。

「じゃあ・・・なんでそんな格好してるんだ？・・・パーティーか何かか？」

「いや・・・ピアノのコンサートに行ってきたんだ。・・・古い知人が、そのコンサートを開いたピアニストのファンでね。結構しつこく薦められて以前から気になってたんだが、なかなかコンサートに行く機会が無くてさ・・・。それが一昨日、そのピアニストがイタリアでコンサートするって言うから、わざわざ足を運んで見てきたって訳さ。・・・いや、さすがに電車とタクシーばかりで腰が痛くってよ・・・。」

そう言っってベーリオは腰を叩いて見せた。

「イタリアでコンサートか・・・その口ぶりからして、そのピアニストはイタリア人じゃないのか？」

「ああ、その通り。・・・確か・・・アジア系の・・・あ、そうそう・・・ジャポネーゼだったな。名前は・・・えーっと・・・“イングリット”・・・なんたらだったような・・・。」

「・・・コンサートに来ておきながら、演奏者の名前も知らないなんて、とんだ客だな。」

「はは・・・まったくその通りだな。まあ・・・だけど、演奏はそれはそれはすごかったぜ？」

ベーリオはそう笑いながら言った。

しばらくの間、二人の間にはそんな何気ない会話が続いた。

「ところでよ、リノは連れとかいないのか？」

「・・・連れ？・・・どういう意味だ？」

「どういう意味って・・・そりゃ女だよ、オ・ン・ナ。」

「・・・なんでそんなことを聞く？」

「だってよ、俺が言うのもなんだが、お前さん若い上に結構顔もいいしな。・・・彼女の一人でもいるんじゃないのか？」

「いない。・・・俺はそういうのは苦手なんだ。」
アルバートはそう即答した。

「ふーん・・・じゃあ一人暮らしなのか？」

「・・・・・・・・。」

「・・・ん？・・・どうした？・・・一人じゃないのか？」

「・・・・・・・・わからない。」

一瞬、ある事が頭を過ぎったがアルバートは考え直してそう答えた。

「はっ？」

「わからないって言ってるんだ。」

「わからないって・・・何だそれ？からかってるのか？・・・それとも、なんかの謎かけか・・・？」

「・・・そのままの意味さ。」

「？」

ベーリオは不思議そうに首を傾げる。

「気にするな。……まあ、多分一人暮らした。」
アルバートはそう言って苦笑した。

「いや・余計分からんねえって……」
ベーリオはさらに不思議そうな表情を浮かべて言った。

そうしているうちに、二人の目の前で何かの鳥の群れが、V字の陣形を組みながら地平線の方へと飛んでいった。

二人はその鳥の群れが地平線の向こうに消えていくのをしばらくの間眺めていた。

「……さてと……。」

少しすると、アルバートはゆつくりと立ち上がり、その場で軽く服をパンパンと払った。

「・・・行くのか？」

ベーリオは視線を海に向けたままそう聞いた。

「ああ・・・。これから二つほど用事を済ませないといけないんだ。」

「そうか・・・。それじゃあ達者でな。・・・また会う機会があったらよろしくな、リノ。」

「ああ・・・あんたもな、ベーリオ。」
アルバートはそう言って、ベーリオに背を向けたまま右手を軽く振って別れの挨拶をした。

ベーリオもそれに答えるように軽く手を振った。

しばらくして、アルバートの姿は街の中へと消えていった。

「・・・アルバイトで・・・何人暮らしかもわからない、ヘビースモーカーの未成年の青年か・・・ちよつと変わったやつだな。」
一人船着場に取り残されたベーリオは苦笑しながらそう呟いた。

こうして、アルバートはベーリオと別れを告げたのだった。

アルバートはしばらくの間、ゆつくりとナポリの街中を歩き続けた。
街は、まだ朝だというのに地元の人と観光客で活気に溢れ、車が我先に進もうと長蛇の列を成している。

ガリバルディ広場を通り、少し歩くとサン・ロレンツォ・マッジョーレ教会が右手に見えてきた。

それからさらに通りをまっすぐ進むと、クローチェ通りに差し掛かりそこでアルバートは足を止めた。

「・・・確か・・・奴らの集まる場所はこの辺の・・・酒場だったよな・・・。」

アルバートはそう言っただけで周囲をゆっくりと見渡した。

ナポリ大学がすぐ近くにあるこの通りはアルバートと同じ年ぐらいの学生達も多く、界限には老舗の菓子店などが点在し、観光客の姿も多く見られる。

だからこうして、この辺をうろついていても決して怪しまれることはなかった。

「・・・そうだ・・・この通り沿いな。」

アルバートは方向を思い出した様子で、ゆっくりと路地裏のほうへと歩いていった。

・・・コツ・・・コツ・・・コツ・・・コツ・・・。

進むにつれて道は建物に日光をさえぎられて陰り始め、次第に店の姿も見えなくなってきた。

先ほどの通りとはうって変わって、全くと言っていいほど人通りはほとんど無い。

仮にこんな場所で悲鳴が上がったとしても、誰の耳にも届かないだろう。

さすがイタリア一、殺人事件の立件数が多いナポリの裏路地といったところか。

しばらく、人通りの無い裏路地の奥を進むと一軒の酒場が見えてきた。

・・・コツ・・・コツ・・・

アルバートはその酒場の入り口の前で足を止めた。

「・・・・・・二年ぶりくらいか・・・・ここに来るのは・・・・」
アルバートはポツリと呟いた。

店の入り口の扉は木製のもので、看板も無く、扉に“VINI”と表記してあるだけだった。

“VINI”とは“vinai”の略で“酒屋”を意味する。

「・・・・・・」

アルバートは入り口の取っ手に手を掛け、ゆっくりと扉を開いた。

・・・・ガチャ・・・・チリン・・・・チリン・・・・

ありふれた入店の合図を示す鈴の音が店内に響き渡る。

店の中はシックな雰囲気が漂い、どこかで聞いた頃あるようなクラ

シックが流れていて、カウンターが少々と円形のテーブルが数個並べられているだけのシンプルな内装だった。

だが、不自然なことにその店内の客は男性しかおらず、しかもどいつもコイツも真っ当な仕事をしているようには見えない、この場には似つかわしくないような格好をした者達ばかりだ。

さし当たって、チンピラかそれとも・・。

「・・・・・・・・。」

アルバートは少し周りを見渡すとすぐに視線を前に戻し、黙ってカウンターの方へと歩き出した。

店に入ってきた見かけない青年の姿に、周りの男達は睨みつけるような鋭い視線を送る。

「・・・・・・・・。」

アルバートはそんな男達の視線をものともせずにかウンターの前まで歩み寄り、そこで立ち止まった。

「・・・・・・・・マスター・・久しぶりだな。」

アルバートはカウンターでワイングラスを拭いている男にそう告げた。

その男はグラスを拭くことに神経を集中していたのか、アルバートが入店してきたのに気づかなかつたらしく、声をかけられてハツとしたようにアルバートに視線を向けた。

「あ？・・・おお！リノじゃないか！」

男はアルバートの姿を見るなり、そう声を上げた。

「・・・元気にしてたか？」

「ああ、まあな。それにしてもどうしたんだよ？最近ずっと顔見せないから、どっかで仕事しくじって死んじまったのかと思ってたんだぜ！？」

喜んでいる様子でその男は言った。

この男の名前はニッコロ。

そっちの世界では通称“提供人のニッコロ”と呼ばれていて、結構

名が通っている。

以前俺がこの地でナポリマフィア、通称“カモツラ”の幹部暗殺のために、その組織のお抱えの“殺し屋”として、潜りこんでた時によく世話になった人物だ。

二年前のその時は、幹部を暗殺した俺はそいつの側近に裏切り者の濡れ衣を着せるアリバイ工作を施し、その場から消えた。

その後のことは知らないがニッコロの口調からして、大方俺はその側近に殺されたことにでもなってたんだろう。

もちろん、ニッコロは俺がスパイだということを知らない。

俺はこうしたマフィアの潜入工作員の仕事をよく請け負っていた。

こちらの正体がバレれば即刻消すつもりで付き合い合っているが、正体がバレていないのならこうして関係を壊さないままその場から消える。

これが俺のやり方だった。

こうすることで、何かと仕事上のコネができて便利だったのだ。

「実際は結構ヤバかったがな．．．．．でも、そんな簡単に俺は殺られないさ。」

「っはっはっは．．．それもそうだな。」
ニツコロは笑いながら言った。

「おい、マスター．．．このガキは一体何者だ？」
突然、二人のやり取りを横で黙って見ていた男がそう話しかけてきた。

その男は体格がガッチリしていて、黒いサングラスで顔を隠しているようだった。

「ああそうか、．．．おめえはここに来るようになって一年だから知らねえんだったな．．．こいつは、二年位前にここによく来た“コルティリーノ”っていう殺し屋さ．．．まあ、確かに見た

目はそこら辺にいる学生と大差ないが、腕前は超一級なんだぜ？」

「・・・こんなガキが？・・・信じられねえな・・・」

男は疑い深い目でアルバートを睨みつけた。

アルバートは少しの間その男に視線を合わせたあと、すぐに視線をニッコロの方に戻した。

「なあ、ニッコロ。・・・仕事を紹介してくれないか？」

「おう、任せて置け。一週間後にもう一度ここに来な。・・・それまでに仕事を用意しておく。」

「一週間後か・・・長いな。」

「しょうがねえだろ？・・・いろいろとこっちも忙しいんだ。・・・お前は確かに腕はいいが、事を急ぐその癖はいかな。」

「ああ・・・自分でも治そうとは思ってるよ。」

「分かってるならいいんだよ。・・・とにかく、一週間後にここに来てくれれば仕事を紹介する。・・・それまで待ってくれ。」

「そうか・・・わかった。・・・それじゃあ、一週間後にな。」
アルバートはそう言って、ニコロに背を向けると店の出口へと歩き出そうとした。

その時。

ガシッ。

先ほど話しかけてきた男の大きな手が急にアルバートの右肩を掴んだ。

「待て待て、挨拶もなしに帰るのか？」
男は口元をニヤつかせながら言った。

「・・・離せ。」
アルバートは視線を前に向けたまま、男に言う。

「・・・俺に指図するんじゃない。テメエみたいな、ガキが仕事だあ？・・・ふざけるのも大概にしろ。」

「・・・離せ。」

アルバートは男に視線を向けながら、さっきより強い口調でそう言う。

「おいおい、あぶねえからよせて・・・。」

ニッコロが止めるように男に言う。

「るせえッ！！テメエは引っ込んでろ。」

男はそう声を張り上げた。

「やれやれ・・・知らんぞ。」

ニッコロは呆れた口調でそう言うと、再びグラスを手に取りそれを磨き始めた。

「・・・もう一度だけ言う・・・離せ。」

「はい、そうですかって、離すように見えるか？あ？」

「・・・そうか。それじゃあ・・・」

「なんだ？・・・なにか言いたげな顔だな、ん？」

「そこで寝てろ。」

アルバートがそう言った瞬間だった。

ヒュッ！

ガッ！

「！？」

アルバートは目にも留まらぬスピードで自分の右肩にのっている男

の手首を左手で掴み、右手で下からすくい上げるようにして男の腕の付け根を掴んだ。

ビュオツ！

空を切るようなものすごい音と共に男の体は高々と宙に持ち上げられ、次の瞬間、今度は床に向かって凄まじい勢いで急降下した。

バツカンアアンツ！！

木製の床が破れる激しい音と共に男の体は激しく床に叩きつけられた。

砕けた床の木片が四方八方に飛び散る。

「ガッ・・・・・・・・！！！！」

勢いよく床に叩きつけられた男は、あまりの衝撃にまともに呼吸もできない様子で、その場でうずくまってしまった。

「・・・俺にいちいち絡むな。・・・俺はお前みたいな奴が一番癪に障るんだよ。」

アルバートはパンパンと手の平の汚れを払いながら、うずくまっている男に向かって吐き捨てるように言った。

その様子を見ていた周囲の男達がザワつき始める。

「おいおい・・・まったく・・・もうちょっと手加減してやれよ・・・リノ。・・・これで何回目だよ、床の修理・・・」

ニッコロはまたかと言わんばかりに呆れた様子で深い溜息をついた。

「・・・悪いな、・・・またツケで頼むよ。」

「お前なあ・・・そう言ってツケを返した例がないだろ？」

「・・・まあな。」

アルバートはそう言ってニヤリと笑った。

「・・・ぐ・・・ぐう・・・。」

先ほどアルバートに投げ飛ばされた男は苦痛の表情を浮かべ、額にあぶら汗を滲ませながらアルバートの方を見ている。

「・・・今度絡んできたら迷わず殺すからな。」
アルバートはそうゆっくりと睨みつけて言った。

「・・・!!」
男はアルバートの強烈な殺気をまともに受けたせい、すっかり萎縮してしまった。

「・・・それじゃあな。」
アルバートはそう言って、ニッコロに手を軽く振ると店の出口へと歩き出した。

「おう、一週間後にな。」
ニッコロもそれに答えるように軽く手を振った。

ガチャ・・・バタン・・・チリン・・・チリン・・・。

店内に鈴の音が再び響き渡り、そしてすぐに静寂に戻る。

「……ぐう……。」

先ほど投げ飛ばされた男は依然苦しそうにうずくまったまま、うめき声を上げている。

「……全く……いつ見ても豪快な投げっぷりだな……あれでまだ未成年だって言うから笑っちゃまうな……。」

カウンターの前の床でうずくまる男を見下ろしながらニツコロはそう言って苦笑した。

店の外に出たアルバートはいったん立ち止まり、ゆっくりと深呼吸した。

「ふう……さじ加減に気をつけるのは面倒だな……。」
アルバートはそう言いながら、体を解す様に体中をゆっくりと動かしてストレッチし、最後に肩をグルグルと回して骨をポキポキと鳴らした。

「・・・さて・・・最後は買出しだな・・・。」
アルバートはそう呟くと裏路地を後にした。

それから数時間が経ち、辺りは暗くなり始め、地平線の向こうに夕日が沈もうとしていた。

アルバートはそれから大通りに面したスーパーで買い物を済ませると、ビニール袋を左手に握り締め、ゆっくりと帰り道を歩き出した。

・・・コツ・・・ガサ・・・ガサ・・・コツ・・・。

靴が石畳を叩く規則正しい音にビニールの袋がすれる音が入り混じる。

「・・・・・・・・。」

アルバートはうつむいたまま黙々と歩いている。

そしてふと、昨日の出来事について頭の中で考え始めた。

・・・・・・・・まさかあんなことになるとは想像もしなかったな。

・・・・・・・・今まで仲間だった人たちを裏切って。

・・・・・・・・こんなところにまで来てしまったんだものな。

・・・・・・・・次に遭うときはお互い敵同士・・・・か。

・・・・・・・・でも、もしかしたら大人しく組織に戻ると言えば・・・・。

―― ・ ・ いや。

―― ・ ・ ありえないな。

―― ・ ・ 組織は絶対秘密主義。

―― ・ ・ しかも俺は“アルマ”だ。

―― ・ ・ 組織にとって動く機密情報。

―― ・ ・ それが、自ら自分達をあからさまに裏切るような行動を起こして、しかも外部と接触を持ってしまった。

―― ・ ・ 連れ戻してもまた裏切るかもしれないそんな危険な存在を生かしておくわけが無い。

―― たとえ、ルキアーノさんやブルーノ局長がそうしようとしなくても、イタリア政府や他の政府機関が黙っていないだろうな。

―― アルマの情報が外部に漏洩し、世間に知れ渡れば、現政府は崩壊は免れないからな。

—— そんな危険を冒してまで俺を生かしておくメリッ
トは何処にも無い。

—— …… やっぱり、もう戻ることは出来ない。

—— …… 次にエリオット達に…… 遭う時は。

—— …… その時は……。

—— …… 仕方が無い。

——ルキアーノさん。

——……すみません。

「……お父さん、早く」。
ふと少年の声が聞こえた。

考え事をしていたアルバートは一瞬で目の前の現実に戻され。

そして、視界に親子の姿を捉えた。

一人はまだ小学生低学年くらいの少年で、もう一人は大柄な成人男性だった。

「お父さん、家に着いたら今日はどんなこと教えてくれるの？」
少年はそう言いながら男性の腕にしがみついている。

「そう焦るなって。今日は特別に遠くまで飛ぶ紙飛行機の作り方を教えてやるよ。」

「本当！？やったあ！！ねえねえ、早く帰ろう！」
少年は男性の腕を引っ張って言った。

「痛てて・・・そんなに引っ張るなって。」
男性はそう言っているが、どこか嬉しそうに見えた。

「・・・・・・・・・・。」

アルバートは数十秒ほど、その親子のやり取りを見つめていた。

「・・・・・・・・・・。」

そしてアルバートは視線を下に戻すと、急に道を左に逸れ、来た道と別のルートを通るようにして目的地を目指した。

それから三十分ぐらい経っただろうか。

アルバートは小屋へと続く緩やかな上り坂の小道を歩いていた。

・・・・・・・・ザツ・・・・・・・・ザツ・・・・・・・・。

靴底が乾燥しきった土の地面と擦れて、ザラザラと音を立てている。

辺りはもうかなり暗くなり、夕日はもう半分くらい地平線に沈むところまでできていた。

夕日の光は地平線に向かってのびている雲に当たって拡散し、雲の輪郭がオレンジ色に光り輝いている。

アルバートは時々振り返り、その地平線に広がる光景を何度か見つめた。

しばらくして、やっと目的の小屋の前に着いた。

——もうすぐ、ずっと気になっていた事の真相がはつきりする。

「・・・・・・・・。」

アルバートはそんなことを一瞬頭の中で呟き、黙ったままドアノブに手を掛けゆっくりと扉を開いた。

・・・・・・・・ガチャ・・・・・・・・ギィ・・。

アルバートは小屋の中に入ると、辺りを見渡した。

「・・・・・・・・。」

小屋の中は静まり返り物音ひとつしない。

「・・・・・・・・ふっ・・・・。」

そうして、アルバートは今日この時まで、ずっと気になっていたひとつの事実の行方を確信した。

「・・・・・・・・まあ、予想通り・・・・か。・・・・こういうことには、勘が冴えるんだよな・・・・。」
アルバートは苦笑しながらポツリと呟いた。

この小屋は、廊下の途中にある自分が使っている部屋と、突き当たり奥にある例の一室、そして玄関から向かって左側の通路を少し進んだ辺りにあるキッチンや風呂などの生活に必要な場所と、そのさらに奥にある物置で構成されている。

つまり実質、居住空間は廊下の途中にあるアルバートが使っている

一室と奥にある例の一室の二つだけ。

ここから物音ひとつ聞こえないということは。

つまり。

そういうことだ。

・・・ガサツ・・・。

アルバートはゆっくりと持っていたビニール袋を床に置いた。

「・・・・・・・・。」

しばらく、アルバートはその場に立ち尽くし、これからのことについて頭の中で考えを巡らせていた。

「……よし。」
考えがまとまったのか、軽く息をつくとき、アルバートは廊下の奥に視線を向けた。

そして、ゆっくりと廊下の奥へと足を進めた。

……ギイ……ギイ……。

廊下が軋む音がいつもより一段と重く廊下に響く。

すこし歩いて、廊下の中間くらいに差し掛かったとき、アルバートはふとあることに気がついた。

「……窓が開いてるな……出て行く前に外の景色でも見てたのか。」

そう呟くと、ゆっくりと開いていた窓の取っ手に手を掛けた。

ギィ・・・ギ・・・バタン。

「・・・。」

アルバートは窓を閉め終わると、軽く溜息をつき、再び廊下の奥を
目指した。

そして、目的の一室の扉の前にたどり着くと、取っ手に手を掛け、
ゆっくりと回した。

・・・ガチャ・・・。

-----。

扉を開けると、朝方まで確かにエミリアという少女がいたはずの、その一室の風景だけが変わらぬ様子でそこにあった。

ただ完全に全く一緒というわけではなかった。

あの時とは時間帯が違うため、夕日が窓から差込み、壁の一部を赤々と照らしている。

そして、ベッドシートが綺麗に整頓され、テーブルの上にあった食膳も、少女のために置いておいた現金も、もうそこには無かった。

「……………」

アルバートは黙ったまま少しの間、その整頓されたベッドに視線を向け、そして視線を戻すと、ゆっくりと夕日が差し込んでいる窓の方へ近づいた。

窓の外を眺めると、地平線に今にも沈もうとしている夕日が見えた。

「・・・・・・・・。」

アルバートはゴソゴソと自分のポケットの中を探り、タバコの箱を取り出して蓋を開けた。

だが、もう中にはタバコは一本も残っていなかった。

（そうか・・・・・・・・そうだったな。・・・・最後の一本はベーリオにあげたんだったな・・・・。）

「・・・・・・・・。」

アルバートは深く溜息をつき、壁に寄りかかりながら窓の外に顔を向け、ゆっくりと目を閉じ、風に揺られて擦れあう草木の音に耳を傾けた。

――サア・・・・。

風に吹かれ擦れあう草木は、ゆっくりと静かに、そして少し物悲しい音を奏でた。

「・・・・・・・・。」

アルバートはしばらくの間、そんな音にそっと耳を傾けていた。

――。

しばらく時間が流れ、夕日が地平線の彼方に沈むのを確認したアルバートは視線をゆっくりと部屋に戻した。

ガタッ。

その時、ふと部屋の扉の向こうから物音が聞こえた。

「・・・ん？」

アルバートはその音を聞いて、扉の方に視線を向ける。

・・・ガチャ・・・。

そして、誰もいるはずがない扉の向こう側から加えられた何かの力で、ゆっくりと僅かだが扉が開いた。

そして少しして、その僅かな隙間からゆっくりと何かが顔を覗かせた。

それは、頭に三角巾のようなものを巻いていたが、アルバートはその顔に見覚えがあった。

そう。

それは、朝方この部屋で自分と会話を交わしていた、あのエミリアのものに間違いなかった。

「あ……。」

ポトツ。

アルバートの手から空のタバコの箱が、力無くポトリと床に落ちた。

「あ、あの．．．さっき玄関に荷物が置いてあったので．．．ここじゃないかと思ひまして．．．。」
少女は小さな声でそう言った。

「．．．．．。」
アルバートはポカンと口を開けたまま、壁に寄りかかったままその場で立ち尽くしている。

「あの．．．．．モップ．．ありませんか．．．？床以外の掃除は一通り終わったんですけど、モップだけ無くて．．．．．．．．．．さっきまでキッチンの奥の物置で探していたんですけど見つからないんです．．．。」

エミリアは小さな声でそう聞いた。

「．．．．．。」

「あの．．．．．どうか．．．しました？」

「．．．．．逃げなかったのか．．．？」

アルバートは予想外の出来事に少し驚いた様子で聞く。

「．．．あ．．．はい．．一応．．。」

エミリアは、視線を逸らしながらそう答えた。

「・・・・・・・・なぜ？」

「・・・・・・・・いや・・・・・・・・あの・・・・・・・・その・・・・・・・・。」

エミリアは、アルバートの右手にチラチラと視線を向けながらオロオロし始めた。

「・・・・・・・・？」

アルバートはその様子を見て不思議そうな表情でエミリアを見つめている。

「・・・・・・・・あの・・・・・・・・その・・・・・・・・な、なんでもありません。」

エミリアはアルバートから視線を逸らすと、そうポツリと言った。

「ふ・・・・・・・・まあいいか。」

アルバートはその様子を見て苦笑する。

「・・・・・・・・。。。」

すると、エミリアはゆっくりとアルバートの方に歩き出し、先ほどアルバートが落としたタバコの箱を拾い上げ、それを差し出した。

「・・・・・・・・。。。」

朝方は自分に近づきさえしなかった彼女が、自分に近くに歩み寄り、タバコの箱を手渡そうとしていることにアルバートは少々驚いたが、すぐにそのタバコの箱を受け取った。

「・・・あと・・・これ返します・・・。」

エミリアはそう言って、ゴソゴソと自分のポケットを探り始めた。

「・・・?」

そして、少ししてエミリアはポケットからキレイに折り畳みである五枚の紙幣を取り出した。

アルバートは「ああ、それか。」という表情をして、口を開く。

「・・・言っただろ?・・・それはやる。」

「・・・でも・・・アルバートさんは・・・“逃げるならやる”って言ってました。・・・私は逃げません。・・・だからこのお金もお返しします。」

「・・・いいからもらっとけ。・・・これから生活するなら、なお

さら所持金の半額は君が持つのが筋だろう？これは俺のエゴかもしれないが・・・アンフェアは好きじゃないんだ。・・・強い立場も弱い立場もな。」

「でも・・・私本当にお金の扱いが下手なんです。・・・だから返します。」

「・・・わかった。」

アルバートはしぶしぶエミリアから500ユーロを受け取った。

「・・・すみません。」

「何で謝る？・・・とにかく、まあなんだ・・・これは君の命の保証としてもらっておくよ。」

「え・・・あ、はい・・・すみません。」

「だから謝るなって。」

アルバートは苦笑しながら言った。

「あ・・・はい・・・すみません。」

「・・・・・・・・。」

アルバートは軽い溜息をついた。

「あ・・・・・・・・あはは・・・・・・・・。」

エミリアは苦笑いした。

「まあ、そのうちゆっくり矯正してやるよ。・・・・・・・・よし・・・・それじゃあいくか。」

そう言ってアルバートは部屋の扉の方へと歩き出す。

「・・・・・・・・えっ？」

エミリアはキョトンとした様子で聞き返した。

「・・・・・・・・ん？・・何突っ立てるんだ？・・モップをとりに行くんだろ？」

アルバートはエミリアの方を後ろ目で見ながらそう言う。

「あ・・・・・・・・・・・・・・・・はいっ！」

アルバートの言葉の意味を理解したエミリアは、そう言って小走りでアルバートの近くへと駆け寄った。

そう。

こうして。

俺たちの。

私たちの。

共同生活の日々が幕を開けた。

白い闇（前編）（前書き）

これまでのあらすじ

イタリア政府が極秘で結成した対犯罪組織“スピア”に所属していたアルバートは、ある日、チームメイトのエリオットとの共同襲撃作戦に参加していた。

作戦中にアルバートは屋敷で少女・エミリアに遭遇し、一度はエミリアを殺そうとする。その時、最近聞こえるくようになった謎の幻聴がアルバートを襲い、そのせいで彼にためらいが生じる。そして、咄嗟に彼女を殺そうとしたエリオットに引き金を引いてしまう。無意識のうちに仲間を裏切ってしまったアルバートは、動揺を隠せないまま、その場にいたエミリアを抱きかかえ逃亡を決意する。その後、アルバートは目覚めたエミリアに自分と行動を共にするか、逃げるのか、二つの選択肢を与え、エミリアは共に行動する決意した。こうして新たな二人の逃亡劇が幕を開けるのだった。今回は、そんな二人に起こった小さな出来事の話である。

白い闇（前編）

二人が部屋で再会してから、数時間が経った。

日は完全に沈み、辺りは闇に包まれ、二人がいる小屋に電灯が灯る。

これから共同生活を始めることになったアルバートとエミリアの二人は、物置の奥から引っ張り出した掃除用具を握り締め、黙々と自分達の部屋の掃除をしていた。

正確にはエミリアが使うことになった部屋だけだが。

先ほど、エミリアはまずアルバートの部屋を掃除しようと提案したが、「俺の部屋は掃除しなくていい」とのアルバートの意向で、しぶしぶ自分の使うことになった部屋の掃除をしていた。

そしてそこにはアルバートの姿もあった。

「・・・屋敷ではどんな仕事をしてたんだ？」

突然、モップで床を拭いていたアルバートはそんな質問をエミリアに投げかけた。

「え？」

突然の質問に、エミリアは思わず手を止めて聞き返す。

「仕事だよ、仕事。・・・あの屋敷で雇われてたんだろ？」

「あ・・・ええ・・・まあ・・・」

エミリアは小さい声で曖昧に返事をした。

アルバート…（・・・大分萎縮してるな・・・）。まあ、しょうがないか。・・・ルキアーノさんに教わった通り、積極的にコミュニケーションをとっていかないとな・・・。それにしても・・・。なんだかんだ言って、あの人にもらったアドバイスで一番役にたったのがあのアドバイスだったのかもな・・・）

• • • • •

アルバートは沈黙したままぼんやりと虚空を見つめ、ふとあの日、教官から初めてもらったアドバイスを思い出した。

[illegible]

——— あれは俺が組織に拾われてから、やっと周りの環境に慣れてきた頃。

――――教官のルキアノさんと宿舎の回廊を歩いていたとき、何気なく言われた言葉だった。

———今でもはつきりと覚えている。

——— たしか冬の終わりの、・・・まだ寒さが残る昼下がりの日のことだ。

「今日の訓練を見ていて分かったが・・・お前はアルマの中でも飲み込みが郡を抜いて早いな。・・・正直、この短期間でここまで上達するとは思わなかった」

アルバートの射撃や体術などといった戦闘の訓練を見学し終えたルキアーノは、歩きながらそう驚嘆の言葉を漏らした。

「・・・ありがとうございます」

アルバートは進行方向に顔を向けたまま、ポツリと答えた。

アルバートの顔はまるで感情の表現を忘れてしまったかのように、繭一つ動かさず、ただ虚ろな目で前を向いている。

「・・・そういえば・・・他のアルマの子で友達になった奴はいるか？」

ルキアーノはアルバートのその表情に目をやりながら、何気なくそう聞いた。

「いいえ。・・・別に俺には必要のないものですから」
アルバートは虚ろな目のままそう答える。

「おいおい・・・あのな、アルバート。・・・お前、少しは他の人とコミュニケーションをとる努力をしたほうがいいぞ。・・・お前、俺くらいにしかまともに口聞いたことないだろ？」

ルキアーノはそう言って、軽い溜息をついた。

「・・・そうですね。でも・・・俺は任務をこなすだけですから・・・そんなの必要ないですよ。・・・俺は一人の方が落ち着くんです」

「ばーか。そりゃ今のお前の話だろ?・・・いつ何時、人とのコミュニケーションが重要になるか分からんぞ?」

「そういうもんですか？・・・俺にはよく分かりません・・・他人とのコミュニケーションの重要性なんて・・・」

「そうは言うけどな・・・お前にもいつか必ずそういう場面に直面するときに来る。それがクライアントとの会話か・・・作戦のチームメイトとの会話か・・・街中での情報収集のときか・・・それはわからん」

「・・・・・・・・・・」

「でもな？これから生きていくうえでそれが一番重要で・・・他人とのつながりこそが、いつも憂鬱なお前に一番いい影響を与える要素なんだと俺は思う。・・・だから技術の鍛錬だけじゃなくて、そういうことにも少しは努力してみろ。・・・友達も恋人も人生においてなくてはならんほどいいもんだぞ？・・・な？」

ルキアーノはそう言って、アルバートの肩をポンと叩いた。

「最後の言葉の意味は理解に苦しみますけど・・・出来るだけやってみますよ」

アルバートは表情を変えないままルキアーノの方に一瞬顔を向け、そしてまた前に向き直すと、そうポツリと答えた。

「よし、よし。それでこそわが教え子だ」

「・・・そりゃどーも」

アルバートはその会話で初めて口元に薄い笑みを浮かべ、そう返事をした。

――そう。

――俺は“アルマ”であって、普通の人間じゃないの
に。

――あの人はいつでも俺を一人の人間として接してく
れた。

――本当は、俺に殺しの手解きを教えればいいだけな
のに。

――“他人との交わり”なんて暗殺するだけの俺にと
って、邪魔なだけのはずなのに。

――でも教えてくれた。

――きっと・・・俺達アルマが持つ、あの“呪われた
本能”の性質を知っているから教えてくれたんだろうけど。

――それでも俺は嬉しかった。

――だから俺はあの人が好きなんだ。

――そして、それを機に。

俺は、寡黙ながらも他人と会話をする努力を始めた。

それは、確実に。

俺の世界を広げていった。

「ああ・・・そうだ。・・・アルバート」

「・・・・・・なんですか？ルキアーノさん」

「そういえば、さっきのコミュニケーションについての話なんだが・・・絶対に守らなきゃならん事を言い忘れた。・・・これは、そこらの形式ばったルールとは違う。・・・お前のためを思っていることだ。・・・でも、絶対守れよ」

「・・・わかりましたから、勿体ぶらずに早く教えてくださいよ」

「よく聞けよ？一度しか言わないからな」

「わかってますよ・・・・・・で・・・アルマである俺のためを思っているの事っていうのは？」

「・・・・・・」
「な。」

「はい。家政婦です」

「ふーん・・・なるほどな」

アルバートはそれを聞いたあと、彼女の容姿を見て納得したようにうなずいた。

あの日、屋敷から突然連れ去られたエミリアに身支度をする暇は無かったので、当然彼女の服装は当初のままだった。

化粧や髪飾りなどといった装飾品を身につけている様子は無く、紺色のワンピース一つに白いエプロンという非情に質素な服装だ。

せいぜい目立つ要素は、肩に掛かるほど長さのブロンドの髪、そして瞳の色がアイスブルーだということくらいだろう。

あの屋敷の家主であるカルロの娘や血縁関係の者であるなら、こんな質素なものしか与えられていないなんてことはまずありえない。

それだけが決め手というわけではなかったが、そんな様子からアルバートは彼女の話に偽りが無いことを確信していた。

そして、彼女の手馴れた掃除の手つきもまた、アルバートが納得する理由のひとつだった。

「で・・・具体的にはどんなことをするんだ？」
アルバートはそう言ってさらに追及した。

「具体的・・・ですか？・・・そうですね・・・、料理に・・・掃除、お茶酌み、買出し、接待、・・・それから・・・」

エミリアは一つ一つ数えるように自分の仕事の内容を読み上げる。

「・・・なるほど、まあつまり雑用ってわけか」
アルバートは苦笑しながら言った。

「はは・・・まあ、そうとも言えますね。・・・でもおかげで大体、身の回りのことはできるようになりましたけどね」

「それだけ仕事を任せられれば、そりゃできるようになるだろうな。・・・それにしてもそれだけたくさんの仕事を任せられるってことは、君は屋敷では結構頼りにされてたんじゃないのか？」

「あ、いいえ・・・そんなこと無いですよ。たまたま、屋敷に家政婦として雇われているのが私しかいなかったんです。・・・だから、当然の結果なんです」

「・・・そうか。・・・あの大きな屋敷で家政婦が一人だけだとやっぱりかなり大変だったか？」

「まあ、それなりに」
エミリアは苦笑いしながら答えた。

「・・・そうか。悪かった・・・こんな当たり前のこと聞いて」

「いいんですよ、私が勝手に答えてるだけですから」
エミリアはそう答えて微笑んではいたが、表情はどこか硬かった。

「・・・」

アルバートは、その様子を見て口をつぐんだ。

「・・・。。。」

「・・・・・・・・。」

気まずい雰囲気は二人の間に広がり、沈黙が流れる。

アルバート…（うつ・・・しまった。・・・なんか気まずい雰囲気だ。さて、・・・どうしたものか・・・）

アルバートはなんとか、この場の雰囲気を崩せる話題はないかと頭の中で考えをめぐらし始めた。

「あの・・・」

そんな矢先に沈黙に耐え切れなくなったのか、エミリアが視線をアルバートに向け、口を開いた。

「ん？」

「あ・・・」

とくに話すことも無いのに、思わず声をかけてしまったエミリアは後悔した様子で、アルバートから視線を逸らした。

「・・・どうした？」

「あ、あの・・・アルバートさんはタバコをお吸いになるんですか？」

エミリアは、咄嗟に苦し紛れに思いついた話題を振った。

「・・・ああ、それなりにな」

「・・・・・・・・そうですか」

「ああ」

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

また、沈黙が流れ始めたので、アルバートはそうさせまいと無理やり話を続けた。

「それにしても・・・・・・・・やっぱり、この年格好だとみんな同じことを聞いてくるな」

「・・・・・・・・そうなんですか？」

「ああ・・・・・・・・今日も町でそんなことを聞かれた。・・・・・・・・未成年なのにタバコ吸ってるのかってな」

「あ・・・・・・・・やっぱり、アルバートさんは成人されてないんですか」

「ああ・・・・・・・・そうだ」

「・・・・・・・・おいくつなんですか？」

「そうだな・・・・・・・・まあ・・・・・・・・18、9くらい・・・・・・・・だな」
アルバートは頭を掻きながら言った。

「くらい？・・・自分の年が分からないんですか？」

「まあな。・・・いろいろあるんだ」

「す、・・・すみません・・・」

エミリアは聞いてはいけないことを聞いてしまったと悟り、しまったといわんばかりの表情を浮かべる。

「君が気にすることじゃない。・・・俺が特殊なだけだ」

アルバートは目を泳がせ途惑っているエミリアを見て、苦笑しながら言った。

「あ・・・いえ・・・そんなこと・・・」

エミリアは口元をもごもごさせて何かを言いかけた。

「ん？」

アルバートはよく聞き取れなかったようで、聞き返した。

「あ・・・いえ、なんでもありません。・・・そうなんですか・・・。本当にすみません・・・」

エミリアは何か言いかけたように見えたが、それを口に出そうとはしなかった。

アルバートは、エミリアが先ほど言いかけた「そんなこと」という言葉が頭の中で引っかかったが、あえて質問はしなかった。

「？・・・まあ・・・別に気にしてない。・・・質問することは悪いことじゃないしな。・・・俺も答えられる範囲のことなら答えるつもりだ。・・・何かあれば聞いてくれ」

「・・・いいんですか・・・?」

「ああ・・・答えられる範囲ならな」

「それじゃあ・・・その・・・アルバートさん・・・お仕事は・・・」

「エミリアはまた小さくボソボソと質問をしようとした。」

「ん?・・・なんだって?」

「質問の内容をはっきりと聞き取れなかったアルバートはそう聞き返す。」

「・・・・・・・・・つ・・・やっぱり、なんでもありません。」
「エミリアは喉元までできていた言葉を無理やり飲み込んだ。」

「・・・どうした・・・?聞きたいことがあったんじゃないのか?」

「・・・いえ・・・大丈夫です。・・・本当に何でもありません」
「エミリアは、何かを悟られまいと無理やり作ったかのような笑顔で答えた。」

「・・・・・・そうか」

「・・・・・・は、はい・・・本当に何でもありませんから」

「・・・それならいいんだ」

「・・・・・・」

「・・・・・・」

[illegible]

アルバートはモップをバケツに放り込んで壁に立てかけると、エミリアに「ついて来い」というように視線を送り、ゆっくりと部屋の外に向かつて歩き出した。

そうして、二人はキッチンの方へと向かうのだった。

[illegible]

アルバートは考え込んだ様子で腕を組み、エミリアはその様子を中心に横目でチラチラ見ながら、落ち着かない様子で手遊びをしていた。

買出しをしてきたので食材は大体そろっていたが、肝心のメニューが決まっていなかったのだ。

「……どうしたんですか……？」

「メニューだよ・・メニュー」

アルバートは軽く溜息をつき、そう答えた。

「メニュー……ですか？えと……何を……作りましょうか？」

「それが問題なんだ……一応いろいろ応用が利くと思って、パスタと適当に野菜を買ってきたんだが……。俺は料理はあまり得意じゃないからメニューらしいメニューも浮かばないんだよな……。エミリアは何かいい案あるか？」

アルバートは頭を掻きながら言った。

「パスタですか……うーん……。あっ！」

エミリアは何かを思いついたようにポンと手を叩いた。

「どうした？……なにかいい案でも思い浮かんだか？」

「……スパゲッティ・アル・ポモドーロなんてどうですか？」

エミリアは自分に視線を向けていたアルバートにそう提案した。

ポモドーロとはイタリア語で“トマト”を意味する。

スパゲッティ・アル・ポモドーロとは、パスタ料理の中でもトマトソースをパスタに絡めるだけのシンプルで基本的なものだ。

「なるほど……。いいんじゃないか？……俺はあまり料理には詳しくないんだが、それなら知ってるしな」

「じゃあ決まりですね……。あとは、ちょこちよこつとサラダとスープを作っちゃいましょうか」

エミリアはなんだか少し嬉しそうにそう言った。

「ああ、そうだな……。ここには家政婦もいることだし……。そう

するか」

「あはは・・・そうですね」

エミリアは少し照れた様子で笑みをこぼしていた。

「・・・・・・・・それじゃあ、始めるとするか」

アルバートはエミリアの方を見ながら薄く笑みを浮かべてそう言った。

「はいっ」

さっきまでビクビクしながら縮こまっていたのが嘘のように、エミリアは元気よく返事した。

アルバート・・・家政婦の仕事をしていたからコレならと思ったけど・・・案の定、喰いついてきたな。・・・これで少しはこの環境に馴染んでくれればいいんだがな・・・)

「・・・・・・・・」

アルバートはとりあえず安心したように深い溜息をついた。

「・・・？・・・どうかしたんですか？」

その様子を見たエミリアが不思議そうにそう聞いた。

「ああ・・・いや・・・なんでもない。とにかく始めよう。」

「あ・・・はい！それじゃあ、私がメインをやっちゃいますね」

エミリアは一瞬不思議そうに首を傾げたが、とりあえず納得したよ

うで、そう元気よく言った。

「・・・じゃあ、俺は何を手伝えればいい？」

「そうですね・・・じゃあ、まず私はトマトとか野菜の下ごしらえするんで、アルバートさんはお鍋にお水をはって、火にかけてくれませんか？」

「・・・それだけでいいのか？ スープとかサラダもあるんだろ？・・・なんか悪いな」

「いいんですよ。ほとんど野菜の下ごしらえが大半を占めてるんですから、他にすることってそれくらいしかないんですよ。あ、でも盛り付けとか後でいろいろあるんで、その時に手伝ってくれませんか？」

「ああ、わかった」

「それじゃあ、パパつとやっちゃいますね」
エミリアはそう言って、腕まくりをした。

「・・・嬉しそうだな」

アルバートはからかうように言う。

「あはは・・・やっぱりそう見えます？・・・私、料理を二人で作るの久しぶりなんです。屋敷では何時も一人で作ってましたし・・・」

「・・・まあ今回の料理も、二人って言ってもほとんど一人みたいなもんだけどな」

しばらくの間二人は黙々と作業に取り組んでいた。

アルバートの仕事はあつという間に片付いてしまい、することがなくなってしまったのでしばらくの間エミリアの様子を後ろから見物していた。

下ごしらえを終え、三角巾を巻いたエミリアが沸騰している鍋とまな板と冷蔵庫の間を、パタパタと足音を立てながら行ったり来たりしている。

アルバートは、今までの言動からエミリアは大人しい性格の女性だと思っていたが、これだけ活発に楽しそうに動き回っている姿を見せられると、もしかしたら明るい性格なのかもしれないとふと思った。

「・・・あの～・・・」

アルバートがそんな考えをめぐらしながら料理の様子を眺めていると、ふとエミリアが声をかけた。

「・・・ん？・・・どうした？」

「あ・・・いえ・・・なんていうか・・・こうもジッと後ろから見られているとなんか落ち着かないっていうか・・・緊張するっていうか・・・」

エミリアは少し、顔を赤らめながらそう言った。

「さっきまで二人だと楽しいとかなんとか言っていなかったか・・・」

「？」

「はい・・・それはそうなんですけど・・・」
エミリアはちよつと困った様子で口ごもった。

「・・・わかったよ・・・これでもいいか？」
アルバートはそう言つて、エミリアに背を向けて見せた。

「あ・・・はい・・・すみません」

「謝るなつて。・・・ほら、続けた続けた」

「は、はい・・・」

エミリアはとりあえず落ち着いたのか料理を再開した。

アルバート・・・（何を恥ずかしがってるんだか・・・）。着替えを
覗いてるわけでもあるまいし・・・）

そんな考えを頭に巡らせながら、アルバートは鍋の沸騰する音や、
パタパタとせわしないエミリアの足音に耳を傾けていた。

「それにしても・・・熱心なもんだな」
アルバートは苦笑しながらポツリと呟いた。

向き合って食事をするなどというと変に二人が意識していると誤解を受けるかもしれないが、別段この配置を二人が望んだわけではない。

狭いテーブルと二つの椅子しかなかったのでこの配置以外に選択の余地が無かったのだ。

「・・・いただきます」

まず始めにアルバートはそう言って、早速料理を一口、口の中に入れた。

「・・・あの・・・お味のほうは大丈夫ですか？」

エミリアは、心配そうな表情でアルバートの方を見つめて、そうきいた。

「ああ、うまいよ。・・・伊達に家政婦やってないな」

アルバートは、すぐにそう答えた。

「そうですか・・・よかった」

エミリアは、安心した様子でニッコリと笑みを浮かべた。

「ああ・・・自分で食べてみればわかるさ」

「そうですね。・・・それじゃあいいただきます。」

エミリアはそう言い、両手を組んで祈るようなポーズをとった。

「ん？・・・何を祈ってるんだ？」

その様子を不思議に思ったアルバートは口に含まれていた料理を飲み込むと、そう質問を投げかけた。

「ああ・・・これですか？・・・これは、ある人から教わった食べ物に対する感謝の気持ちを表したお祈りなんです」

「・・・ある人？」

「はい・・・私にとって・・・とても大切な人です」

「・・・恋人か？」

アルバートは冗談半分でからかうように聞いた。

「・・・残念、ハズレです。・・・その人は女性ですよ」

「ふーん・・・じゃあ母親かなんかか？」

「いいえ。・・・血もつながってない赤の他人の方ですよ」

「・・・赤の他人なのにそんなに大事な人なのか」

「はい。・・・初めて私に優しく接してくれた・・・大切な人です」
エミリアは目を閉じたまま思い出すかのようにそう言った。

「・・・その人は今何処に？」

「今は・・・とても遠くで元気に暮らしてる・・・と思います」
エミリアは笑っているのか悲しんでいるのか、そんなどちらとも取れるような笑みを浮かべてそう答えた。

「・・・そろそろ料理を食べたらどうだ？・・・折角の料理が冷めるぞ」

時は流れ、おおかた食事が終わった二人は食器を片付け終わると、先ほどのように向かい合って座り、食後のコーヒーを飲み始めた。

「恋人はいいとして・・・友達はいないのか？」

アルバートは頬杖をつきながら、エミリアに視線を向けて言った。

「え？・・・あ・・・まあ・・・そうですね」

ティーカップを手に持ちコーヒーを口に運ぼうとしていたエミリアは、それをいったん中断し、そうアルバートの質問に返答した。

「・・・そうか」

アルバートはそれを聞いて、スッと視線を逸らす。

エミリアは少し表情を曇らせ、再びコーヒーを一口飲むとゆっくりとティーカップをテーブルに置いた。

「・・・アルバートさんは・・・お友達はいるんですか？」

エミリアはアルバートを見つめながらそう質問した。

「・・・ああ・・・まあそれに似たのは何人かいる」

「へえ・・・お友達は女の人ですか？それとも男の人ですか？・・・何人いて、年はおいくつなんですか？」

エミリアはそう言って、自分が聞きたいことを羅列した。

「そうだな・・・四人・・・だな。・・・年齢は幅があるけど・・・

13 18歳くらいだな。・・・男が二人、女が二人・・・だな」
アルバートは宙を見つめながら呟くように言った。

アルバート・・（友達か・・・・。まったく・・その友達を自分で撃っておきながらよくこんなことが言えるな。・・・・。我ながら反吐が出る）

アルバートは表情を一瞬曇らせた。

「?・・・・あ・・あの・・・・どうか・・・・しましたか？」

エミリアは、自分が何か聞いてはいけないことを聞いてしまったのかと思い、心配そうに聞いた。

「あ・・いや・・別になんでもない。・・・・ちよつと考え事をしててな」

「そうですか・・・・。私が何か聞いてはいけないことを聞いてしまったのかと・・・・。でも、そうじゃないなら安心しました」

「ああ。・・別に君は聞いちゃ悪いことは聞いちゃいないさ」

「そうですか・・・・よかった」

エミリアはほっとした様子で微笑んだ。

「・・・・・・」

「・・それにしても・・・・四人もいるんですか。・・うらやましいなあ・・」

エミリアは心のそこからそう思っているような表情を浮かべ、そう言った。

「・・・結構少ないほうだと思ってたんだがな」

「私に比べたらそんなことないですよ。・・・お友達のお名前はなんていうんです？」

エミリアは興味津々といった様子でさらに質問した。

「おいおい・・・名前なんか聞いてどうするんだ？・・・会ったこともないだろう？」

「そりゃそうですけど・・・もしこの先会うことがあったら知っておいて損はないじゃないですか」

自分たちが今どのような立場にいるのか理解していないエミリアは、のん気にそう言った。

アルバート・・・（・・・次に会ったら、あんた殺されるって）

アルバートは心の中でそう呟いて苦笑し、質問に答え始めた。

「・・・そこまで言うなら教えてやるよ。・・・女のほうは“マリー”に“カテリーナ”。・・・男は“エリオット”。・・・それから・・・まあ・・・“シルヴィオ”もそうか」

アルバートは最後のその名前をしぶしぶ追加したかのように呟き、何故か呆れたように溜息をついた。

「？・・・どうしたんですか？」

エミリアはアルバートの様子を不思議そうに見つめ、そう言った。

「ああ・・・いや・・・そういえばそんな厄介な奴もいたなんて思ってたさ」

「厄介・・・ですか？・・・でもお友達なんでしょう？」

「まあ・・・友達・・・かもしれないんだが・・・どうもあいつは苦手で・・・な」

アルバートは頭を掻きながらそう言った。

「？・・・はあ・・・そうなんですか」

エミリアはイマイチ理解できなかったが、なんとなくその場の雰囲気ですぐ答えた。

「・・・ああ」

「・・・・・・・・それにしても、いいですね・・・友達」

「どうだろうな・・・俺はどっちとも言えないな」
そう言ってアルバートは苦笑した。

「いいに決まっていますよ。・・・うらやましいです」
エミリアそう呟いた。

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

少しの間二人の間で沈黙が流れた。

そして、しばらくしてアルバートが口を開く。

「なあ・・・一つだけ頼みたいことがあるんだが・・・」

「え?・・・なんですか?」

エミリアはアルバートの口からそんな意外な言葉が出たので少々驚き、そう聞き返した。

「そう・・・それだ」

「え?」

意味不明なアルバートの言葉に再びエミリアは聞き返す。

「だからさ・・・その・・・敬語はやめてくれないか?」

一瞬、シンとして会話が止んだ。

「・・・敬語を・・・ですか?」

ワンテンポ置いて、エミリアがそう確認するように言う。

「そうだ。・・・俺のことは“アルバート”でいいって言ったはずだ。・・・敬語は苦手なんだ。・・・ちょうど同じ年くらいなんだしタメ口でいい」

アルバートは頭を掻いてあからさまに苦手な素振りを見せた。

「それは・・・できません」

少し間を置いて、エミリアの口からは意外な言葉が返ってきた。

「ん?・・・なぜだ?」

意外な返答にアルバートは思わず聞き返す。

「だって・・・私は仮にもアルバートさんに保護してもらってるんですよ？・・・それなのに対等に話すことなんて私にはできません・・・それに・・・今まで私・・・屋敷では敬語以外で人と話をしたことなんか・・・ないんです」

エミリアは少し寂しそうにそうポツリと答えた。

「屋敷では”・・・じゃないのか？”

「・・・あ・・・」

「・・・ここは屋敷じゃない。・・・別にそんなことを気にする必要はない。・・・だから敬語はよしてくれ」

「あの・・・もう少し、考えさせてくれませんか？・・・大げさかもしれませんが・・・私・・・やっぱり抵抗があって・・・」

「はいはい・・・わかったよ」

アルバートは困惑するエミリアの様子を見てしぶしぶそれを了承した。

アルバート・・・（全く・・・そんなこと気にしないでいいって言うてるのに。・・・ちよつと不安になってきたぞ・・・。）

「すみません・・・」

エミリアは申し訳なさそうに頭を軽く下げた。

「謝るな。好きにすればいい。・・・これは単なる俺の要望に過ぎない。・・・君がそうしたければそうすればいいんだ」

「・・・はい」

エミリアは気まずそうに小さい声で答えた

エミリア・・（・・・・・・・・気まずいなあ・・・・・・・・どうして私ってこうなっちゃうんだろ・・・・・・・・。・・アルバートさん・・・・・・・・怒っちゃったかな・・・・・・・・？）

エミリアはゆっくりと視線をテーブルに落とし、黙り込んでしまった。

アルバート・・（・・・・・・・・くそ・・やっぱり話したての奴との会話は苦手だ・・・・・・・・しかも相手は女性だしな・・・・・・・・。弱音を吐いても仕方がないな。・・・・・・・・こういうときは・・粘り強く・・優しく・・・・・）

「・・・・・・・・なあ」

エミリアが落ち込んだ様子で視線を落としたままあげないので、アルバートはしぶしぶ話しかけた。

「つ・・は、はい。・・・・・なんですか？」

エミリアはその声にビクリと一瞬体を震わせ、恐る恐る視線をアルバートに向けた。

「・・・・・・・・そう萎縮しなくていいから、もう少し肩の力を抜いたらどうだ？・・・・・まだ会って一日も経ってないから無理もないかもしれないが、これからしばらくはこういう生活が続くんだぞ？・・・・・・・・毎日そんなビクついてたら君の身が持たない」

「・・・・・は、はい・・・・・」

「・・・焦らなくていい。・・・自分のペースでいいから、ゆっくりと慣れていってくれよ。・・・それまでちゃんと待ってやるからさ」

「あ・・・はい・・・ありがとうございます」

エミリアはホッとしたようにそう答え、笑みをこぼした。

「・・・」

アルバートはそれに答えるように、薄く笑みをこぼした。

アルバート・・・（よし・・・何とか成功っ・・・と）

会話を終えた二人は、再びコーヒーを飲み始めた。

アルバート・・・（思った以上に疲れるな・・・こんなんでこれから先やっいていけるのか・・・？）

アルバートは、目の前で薄く笑みを浮かべながらコーヒーに砂糖を足しているエミリアの方をチラッと見ると、すぐに視線をコーヒーカップに戻した。

アルバート・・・（いや・・・無理にでもやっていかなきゃな。・・・この子は俺の記憶の鍵を握ってるかもしれないんだ・・・無理にまで連れてこうとは思ってなかったけど、向こうから着いて行くって言ってるし・・・これを逃す手は無い。・・・なるべくこの子とはうまくやっていった方がいいだろうしな）

そうして一旦その話題について、二人の会話は終わりを告げた。

その後は、しばらくなんてことはない些細な話題の会話が続き、い

た。

アルバートの友達の話や、エミリアの屋敷での仕事の話、先ほどアルバートが買い出しに行ってきたナポリの町の様子についてなどといったものだ。

そうしているうちにすっかり夜も更けてきたので、二人は会話を終え、自分達のそれぞれの部屋へと戻ろうと席を立った。

初日ということもあり、念のためアルバートはエミリアを部屋まで送り届けると言い、それをエミリアも了承した。

[illegible]

しばらくして、部屋にたどり着いた二人はとりあえず中に入り、明日からの生活の仕事分だけ確認しあった。

その後、エミリアは自分のベッドに歩み寄り、アルバートの方を向いて座った。

「それじゃあ、今日はもう寝ますね。．．．すみません、部屋まで送ってもらっちゃって」

「・・・まあ、この小屋はそんなに広くないから迷うことはないとは思ったんだが・・・明日からのことも言っておきたかったから・・・念のためな・・・今日だけさ」

「はい。・・・それじゃあ、また明日」

エミリアはニッコリと笑いながらそう言った。

「ああ・・・それじゃあな」

アルバートは軽く一息ついてそう言った。

そして、アルバートは部屋を出るついでに、部屋の明かりを消そうとスイッチに手を伸ばした。

その時だった。

「・・・あっ！・・・け、消さないでっ！！」

その様子を見ていたエミリアは、酷く焦った様子で声を張り上げた。

「っ！？」

アルバートは、思いもよらない大きな声に思わずスイッチから手を引く。

「あっ・・・す、すみません！」

エミリアはハツとして我に返り、慌てて謝った。

「・・・あ・・・ああ・・・別に大丈夫だ・・・急に大声出しただけで・・・どうしたんだ？」

「・・・ほ、本当にすみません！・・・ご、ごめんなさい・・・灯りは・・・後で・・・後で・・・自分で消しておきますから・・・大

丈夫です。・・・氣遣ってもらってるのに・・・すみません」
エミリアは何かに怯えているかのような様子でそう言った。

「・・・いや、別に何も謝ることじゃないさ。・・・それじゃあ、
また明日」

アルバートは呆氣に取られたまま、そそくさとその場を退散した。

「す、すみません・・・」

エミリアはアルバートが部屋を出る直前までそう言い続けていた。

そして、パタリとドアを閉めたアルバートは、そのドアの方をジッと見つめた。

「・・・あの慌てぶり・・・妙だな。・・・しばらく様子を見るか・・・」

アルバートはそう静かに呟くとゆっくりと自分の部屋の方へと歩いていった。

こうして平穩でなんてことはない、だが二人で過ごすことになってから初めての一日は幕を閉じたのだった。

白い闇（後編）

あれから4日が経った。

あの日から二人の共同生活がスタートしたわけだが、アルバートはニッコロに取り付けた一週間後の仕事まで、することも無かったので、仕事がくる日まで小屋でおとなしくしていることに決め、ゆったりとした時間を過ごしていた。

その間にアルバートとエミリアの二人は当たり障りの無い会話を重ねていたが、数日も経つとさすがにお互いを取り巻いていた緊張感は薄れ、いつしか気軽に話ができるまでになっていた。

その数日間、アルバートはエミリアの外出を禁じていた。

あの事件でスピーアにエミリアは目をつけられたことを確信していたので、少なくとも一週間は大人しくしているほうが無難だろうと思ったからだ。

エミリアはその間、文句の一つも言わずに鼻歌交じりで家事をこなしていた。

おそらく、彼女がこれだけずっと室内に閉じこもっていても平然としていられたのは屋敷にいる間、たった一人で毎日必死に家事をこなしていた忍耐の賜物なのだろう。

そんなある日、二人で廊下を掃除しているときに、さすがのアルバートもエミリアがここ数日間外に一步も出ていないことを気の毒に思ったのか、ふとこんなことを聞いてみた。

「なあ、エミリア・・・外出してみるか？」

「え？」

いつものように三角巾を頭につけ、掃き掃除をしていたエミリアは急にそう言われて手を止めた。

「だからさ・・・小屋の外に出て見たくないか？」

「え？・・・え？・・・だって、ちよつと前にアルバートさんが“危ないから外出は禁止だ” って言ってたじゃないですか」

「ああ・・・確かにそう言ったな。・・・でも生活し始めてから4日ほど経ったことだし、町はまだ無理でも、小屋の外を散歩するくらいならいいと思うんだ」

「本当・・・ですか？」

「ああ。・・・どうする？・・・外・・・出てみるか？」

「あ・・・でも家事がありますし・・・やっぱいいですよ」

「・・・ここはあの屋敷じゃないんだ・・・そんなに几帳面に毎日働かなくていい。・・・たまには生き抜きも必要だ」

「本当に・・・いいんですか？」

エミリアは申し訳ないような表情を浮かべながら確認する。

「ああ。遠慮することなんか無いよ。・・・俺もちよつと外で昼寝でもしようと思ってるんだ。・・・それで・・・どうするん

だ？」

「・・・・・・は、はいっ！ 行きます！ 行きます！」

エミリアは外に出られると分かった瞬間、今までに無いほど目を輝かしてそう答えた。

「よし・・決まりだな」

アルバートはそう言う、その場で伸びをした。

「私、出かける準備してきますねっ！」

「ああ、わかった。．．．それじゃあ俺は一足先に外の草むらで昼寝してるから」

「はい、わかりましたっ！それじゃあまた後で！」

エミリアは元気にそう言う。と掃除用具を手に握り締めたまま、パタと足音を立てて自分の部屋の方へと走っていった。

「……全く、まるで遠足に行く子供だな」

アルバートは苦笑しながらそう呟くと掃除用具を片付け、ポケットの中にあるタバコを確認し、ゆっくりと玄関の方へと歩き出した。

[illegible]

アルバートは一足先に一人で小屋の外に出ると、近くにある小高い丘の方へゆつくりと歩いていき、到着するとその場に仰向けに寝転がった。

地べたに茂る青々とした草が、背中に当たってなんとも心地良い。

アルバートはその感触を楽しみながら、仰向けのままぼんやりと空を見つめ、ポケットからタバコを取り出してそれに火をつけた。

気持ちよいほどの澄んだ青空の中を、夥しい数の白雲が流れている。

「・・・いい天気だな」

アルバートはタバコの煙を空に向かって吐き、そう呟いた。

「・・・あの日、組織を裏切ってから6日・・・くらいか」

アルバートはそう呟き、ゴソゴソとポケットの中から十センチ程の正方形のケースを取り出した。

そして、そのケースの蓋を開けると、中には水色の液体が入った注射器が三本が姿を現した。

「まだ・・・大丈夫みたいだな。・・・残り三本・・・か。・・・いつまで持つかな？」

ザア・・・

アルバートそんなことを呟いていると、風がそつと吹く。

「・・・・・・そういえば、・・・・あの妙な声・・・・聞こえなくなつたな」

そう再びポツリと呟くと、しばらくの間、海の潮風に吹かれ揺れている草むらでアルバートは空をぼんやりと見つめていた。

[illegible]

アルバートが二本目のタバコに火をつけた頃、ゆっくりとこちらに近づく足音が聞こえてきた。

こちらに気づかれないように静かに近づこうとしているような足音だ。

アルバート…（あいっだな？…全く…最近、ずっと話して分かったけど…意外とはねっかえりな奴だよな…）

アルバートには誰が近づいてきているか自明の理であつたので、別段何かしようと思ひもせず、構わず仰向けのまま空を眺めていた。

少しして、仰向けになっているアルバートの頭の近くで足音は止まった。

次の瞬間。

「わっ！」

予想通りエミリアが大声をあげてアルバートの顔を覗きこんだ。

しゃがみこむ体勢をとって、こちらの反応に興味津々にうかがうエミリアの顔とブロンドの髪がアルバートの視界を覆う。

「・・・・・・・・・・」

アルバートは微動だにせず、まじまじと自分を見つめるエミリアの顔を呆れた目で見た。

「あれ？・・・・・・・・驚きませんか・・・・？」

アルバートのあまりの無反応さに、エミリアはキョトンとした様子で言った。

「そんなんで驚くわけ無いだろ・・・足音でバレバレだ」
アルバートはタバコを口にくわえたままそう言った。

「む・・・・・・・・」

残念そうにエミリアは繭をしかめる。

「・・・・・・・・ところで・・・・・・・・言っただい？」

「なんですか？」

エミリアはアルバートの顔を覗きこんだまま不思議そうに聞き返す。

「・・・・あんまり顔を近づけるな・・・・髪が燃えるぞ？」

「え？・・・あっ・・・わあっ！」

エミリアはアルバートの言葉にハッとして、飛び上がるようにして

アルバートから離れた。

そして、自分の髪の毛をパンパンと叩いて火を消すような動作を取った。

「・・・も、・・・燃えてませんか？」

エミリアは髪をアルバートに見せながら、不安そうな声を上げて確認を求めた。

「ああ・・・かろうじてな。・・・ただちょっと焦げてるな」

「えっ！？ Σ（□；）」

「・・・うそ」

アルバートはニヤリと笑いながらそう一言だけ言った。

「~~~~！！」

エミリアは騙されたことに気づき、頬を膨らませてキッとアルバートを睨みつけた。

「ぷっ・・・あっはっはっは！」

アルバートは火のついたタバコを口から手に持ち替えると、可笑しそうに笑い始めた。

「わ、笑わないでくださいよ！」

エミリアは恥ずかしそうに顔を赤らめ声を上げた。

「だってこんなバカ正直な反応取るなんて思いもしないだろう？・・・くっふっふ・・・あっはっはっは！！」

アルバートは笑いを堪えようともせず、可笑しそうに大声で笑っ

た。

「う・ ・ ・ ・ ・ も う！」

エミリアは不愉快そうに声を上げると、アルバートから2 mくらい離れた場所で座り込んだ。

[> <> . . . <> <> <> <> <> . . .]

アルバートはまだ笑いが止まらず、クスクスと笑っている。

「いつまで笑ってるんです？・・・それにタバコばかり吸ってる肺ガンになりますよ？」

エミリアは横目でアルバートを睨みながら皮肉たつぷりにそう言った。

「くふっふっふっふ・ ・ ・ほっとけ。 ・ ・ ・俺の勝手だ」

アルバートは笑いを堪えながらそう答えた。

「もう・・勝手にしてください」

エミリアはプイっとそっぽを向き、丘の向こうに広がる海の景色に視線を向けた。

しばらくの間、アルバートの笑いが治まることはなかった。

[illegible]

時間が流れ、ようやくアルバートの笑い声も治まり、辺りは潮風で揺れる草木の音に支配された。

だが、依然としてエミリアは不機嫌そうに海の方をじっと見つめている。

「・・・分かったよ。・・・俺が悪かった。・・・だから機嫌直せって・・・な？」

「・・・」

エミリアは一向に耳を貸そうとせず、全く反応を示さない。

「・・・吸うか？」

アルバートは仰向けに寝そべったまま、冗談交じりに新品のタバコを一本エミリアに差し出した。

「いりません。・・・いい加減にもうからかうのはやめてくださいよ」

「わるいわるい。もう止めるよ。・・・だから機嫌直せって」

「・・・どうしましょうかね」

「何だその目は・・・俺にどうしろっていうんだよ？」

「じゃあ質問してもいいですか？」

「またあ？・・・もう何度もしただろ？」

「何言ってるんですか！ちゃんと質問に答えてくれたのは初日だけじゃないですか！・・・後は“そんなこと聞いてどうする？”とか“聞いても無駄だ”とか“面倒くさい”とか言って、ちゃんと答えてくれた試しがないじゃないですか！」

「・・・そうだっけか？」

「とぼけても無駄です！・・・さあ！今回はちゃんと答えてもらいますよ！」

「はいはい・・・わかったよ」

アルバートは観念したようにそう言った。

アルバート・・・（まさか4日でこうも豹変するとはな・・・いや・・・元々はこういう性格だったのかもな。・・・まあどうせ他愛も無い質問だろう・・・）

「それじゃあ質問です。・・・好きな勉強の科目は？」

ほらやっぱり他愛も無い質問だ、とアルバートは心の中で呟き、その質問に答えた。

「勉強自体あんまり好きじゃなただけだな。・・・まあ強いて言うなら数学だな」

アルバートはこれ幸いと自分の一番得意な教科の名前を出した。

大抵の女性はこの手の話に興味関心が薄い。

アルバートはこう答えておけばもうこれ以上追及されなかったのだ。

「へえー・・・数学ですか。・・・具体的にどんなこと勉強してるんです？」

そんなアルバートの予想をよそにエミリアはさらに質問した。

アルバート・・・まだ諦めないか・・・

「今はそうだな・・・行列の一次変換、微分積分の応用、微分方程式に、あとはそれらをひっくりくるめた応用問題ってところか。・・・まあ・・・細かいものもあげれば、コーシー・シュワルツの不等式とか、アフィン変換とか、・・・まあ後は、さわりだけで言うならパップスギュルダンの定理だとか・・・挙げればキリがないな・・・」
一通り高校数学程度のレベルを修了していたアルバートは、わざと自分が今まで勉強した難しそうな用語を、分野を無視して羅列した。

「・・・びぶんに・・・コーヒーしゅわるつに・・・マフィンヘんかん？」

「アフィンだ、ア・フィ・ン！・・・三つ中、なんで二つも食い物みたいな名前になってるんだよ。・・・とにかく！・・・そんな感じだ」

アルバートは面倒くさくなり、そう強引に完結させた。

「えー・・・それじゃあよく分かりませんよ。・・・もっと簡単なはないんですか？」

エミリアは、まるで子どもが玩具をねだっている時の様な声で、しつこく迫った。

アルバート…（ぐ…し、しつこい（――；）。…そんなその場で理解できるような簡単な内容なら勉強にならんだろうが。…でもここで“無い”って答えたらまた不機嫌になりそうだしな…。…仕方がない…。あれでいくか）

「もっと簡単なもの…か。よし…じゃあ、教えてやるよ。…エミリアは好きな数はなんだ？」

「へ？…好きな人ですか？こんな出会いが少ない私に、そんな人いるわけじゃないじゃないですか」

エミリアは少し照れた様子で答えた。

「アホ…誰がボケろと言った？…好きな数だ、す・き・な・か・ず！」

「え？…あ、な〜んだ…好きな数ですか」

「…そうだ」

アルバートは、呆れた様子で溜息をついてそう言った。

「え〜つと…じゃあ…7で」

「7だな？…よし、ちょっと待ってろ」

そう言って、アルバートはなにやら考え込み始めた。

エミリアはその様子を不思議そうに見つめている。

しばらくしてアルバートは「よし、できた」と言って、その場で上半身を起こした。

「どうしたんですか？」

「準備ができたんだよ・・・それじゃあ始めるぞ」

「え？・・・あ、はい」

「それじゃあ、7以外で今度は自由に数字を思い浮かべて・・・オレに分からないようにな。・・・あ、それとあんまり大きい数だと後で面倒だぞ」

「？・・・はい・・・思い浮かべました」

「よし、それじゃあその思い浮かべた数に1を足して」

「・・・はい」

「そしたら、それを2倍する。」

「・・・はい・・・」

「次に8を足す。」

「・・・は・・・はい」

「そしたらそれを半分にする。」

「・・・は、は・・・い？」

「おい・・・計算できてるか？」

「で、出来てますよ！失礼な！」

「あっそ・・・じゃあ続けるぞ。・・・それに2を足す。」

「・・・はい」

「最後に、最初に思い浮かべた数字を引く。」

「え、・・・最初？・・・えと・・・あ！・・・は、はい。・・・引きました。」

「その数字を俺が当ててやる。そうだな・・・お前の好きな数字だろ？」

「え！？」

「・・・なんだ？・・・ちがうのか？」

「い、いいえ・・・確かに7です・・・でもどうして分かったんですか？」

「・・・それが数学さ。・・・まあこれなら・・・中学生以下の知識でできる。」

「へえ・・・数学って不思議ですね」

「まあな。・・・こういうところが面白いのさ」
アルバートは座ったまま、海の方を見つめて言った。

「・・・・・・」

エミリアはアルバートのその様子をじっと見つめる。

「・・・・なんだ？」

アルバートは、ジロジロと自分を見つめるエミリアを気味悪そうに見つめた。

「・・・・ちょっと意外だなんて思ったんですよ」

「なんでだよ？」

「だって、アルバートさんって何時もボケーっとしてて何考えてるのか全然分からないじゃないですか。・・・・だからこういうものに興味があるんだなって思ってたんですよ」

「ボケーっとしてて悪かったな。・・・・それに別に特別に興味があるわけじゃない。・・・・勉強の中で好きなものと言われたからそう答えただけだ」

「でも、さっきの数学の話してるときのアルバートさん、なんだか楽しそうでしたよ？・・素直じゃないですね」

「ほっとけ」

そう言うときアルバートはその場に再び仰向けに横たわった。

「・・・・」

その様子を、エミリアは少し嬉しそうに見つめていた。

[illegible]

――私たちが生活するようになってもう４日経った。

―――初めて会話したときもそうだったんだけど、アルバートさんは表情をあまり表に出さないから何を考えているかよく分からない。

——会話も素っ気無い感じだし。

でも、最近分かったことがある。

それは、アルバートさんの話し方だ。

——— アルバートさんと話し始めた頃は、「君」とか「だ
が」とか、敬語じゃないんだけど、どこか儀礼的で変な話し方をし
ていた。どうやら、私と同じであまり人と話すのが得意じゃないみ
たいだ。

でも、アルバートさんは最近ではよく「お前」とか「だろ」とか、私に対する話し方が少し変わったみたいだ。

———もしかしたら、少しは私のことを認めてくれたのか
もしれない。

なーんてね。

――私の気のせいだよね。

――でも。

――・・・そうだったらいいな。

「・・・・・・」

エミリアは口元に薄い笑みを浮かべながら、アルバートの方を見た。

「・・・・なにニヤけてるんだよ？」

気味悪そうにアルバートは言った。

「べつに・・・・なんでもないですよ」

「・・・・？」

エミリアの様子を見て、アルバートは不思議そうに首をかしげた。

そして、しばらくの間。

エミリアは街の向こうに広がる海原を。

アルバートは青く澄んだ空を。

ただ、黙って眺めているのだった。

|||||

|| || || || ||

しばらく、時間が流れた。

アルバートは話が途切れてから、空を見つめたまま何も話そうとしない。

そうしているうちに、エミリアが落ち着かない様子でアルバートの方にチラチラと視線を送り始めた。

「今度はなんだ………なにをそんなにソワソワしてるんだよ？」

見るに見兼ねたアルバートがそう聞く。

「だって何もすることが無いんですよ？…ソワソワしますよ。屋敷にいるときはこんな暇な時間はそう無かったし……」

「落ち着きの無いやつだな………その辺を散歩してきたらどうだ？」

「え？…一人で行ってもいいんですか？」

「……あんまり遠くには行くなよ。……今日は新月だ……夜は視界が悪くなるから……夕方までには帰ってこいよ」

「あ、……はいっ！」

エミリアは嬉しそうにそう返事した。

その雑木林は青々とした広葉樹が生い茂り、町の向こうに広がる海に平行になるようにして広がっていた。

地理的な位置は海側から見れば丁度、海・・・港町ナポリ・・・町から丘へと続く緩やかな坂・・・分岐点があつて、一つは雑木林の方に続く道、もう一つは二人が生活している小屋のある丘に続く道に分かれている。

だいたいそんな配置になるだろう。

雑木林の中は鳥のさえずりがいたるところで木霊し、足を一步一步踏みしめるたびに地べたを覆う腐葉土の感触が靴を通して足の裏全体に伝わってくる。

生い茂る木々の隙間から、高々と上った太陽が放つ柔らかな日の光が降り注ぎ、なんとも心地がよい。

しばらくの間、エミリアはそんな中をゆつくりと歩き続けた。

[illegible]

歩き始めて二十分ほど時間が経った。

「・・・それにしても、散歩なんて本当に何年ぶりだろう?・・・やっぱり、気持ちいいな」

エミリアはそう呟くと、その場で足を止め、ゆっくりと深呼吸をした。

「・・・いいにおい・・・近くにこんな所があったなんてね。後でアルバートさんにも教えてあげよつと」

エミリアはそう言って辺りを見渡し、薄く笑みを浮かべた。

「・・・この森・・・何処までつづいてるんだろ・・・?」

エミリアは雑木林の奥を少し見つめた後、再び歩き出そうと足を踏み出した。

その時だった。

ふと何か黒い物体が視界の右端で動いた。

「・・・?」

エミリアはすぐにその黒い物体の存在に気づき、それに視線を向ける。

その物体までの距離は25mといったところか。

大きさはとても小さく、せいぜい全長40cmといったところで、人ではないのはすぐに分かった。

その物体は全身真っ黒な毛で覆われ、これまた黒くて長い尻尾をクネらせながら四本の足でソロソロとエミリアの視界を横切ろうとしていた。

「んん？………あ！……黒猫だ〜♪」

エミリアはその物体の正体を確認するや否や、目を輝かせた。

というのも、エミリアは大の猫好きなのだ。

声でエミリアの存在に気づいたのか、その黒猫は進行方向に体を向けたまま、顔だけをエミリアの方に向け、その場でピタリと立ち止まった。

よく見ると赤い鈴のついた首輪をしていたので、どうやら誰かの飼い猫のようだ。

「………」

黒猫は黙ったまま、長い尻尾をゆらゆらと振りながらエミリアの様子を窺っている。

「あ、止まった！待っててくれるの？かわいい〜」

エミリアはその様子を見てさらに嬉しくなり、早足でその黒猫の方へと歩き出した。

「……！」

すると、エミリアが近づいてくるのに驚いたのか、黒猫は急に身を翻し一目散に森の奥へと駆け出した。

「えっ！？Σ（□；）……あ、ちょっと……待って……」

エミリアは、急に逃げ出した黒猫を慌てて呼び止めようと声を上げる。

しかし、黒猫にそんな言葉が分かるはずも無く、さすがは猫だけあ

ってアツという間に雑木林の奥へと姿を消してしまった。

「・・・そ・・・そんな全力で逃げなくても・・・。私・・・こう見えて結構、動物には好かれるタイプだと思ってただけだな・・・ちよつとショックかも・・・。（―――＃）」

エミリアはそう言って顔を地面に向けガックリと肩を落とした。

少しの間、エミリアはその場で落ち込んだまま立ち尽くしていたが、すぐにハツとして顔を起こした。

「ううん、いけない。・・・こんな所で諦められるもんですか！・・・猫、待っててよ！今行くからね！」

エミリアは何を勘違いしたのかわからないが、まるで誰かと話しているかのようにそう叫ぶと、自分がワンピースを着ているのも忘れて、猫が姿を消した雑木林の奥の方へ猛然と走り出した。

10分ほど走っただろうか。

しばらくして、雑木林が途中で途切れ、ひらけた小さな円形の草むらが姿を現した。

その草むらは、周辺こそ雑木林で覆われているが、中心部は誰かが木を引っこ抜いてしまったのかのように木という木が無くなっている、まるで公園の広場のようだった。

地面には、あの小屋の前に広がっていた丘に生えていたのと同じような雑草が生い茂っている。

そして、エミリアから見て丁度海のある方角に向かって広がっている草むらの端に、ひととき大きな木が、まるで草むらと周辺を囲う雑木林とを分断するかように伸びている。

「はぁ・・・っ・・・はぁ・・・」
特に持久力に自信があるわけでもないエミリアは、草むらに出るとすぐに体力の限界を迎えた。

そして、余りの苦しさに思わずその場で立ち止まって両膝に手をつき、腰を曲げて休憩の姿勢をとった。

「っはぁ・・・はぁ・・・っ・・・はぁ・・・もう・・・どこいった・・・のよ・・・猫・・・っ・・・」

エミリアの額からは大量の汗が滴り落ち、生い茂る草に汗の雫が当たって葉がゆらゆらと揺れている。

「・・・っ・・・はぁ・・・はぁ・・・っ・・・」

エミリアは、呼吸を整えつつ辺りを見渡した。

しかし、そこには雑木林に囲まれた草むらが広がっているだけで、黒猫の姿は何処にも見当たらない。

「はぁ・・・っ・・・はぁ・・・っ・・・あの猫ったらどこいったのよ・・・」

・ ・ ・ うわあ ・ ・ ・ 髪はクシヤクシヤだし ・ ・ ・ 服も汗でグシヨグシヨ ・ ・ ・
 ・ ・ ・ こんな ・ ・ ・ ないよ」

そういいながら、息も絶え絶えの様子のエミリアは、乱れた髪をやつとの思いで整えた。

しかし、少し時間が経っても上がった息だけは、なかなか治まる様子がない。

「はあっ・・・はあっ・・・でも・・・もう・・・限界・・・」
「#」

エミリアはそう言うと、その場でペタリと座り込んでしまった。

[illegible]

「
.
.
は
あ
.
.
.
.
.
は
あ
.
.
.
.
.
.
.
ふ
う
.
.
.

しばらくしてようやくエミリアは呼吸を整え終えた。

それと同時に、海側の雑木林から柔らかな磯の香りを含んだ風が吹いてきた。

「ふう……気持ちいい。……猫は見失っちゃったけど……運動した後のそよ風はまた格別ね」

そんなことを呟きながらふとエミリアは風上の雑木林の奥に、僅かに見える海の方に視線をやった。

その時。

ふとその海側の雑木林の入り口に立つ、ひととき大きな木が目に残った。

「……なんか妙に大きな木ね……周りの木より頭一つ分であって……何の木なんだろう？……って……あれ？……あゝゝ！！」

エミリアがその木を根元から上に向かってゆっくりと見上げていると、途中で見覚えのある物体を見つけて、思わず声を上げた。

そう、それは先ほど取り逃がしてしまった黒猫に間違いなかった。

黒猫はその木の上方にある枝の上で行儀良くしゃがみこみ、時折長い尻尾をゆらゆらと振りながら静かに海の方を見つめている。

「み・つ・け・たゝ！……今度こそ逃がさないわよ！……というより、頭を撫でただけだったんだから逃げなくてもよかったのに。よし……今度こそ……」

エミリアはそう言いながら気づかれないよう、ゆっくりしのび足でその木の方へと近づいた。

そして、数分ほどかけてエミリアはようやくその木まで数メートルという所まで近づいた。

「……ゆっくり……慎重に……」

エミリアは細心の注意を払いながらさらに足を進めようとしていた。

するとその時、黒猫がそれに気づいたのか海のほうに体を向けたまま、顔だけクルリと後ろに向け、エミリアに視線を送った。

「あっ！Σ（□；）・・・気づかれた・・・」

エミリアは、黒猫とバツチリ視線が合ってしまいその場でピタリと固まる。

「・・・・・・・・・・」

黒猫は、少しの間じつとエミリアのことを見つめていたが、しばらくしてサッと視線を前に戻し、また海を眺め始めた。

「な、なんか見ちゃいけないものを見てしまったって顔されたような気がするけど・・・た・・・助かった・・・。ふっふっふ・・・ようやく観念したようね・・・」

エミリアは、自分の勝利を確信したのか不敵な笑みを漏らした。

「・・・・・・・・そーっと・・・・・・・・そーっと・・・・・・・・よーし・・着いた」
数歩ほど歩いてようやく目的の木の下にたどり着いたエミリアはホッと胸を撫で下ろした。

「・・・・・・・・たどり着いたはいいけど・・・どうやって登ろうかな？・・・私・・・ワンピースだし・・・」

エミリアはそう呟くと辺りを見渡し、他に人がいないか確認した。

「・・・・・・・・よし！・・・誰もいないわね。・・・と、いうよりこんな所私以外に来るわけないか。・・・よし・・・それじゃあ猫、覚悟しなさいよ」

エミリアはニヤリと笑うと、木の枝を手で掴み、その木を登り始めた。

しかし、エミリアは人生において今まで木登りというものを体験したことが無かったので、まるでカタツムリが地面を這うかのようなスピードでしか登ることができないでいた。

「な．．．なかなか手ごわいわね．．．でもこんな所で諦めるもんですか．．．猫、今行くよ!」

エミリアはそんなことをブツブツいい続けながら、しばらくの間、木登りに悪戦苦闘をしていた。

[illegible]

それから数十分後・・・○

執念が実を結んだのか、エミリアはどうとう念願の黒猫まで後数十センチというところまで上り詰めることに成功した。

「あと少し・・・あと・・・少し・・・もう少しいゝ・・・」
エミリアはそう呟きながらジリジリと黒猫との距離を詰めていく。

•
•
•
•
•
•
•

しかし、エミリアがこれだけ近づいても黒猫はうんともすんとも反応を示さず、依然として黙って海の方を見つめている。

そしてようやくエミリアは、黒猫が手の届く所にたどり着き、ゆつ

くりと黒猫の頭に手を伸ばした。

「動かないでねっ……ちよっつと撫でるだけだから……」
そう言っただけでエミリアの手が、もう黒猫の頭を捉えるという寸前のところまで来た。

その時だった。

黒猫は突然、顔を素早くエミリアの方に向け、ジロリと睨みつけるように視線を送った。

「うっ……（――；）」

エミリアは、おもちゃ思いつき黒猫と目が合ってしまった、黒猫の頭を捕らえる寸前の所で固まってしまった。

「……」

黒猫は、明るい所で見せるその特有の縦に細い瞳の目で、固まったまま動かないエミリアの顔をさらにジッと見つめている。

「……あは……あははは……ども……」

エミリアは思わず作り笑いをしてその場の雰囲気をごまかそうとした。

しかし、そんなものが猫に通じるわけではない。

「……ニャ……」

しばらく間を置いて黒猫はそう一度だけ鳴くと、ゆっくりと木を降りようと動き出した。

ところが、降りるには当然エミリアが邪魔になる。

「ちょ、ちょ、ちょ・・・ちょっと待って・・・そんな急に動かれても・・・どけないよぉ！」

エミリアは、猫が木を降りようとこちらに近づいてきたので慌てて制止を試みた。

しかし、さっきから繰り返すようだが、そんなものが猫に理解できるはずもない。

猫はゆっくりとエミリアの顔の近くまで近づくと、ひょいっとエミリアの頭の上に前足をのせた。

「い、痛いっ！痛いったらあ！・・・イタタタタッ！あ、頭の上で・・・つ、爪立てないでえっ！！！」

エミリアが悲鳴を上げる。

「ニャー・・・」

そんなエミリアをよそに黒猫はのんきに一声鳴くと、ノソノソとエミリアの頭やら背中やらを踏みつけながら下へと降りていく。

「イダダダッ！痛いッ！痛いッ！痛いつてばあっ！！！」

エミリアは背中で猫に爪を立てられ、ギャアギャアと悲鳴を上げ続けた。

「ニャー・・・」

黒猫はエミリアの体の上を渡り終えると、“ご苦労さん”と言うかのように一声鳴くと、あっという間に木を降り、雑木林の奥へと消えてしまった。

その場になんともいえない虚しい空気が漂う。

「うゝ．．．こ、こんなに猫にぞんざいに扱われた人間なんてイタ
リアの歴史上できっと私一人だよ．．．．．ひどすぎる．．．．
(一一一#)」

エミリアは、しばらくの間その場でただただ落ち込むばかりだった。

[illegible]

「はあ．．．もう最悪．．．．．もう猫は諦めて帰ろうつと．．．」

しばらくの間エミリアはくらくい気持ちで落ち込んでいたが、ようやく気を取り直し、木を降りようと試みた。が・・

「あ、あれ・・・登ってきたはいいけど・・・どうやって降りよう・・・（――；）」

エミリアは自分が置かれている状況をようやく理解し、ダラダラと冷や汗を流し始めた。

「……でも……こんな所でずっといたらアルバートさんに迷惑かけちゃうし……ここは、なんとしてでも降りないと……。大丈夫……そーっと降りれば……そーっと……。」

エミリアはゆっくりと下を確認しながら、登ってきたときよりさらにゆっくりと木を降り始めた。

「……大丈夫……平気よ……大丈夫……だいじょ……う」

っ!？」

先に降ろした左足を木の枝にしっかりとかけ、今度は右足を降ろそうと足場から右足を浮かせた瞬間だった。

バキッと何かが折れるような音がして、枝の上にのせているはずの左足の感触がまるで宙に浮いているような軽いものになった。

いや、“ような感覚”ではなくそれは紛れもなく足場を失ったその感覚に間違いはなかった。

エミリアの足場の枝が折れたのだ。

「わあっ!! キャアあああああああああああ!!」

エミリアは絶叫しながらものすごい勢いで木の上から滑り落ちていく。

そして、鈍い音を立てて枝にぶつかっては止まり、それを何度か繰り返してエミリアは地面にそのまま転げ落ちた。

「う・・・イタタタ・・・」

体のいたる所を擦り剥いたおかげで、エミリアはしりもちをついたような体勢のまま、その場で悶絶した。

「もう・・・今日はなんでこうも運が悪いのよ・・・・・・うゝ・・・
・いっぱい擦り剥いちゃったなあ・・・」

エミリアは自分の傷を確認し、その場で溜息をつく、立ち上がるうと地面に両手をついた。

「・・・っうあ!!」

突然、地面についた両手に激痛が走り、エミリア思わず声を上げた。

「・・・な、何？・・・い、痛ッ・・・！！・・・て、手首を傷めたのかな・・・？」

エミリアは両手を目の前で広げながらそう言った。

「・・・だ、大丈夫・・・足だけ動けばなんと・・・か・・・っうう
あああ！！」

そう言って立ち上がった瞬間、両足に先ほどよりもさらに激しい痛みが走り、エミリアはその場に崩れるようにして座り込んでしまった。

「う・・・うそ・・・手だけじゃなくて、・・・足も動かない・・・
・・・こ、これじゃあ帰れないよ・・・！」

エミリアは消え入りそうな声で言った。

「・・・でも・・・這ってでも帰らないと・・・！！」

エミリアはその場で力いっぱい歯を食いしげると、ゆっくり・・・ゆっくりとまるで“匍匐前進”^{ほふく}のような体勢をとったまま、もと来た雑木林の方へと進み始めた。

「・・・大丈夫・・・もしも暗くなっても・・・月の光があればなんとか・・・あ・・・！」

突然、エミリアは何か気づいたように声を上げた。

—————今日は新月で、夜は視界が悪くなるから・・・夕方
までには帰ってこいよ。

「あ・・ああ・・！・・そうだ・・今日は・・しん・・月・・」

「……早くしないと……夜が……夜が来る……!!」

そうしたら私……私……!」

エミリアは顔面蒼白で必死の形相をして、地面を這い続けた。

まるで、すぐそばまで来るとてもない恐怖から逃げようとしているかのよう。

[illegible]

何時間が経っただろうか。

太陽は地平線の向こうにもうほとんど沈み、僅かに漏れる夕日の光が辺りをかろうじて照らしている。

「はあ……っ……は、早く……帰らないと……夜が……夜が……！」

エミリアはもう大分前に雑木林の中に入り、それから数時間もの間、
 這うようにして薄暗い雑木林の中を進んでいた。

表情は恐怖で酷く引きつり、目からボロボロと涙が流れている。

――だから今まで私は、その秘密を他人に知られないように必死に守ってきた。

――でも、ある日それが屋敷の人にバレて。

――私の“闇に対する恐怖心”を知った屋敷の人たちは。

――私が、屋敷で仕事の不手際を起こすたびに、誰もいない暗くて広い物置に私を閉じ込めた。

――それ以来、私は不手際を起こすことに対してこれ以上ない恐怖心を抱き始めた。

――毎日、毎日、毎日、毎日、毎日、毎日、毎日、毎日、毎日、毎日。

――まるで、24時間銃口を額に突きつけられているような生きた心地のしない日々。

――私には悲鳴を上げること、逃げ出すこともできなかった。

――許されなかった。

――だから、あの日、アルバートさんにさらわれた時。

――恐怖心の中に、言い表せないもう一つの感情が胸のうちにあった。

—— やつとあの地獄から開放される。

—— 私は、一步自由に近づいたんだという。

—— その感情があつた。

—— それと同時に、この私の秘密を。

—— アルバートさんに知られるのが怖くてたまらなかつた。

—— わかつてる。

—— きつと、知られても酷いことはされない。でも。

—— それでも“万一”がとても怖くて怖くて。

—— やっぱり言えなかつた。

—— 言えなかつた。

—— でも、そんな悩みも今日で終わり。

―― ああ・・・散歩なんかするんじゃないかった。

―― 猫なんか追いかけるんじゃないかった。

―― ……でも、結局何処でどうしても結果は同じか。

―― そう。

―― どうせ私には頼るべき仲間も友達も何にもない。

―― きっと、無いんだ。

―― 最後に。

―― ちょっと・・・期待しすぎちゃったみたい。

―― もう、疲れたよ。

―― もういいや。

―― ここできっと死ぬんだ。

―― 私は。

―― 1人ぼっちのまま闇に包まれて。

「・・・う・・・」

エミリアの声はだんだんと小さくなり、彼女は涙でにじむ自分の視界が次第に暗くなっていくのがわかった。

全てを諦めかけた、その時だった。

・・・ミリア

何かの音が、エミリアの耳に僅かに届いた。

「・・・？・・・気の・・・せいかな・・・何か・・・聞こえる」

・・・エミリア

「声・・・なの？・・・だれ・・・？」

全身の力を振り絞りながらエミリアは小さく声を上げる。

「エミリア！！」

今度ははっきりと声が聞こえた。

「・・・あ・・・」

この声に聞き覚えがあった。

うつ伏せになっていたエミリアは、最後の力を振り絞って体を起こし、前方の声のする方に目を凝らした。

すると、少しして雑木林の奥から小さな灯りが近づいてきた。

「・・・!!・・・エミリア!」

その声の主は倒れているエミリアに気づいたのか、すぐさま彼女の元へと駆けつけた。

「っ!・・・ま・・・まぶし・・・」

エミリアに向けられたその光は、じかに顔に当たり思わずエミリアは繭をしかめた。

それと同時に、僅かだがエミリアは闇への恐怖心から解放され、体に力が入るようになってきた。

「おい!・・・こんな所で何やってるんだよ!?!」

そう声を上げて、エミリアの前に現れたのは紛れもないアルバートの姿だった。

「あ・・・アルバートさん・・・」

「お前・・・傷だらけじゃないかよ。・・・どうしたらこんな怪我するんだ・・・ったく・・・」

「すみません・・・すみません・・・すみません・・・」

エミリアは涙をボロボロ流しながら何度も何度も謝った。

「・・・話は後でゆっくり聞かせてもらってからな。・・・とにかく帰るぞ。・・・立てるか?」

エミリアの様子を見て、アルバートは声のトーンを落とし、ゆっくりとそう聞いた。

「は、はい・・・なんとか・・・っうああ!」

エミリアは心配をかけまいと無理やり立とうとして再び足に激痛が走り、へたり込んでしまった。

「おい、よせ・・・無理するな。しょうがないな・・・手は使えるか？」

「・・・あ、いえ・・・手も・・・」

「物もつかめないか？」

「あ・・・掴むくらいなら・・・なんとか」

「・・・そうか。・・・ほら、乗れ」

アルバートは、しゃがみこむとエミリアに背を向けてそう言った。

「え・・・あ・・・あの・・・」

「おぶってやるから掴まれって言ってるんだよ。・・・そんな強く掴まなくても平気だ。・・・軽く添える程度で大丈夫だから・・・ほら」

「は、はい・・・」

エミリアはオドオドしながらも、何とか背に乗っかり、アルバートの首に腕を組むようにして絡ませた。

「・・・よし。・・・立ち上がるぞ・・・せーの・・・っと」

アルバートはエミリアに衝撃を与えないようにできるだけゆっくりと立ち上がった。

「ッ！・・・」

エミリアは、それでもなお少し痛みが手足に響いたが、無理やり声を押し込んで堪えた。

「よし……。もうそんなに手に力入れなくても大丈夫だ。・・体を後ろに傾けたりはするなよ」

「は、はい……。すみません・・本当にすみません・・・こんなことになっちゃって・・・」

「……。過ぎたことだろ・・・気にするな。・・・それより、手が空いてるなら・・コレ・・持てるか？」

そう言って、アルバートは左手で背負っているエミリアの体を支えたまま、右手を後ろ手にしてエミリアの前にかざした。

その手には、15cmほどの長さの懐中電灯が握られていた。

その懐中電灯は今や世間に広く利用されるようになった、白色の発光ダイオードが使われているようで、透き通るような純白の光を放っている。

「はい……。これなら持てます。・・・えと・・・こんな感じで・・・大丈夫です・・・か・・・っ!・・・」

エミリアはアルバートから懐中電灯を受け取ると、痛みを堪えながらもそれでアルバートの前方を照らそうと試みた。

「おい……。やめとけ・・・手・・痛めてるんだろ？」

「でも・・・」

「……。このくらいならまだまだ見える」

「・・・でも」

「いいから、落とさないように抱えこんどけ」

「・・・はい・・・」

言われた通りにそれを抱え込むと、エミリアの眼前は僅かだが白い光に包まれた。

その瞬間、エミリアを取り巻いていた恐怖心がさらに和らいだ。

「・・・・・・」

エミリアは、涙でぬれた顔のまま、ホッと安心したように溜息をつく。

「・・・落ち着いたか？」

「はい・・・おかげさまで・・・大分」

「・・・そうか。・・・よかった」

「・・・・・・」

エミリアはその言葉を聞いて、泣きはらした目を擦りながら口元に笑みを浮かべた。

「・・・あのさ」

アルバートは少し間を置いて、切り出した。

「はい？」

「違ってたら違うでいいんだが・・・聞いていいか？」

「・・・なんですか？」

「お前、暗いのが苦手なのか？」

「!!・・・な、何いってるんですか・・・？そんな・・・そんなわけじゃないじゃないですか・・・」

エミリアはアルバートの言葉を聞いてビクリと体を振るわせ、そう答えた。

平常心を装ってはいるが、それとは裏腹にエミリアの心臓は激しく脈打っている。

「そうか・・・違うんじゃないんだ」

「・・・」

その言葉を聞いて、エミリアは再びビクリと体を振るわせた。

「・・・それにしても、少しホッとした。・・・お前が暗いのが苦手なら、もっと早くに迎えに行つてやればよかった・・・なんて思つてさ」

「!!!・・・そう・・・ですね。・・・残念でした・・・ね・・・」
懐中電灯を握り締めるエミリアの手に力が入った。

「・・・ああ、そうだな。・・・でも、よかった。・・・俺さ、一つだけ怖くて考えられない事あったんだけどさ・・・どうやらそれは俺の杞憂だったらしい」

「・・・怖いこと?・・・アルバートさんが・・・ですか?」

エミリアは、驚いた様子でそう聞き返した。

「・・・なんだ、その驚いたような声は?」

「え・・・だってアルバートさんに怖いものなんてないだろうなって・・・思ってしまったから。・・・ちょっと意外で・・・」

「・・・俺だって怖いことくらいあるさ」

アルバートは少し恥ずかしそうにポツリと言った。

「・・・なにが・・・怖かったんですか?」

「怖かったら無理に思い出さなくていいんだけどさ・・・お前さ・・・俺と会った日のこと覚えてるか?」

「!・・・はい・・・一応」

そう答えるのと同時に、エミリアの脳裏にあの銃口を向ける恐ろしい形相のアルバートの姿が浮かんで、身震いした。

「・・・あの日な?・・・あの日・・・俺は自分を思ってくれていた仲間達を裏切ってしまったんだ」

「!・・・やっぱり・・・そう・・・だったんですか」

「・・・ああ」

「・・・でも・・・そんな大切な人たちを・・・どうして裏切ったんですか?」

「・・・自分でもわからない・・・わからないんだ。・・・あの時、・・・あの妙な声がして・・・」

「・・・妙な・・・声？」

「あ・・・いや・・・それはどうでもいいんだ。・・・質問は俺の怖いものについてだったよな？」

アルバートは、咄嗟に話題を逸らした。

「・・・え？・・・あ・・・はい」

エミリアは、アルバートのいう“妙な声”についてのことも気になったが、今はさきほどの質問に意識を集中させることにした。

「それでな？・・・その時にわかったんだ」

「・・・何が・・・わかったんですか？」

「俺はあの日を境に・・・仲間が・・・俺にとって仲間がどれだけ俺という存在を支えていたか・・・その尊さが・・・身に染みてわかったんだ」

「・・・・・・」

「俺は孤独が好きだったじゃなかったんだ。・・・俺は・・・ただ、いつでも自分のことを気にかけてくれる仲間がいるっていう絶対的な安心感の中で、偽りの孤独感を感じてそれに酔いしれてただけだった」

「・・・・・・」

「・・・きつとただ、カッコつけたかっただけなんだ。皮肉なことに・・・本当の孤独になって初めて・・・俺はそれに気づいたんだよ」

アルバートは、気恥ずかしそうに小さくポツリと呟いた

「・・・・・・・・アルバートさん・・・・・・・・」

「・・・そうだ・・・だから俺は怖かったんだ」

「・・・・・・・・辛かったんですね・・・・・・・・」

「馬鹿！・・・違う。・・・そうじゃない」

「え・・・？」

「それはもう過去のことだ。・・・どんなに悲しんだって後悔したつてもう帰ってきやしない。そうだ・・・帰ってなんかこない」

「・・・じゃあ・・・一体何が・・・何が・・・怖かったんですか？」

「馬鹿・・・まだわかんないのか・・・」

「・・・・・・・・？」

「・・・俺は・・・お前が・・・やっぱり俺のことが怖くなって・・・逃げ出したんじゃないかって・・・そう思って・・・怖かったんだ」
アルバートは、急に顔を赤らめ、酷く恥ずかしそうに小さい声でポツリと呟いた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・え？」

その言葉を聞いたエミリアは、一瞬頭の中が真っ白になり言葉を失った。

「・・・だから・・・また・・・一人になっちまうんじゃないかって・・・思っただけになったんだよ・・・」

アルバートは、赤面したままボソボソと繰り返した。

「・・・あの・・・それって・・・」

エミリアは震える口元で、恐る恐る聞いた。

「・・・俺達・・・もう仲間だろ？」

アルバートはそうゆっくりと確認するかのように呟いた。

――嘘でしょ？

――これは・・・

――まるで私が心の底から欲しがっていたもの

――誰よりも欲しがってた・・・あの・・・！

「・・・うう・・・」

今まで、アルバートの背中の上で縮こまっていたエミリアの目から、再び大粒の涙が流れ始めた。

「・・・おいおい・・・泣くなよ・・・俺が困るだろ？」

アルバートは苦笑しながら、すこし嬉しそうに言う。

「ごめんなさいっ……!ごめんなさい……!ごめんなさい……!わた……私っ……!」

エミリアは今にも消えそうなか細い声で、何度も何度もそう繰り返した。

「……そんなに謝らなくていいんだよ。……お前が戻ってきてくれたんなら俺はそれでいいんだ」

「違うの……違うのお……!!……私、さっき……アルバート……にっ……嘘……ついっ……たの……!」

「……」

「私……暗いのがっ……暗闇がとつても……死ぬほど怖いのお……!」

「……馬鹿……最初からそういえばよかったんだよ。あの日、電灯消そうとしただけであんなに慌てるなんて……普通じゃないと思っただ。……下手な嘘つきやがって……まったく……」

「ごめん……ゴメンねえっ……!……だって、私っ……また……閉じ込められるかもって……思っ……どうしても……ここ、怖かったんだよお……!」

「……アホか……お前は。……俺がそんなことするわけ無いだろ……」

「ひっぐっ……うう……」

エミリアは溢れる涙を必死で手で拭った。

アルバートはエミリアを背負ったまま何とか雑木林を抜け、ようやく小屋の近くの丘にたどり着いた。

「・・・やつとたどり着いたな・・・」

アルバートは軽く溜息をついてそう言った。

「・・・・・・・・・・」

エミリアは、アルバートの背中に顔を押し当てたまま、口を開こうとしない。

「・・・まだ泣いてるのか？・・・もう泣くなって・・・」

「・・・・・・・・アルバート」

エミリアは、ポツリと彼の名前を呼んだ。

「ん？」

「私・・・一つ・・・アルバートに言っていない事があるの・・・」

「・・・なんだ？」

「・・・私・・・実は・・・」

「・・・実は？」

「・・・屋敷で雇われる前のこと・・・全然覚えてないの。・・・記憶喪失なの」

「・・・・・・・・・・！」

アルバートは少し驚いた様子で、後ろ目で背中の上のエミリアを見た。

「・・・そう・・・あの日・・・私は何かから逃げてた・・・と思うんだ」

「・・・・・・・・」

「そしてね・・・気づいたときには、屋敷の前で倒れてたの・・・それを、屋敷の人が拾って・・・それから私は屋敷で家政婦として仕事を覚えさせられたの」

「・・・なるほど。・・・あの日に“俺が特殊だ”っていうのを聞いたときに、お前が言いかけた“そんなこと・・・”っていうのは、これのことだったんだな・・・」

「・・・っはは・・・なんか不思議でしょ？・・・だって、私の屋敷に来る前の記憶は全然無くて、・・・まるで屋敷の前から私の人生が始まったみたいな感覚なんだ・・・。だから・・・自分の家族の顔なんか覚えてないし・・・ましてやそれまでに出会った人の顔なんか全然・・・。あっ、でもね？自分の名前が“エミリア”っていうのはなんでか覚えてるの」

「・・・偶然は重なるもんだな」

アルバートはそうポツリと呟いた

「え？・・・偶然って？」

アルバートの意味深な言葉にエミリアは思わず聞き返す。

「・・・一つはアルバート・クライストと・・・エミリア・クロ

「チエの・・・“クライスト”と“クローチエ”の縁、・・・それからもう一つは俺のこと」

「・・・縁？」

「ああ・・・クライストってのは英語で“キリスト”・・・クローチエはイタリア語で“十字架”を意味する。・・・キリストと十字架なんて切っても切れない縁だろ？」

「へえ・・・そうなんだ・・・うん、・・・そうだね。・・・そうならいいな・・・」

エミリアは口元に笑みを浮かべ嬉しそうにそう言った。

「・・・そしてもう一つは・・・」

アルバートは少し間を置いて続けた。

「もう一つは？」

「俺も小さくころの記憶がないってこと」

「！？・・・嘘でしょう？」

エミリアは思わぬアルバートの言葉に戸惑いの表情を浮かべる

「嘘じゃないさ。・・・俺は物心つく頃までのことを何一つ覚えてないんだ。・・・両親の名前も顔も知らないし・・・その頃いたかもしれない友達の名前も覚えていない。・・・このアルバート・クライストって名前も、俺が拾われたときに持っていたペンダントに彫ってあっただけで、本当に俺の名前かどうかはわからない」

「・・・」

「・・・驚いたか？」

「うん・・・少し・・・でも・・・なんか安心した・・・私以外にも同じ境遇の仲間がいるなんて」

「ああ、俺も安心した。・・・案外俺達・・・共通点が多いよな」

「ふふっ・・・そうだね」

「所でさ・・・俺に一つ考えがあるんだけど・・・いいか？」

「?・・・考えて？」

「・・・俺とお前は・・・俺が以前いた組織に命を狙われてる話は前したよな？」

「うん・・・聞いたよ」

「・・・悪いな・・・こんなことに巻き込んで」

「ううん、そんなことない。・・・だって、私あのまま屋敷にいたらいつか自殺でもしちゃいそうだったもの。・・・巻き込んでもらってラッキーだよ」

エミリアは一分の曇りもない笑顔でそう言った。

「そう・・・言ってもらえると・・・大分気が楽だ。・・・ありがとう」

「えへへっ・・・どういたしまして。・・・それで、アルバートの

考えてどんなことなの？」

「ああ・・・俺達、記憶喪失同士だし・・・一緒に元の記憶を探しに行かないか？」

「へ？・・・探しにつて・・・？」

「だからさ・・・イタリア中を、記憶を探しに旅して回らないかっていうことさ。・・・もちろん、生命優先だから組織から逃げるのを前提にな。・・・どうだ？」

「え、えゝ！？・・・イタリア中を！？」

エミリアはそれを聞いて目を輝かせた。

「やっぱり、それはキツいか？」

「そんなことないよ！そうしよう！・・・うん、行きたい！行きたい！私、屋敷の近くしか見たこと無いの。だから一度イタリア中を見てみたいと思ってたんだあ！」

「・・・本当にいいのか？・・・死ぬかもしれないんだぞ？」

「それはここにいたって一緒にしょ？・・・だったら、私は前に進みたいよ」

エミリアは、笑みを浮かべながらそう言った。

「・・・悪いな」

「謝らない！・・・ほら、何時もアルバートが私に言ってたことでしょ？それに・・・もう私たち一蓮托生みたいなものなんだからさ」

「・・・そうだな、・・・ありがとう。・・・それじゃあ、旅に出るの
で決まりだな」

「うん!・・・楽しみだな、最初は何処に行くの?」

「・・・お前、やっぱり旅行かなんかと勘違いしてないか? (――; ;
)」

「そうかな? どっちも一緒みたいなもんじゃない」

「・・・危険度が段違いだろう (――; ;)・・・それに、しば
らくここを離れることは出来ないな」

「え?・・・なんで? (・――?)」

「・・・一つは、まだ組織の警戒が強くて危険だということ。
・・・もう一つは・・・」

「もう一つは?」

「・・・お前の両手両足」

「あっΣ (□; ;)・・・」

「ふう・・・アホ。・・・しばらく安静だな」
アルバートは呆れた様子で溜息をついた。

「うゝ・・・折角楽しみにしてたのに・・・」
アルバートの背中の上で、エミリアはガックリと肩を落として言っ

た。

「・・・だったら、その怪我を早く治すことだな」

「はい・・・」

エミリアはしょんぼりした様子でそう返事した。

「・・・エミリア」

「・・・ん・・・何、アルバート？」

「よろしく」

アルバートは気恥ずかしそうにポツリと言った。

「!!・・・うん!よろしくっ!」

それを聞いたエミリアは、満面の笑みを浮かべ元気にそう言った。

アルバート・・・敬語・・・やっとやめたな

「・・・」

アルバートは、黙ったまま薄く笑みを浮かべると視線を前に戻した。

そしてしばらくして。

アルバートとエミリアの二人は、新たな決意を胸に自分達の住まいへと戻った。

「
・
・
・
・
・
・
・
普通の人間の友達は絶対につくるな
」

白い闇（後編）（後書き）

第6、7話の登場人物（「※」のマークは、話中の会話で名前のあがる人物です）

アルバート・クライスト

本作の主人公。

元は対テロ組織“スピーア”に所属していた、“アルマ”と呼ばれる特殊な構成員。

現在は、無意識のこととはいえ、仲間を裏切ったことにより組織を追われる身となった。

そのため、自分の素性を知らない人間には「コルティリーノ」という偽名を名乗っている。

特徴 髪は茶色のショート。瞳の色はグレー。

他のデータは“プロフィール・アルマ編”を参照のこと

エミリア・クローチェ

性別 女

年齢 18歳

身長 151cm

体重 42kg

特徴 髪の色はブロンドで、肩に届くくらいのストレートのロングヘア。瞳の色はアイズブルー。

詳細 アルバートが屋敷で遭遇し、彼が逃走の際に一緒にさらった少女。容姿以外、一切が謎に包まれている。

ルキアーノ・トルナトーレ

スピーアの一員で、アルバートの元教官。

初めてアルバートが会話を交わしたのが彼であり、アルバートのこ

とを一人の人間として扱ってくれた恩師でもある。

アルバートがスピーアの中で最も慕っていた。

アルバートに暗殺の手解きをしたほどの実力者で、周囲からもそのことで一目置かれている。

※ニツコロ

アルバートがナポリで交流を持っていた情報屋。

アルバートが、政府関係の人間だったとは知らない。

前回の話で、アルバートに一週間後仕事を紹介すると約束をした。

※マリー・フェルディナント

スピーアに所属するアルマの一人。

活発な女性で、アルバートと気軽に話が出来る仲。

※カテリーナ・マリウス

スピーアに所属するアルマの一人。

ある事件をきっかけに教官を失い、それ以来ずっと一人で塞ぎこんでいる。

アルバートやマリーに対し僅かながら心を開いている。

※エリオット・ロッセリーニ

スピーアに所属するアルマの一人。

自分の教官であるアリエーテを、とてもよく慕っている。

任務において時折残酷な性格を見せるが、普段はいたって普通の少年。

※シルヴィオ・ギベルティ

スピーアに所属するアルマの一人。

まだ作中には登場していないが、アルバートの友人らしい。
その素性は今の所不明。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8162b/>

Never look at the sun

2010年10月10日14時00分発行